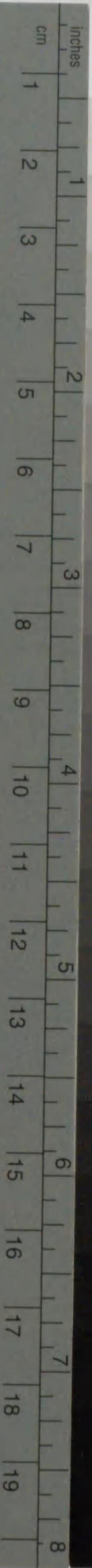
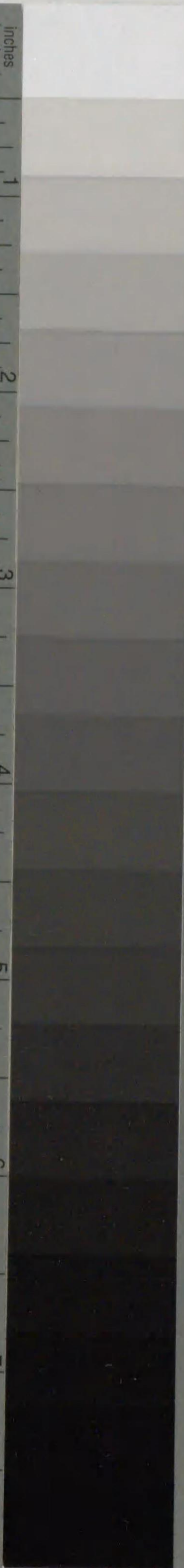


Kodak Gray Scale



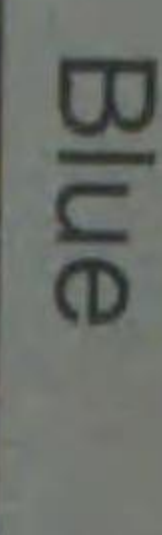
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

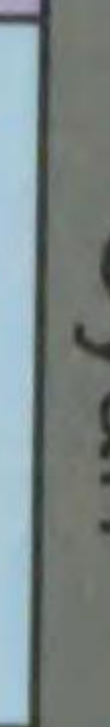


Kodak Color Control Patches

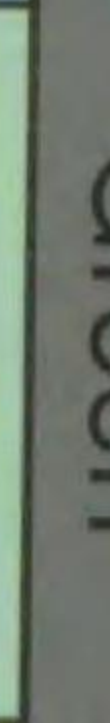
Blue



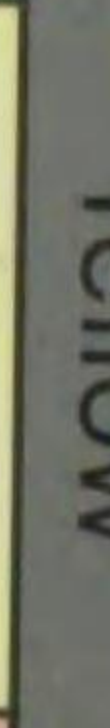
Cyan



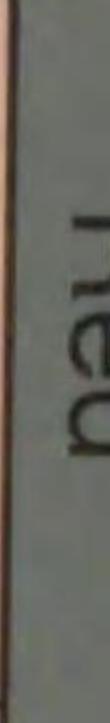
Green



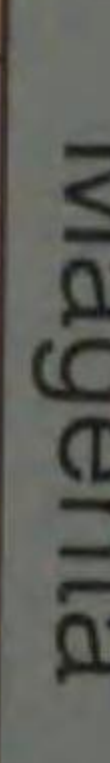
Yellow



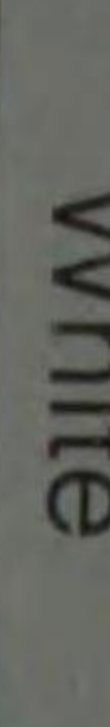
Red



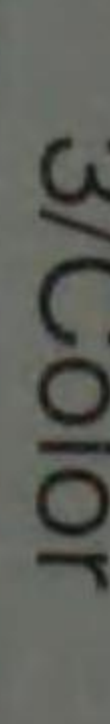
Magenta



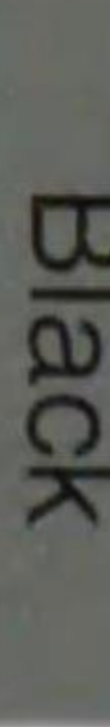
White



3/Color



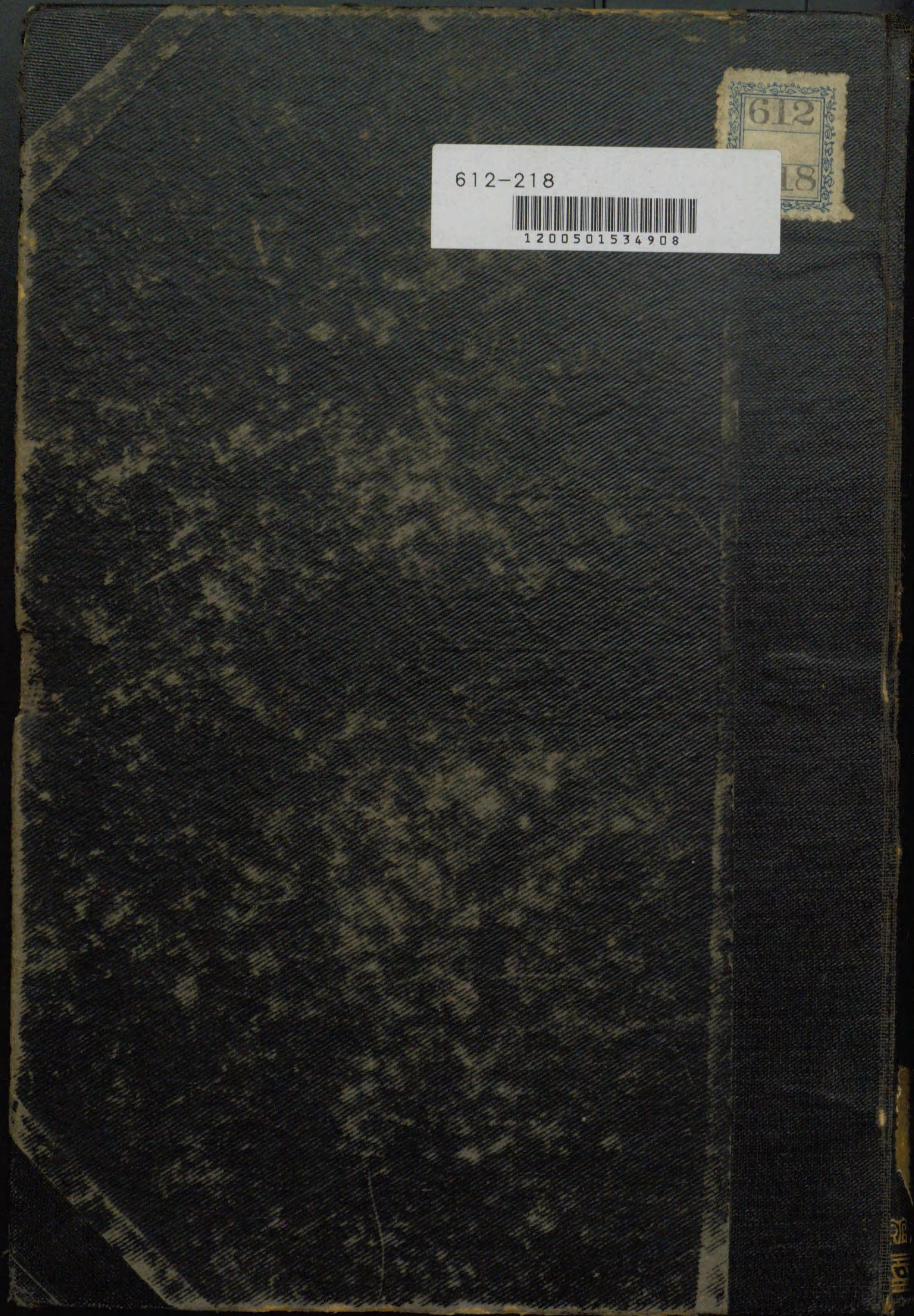
Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

612
18

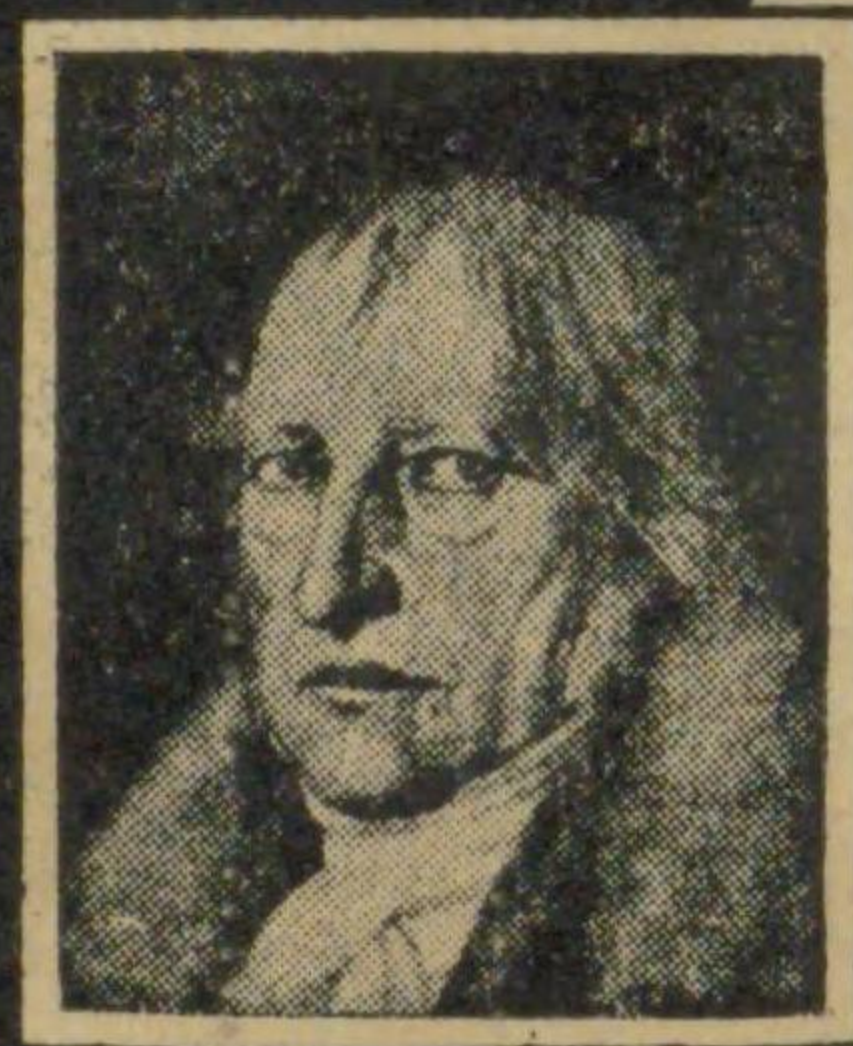
612-218
1200501534908



7.9.10

「ヘーゲル辯證法」批判

プロ科 ソヴェート 研究會譯



ПОД ЗНАМЕНЕМ МАРКСИЗМА

ヘーゲル百年祭紀念論文集

目次

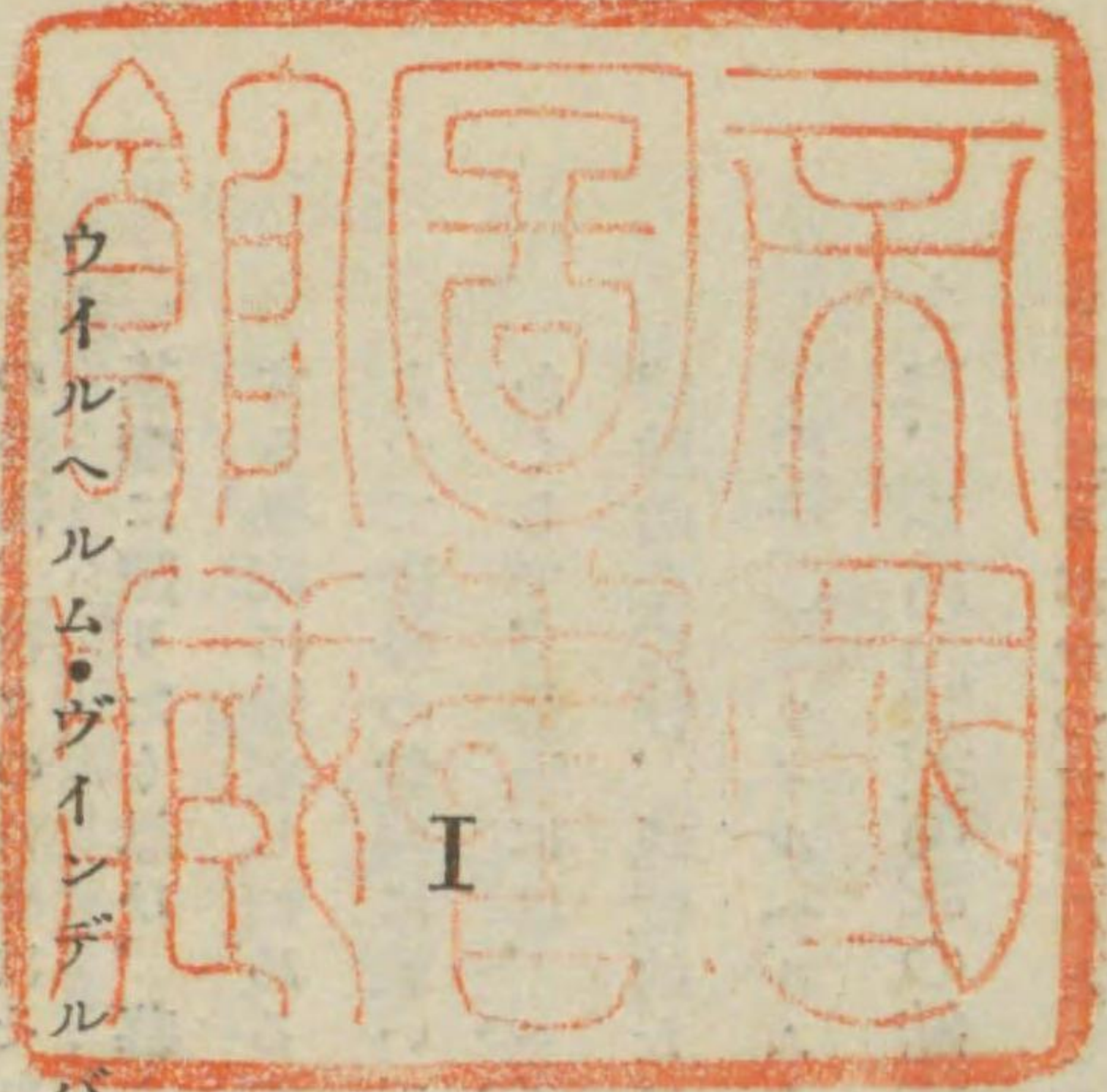
- ▼ヘーゲルをめぐる黨派的闘争に寄せて……………エム・エフ(一)
- ▼ヘーゲル現象學批判のためのテーゼ草案カール・マルクス(三七)
- ▼「ヘーゲル辯證法及哲學一般の批判」(一八四年)カール・マルクス(三九)
- ▼辯證法に關するレーニンの二つの斷片……………(六八)
- ▼マルクス・レーニン主義と辯證法……………アドラツキ(七八)
- ▼辯證法と社會民主主義……………ド・フォガラシ(二二三)
- ▼ヘーゲルと唯物辯證法の理論……………エム・ミーティン(二五)
- 次
- ▼哲學に於ける二つの戦線上の闘争とヘーゲル辯證法……………ペ・ユデイン(二六)
- ▼ブルジョアジのイデオログとしてのヘーゲル……………V・ラリツエヴィチ(二八)
- ▼ヘーゲル百年忌に寄せて……………全同盟戰國的唯物辯證法論者同盟本部(二七)

612-218

ヘーゲルをめぐる黨派的闘争に寄せて

——ヘーゲル百年忌に際して——

エム・エフ



「最近の哲學は、二千年以前と全く同じく黨派的である。(レーニン)

カール・ヘルム・ヴィンデルバンドが、一九一〇年四月十五日にハイデルベルクの科學アカデミーでなした祝祭演説は、全く新カント主義から新ヘーゲル主義への道に對する綱領草案なりと見られ得る。そのテーマは「ヘーゲル主義の革新」と言ふのであるが、その内容から言へば、當然に「ヘーゲルの助けをかりてのカント主義の革新」と言ふべきであつた。實際に、この祝祭演説の全體の内容と本來の意味は、次のやうなものであつた。即ち、カント主義は、觀念論を充分に防衛し、唯物論的自然科學に對する、唯物論に對する、マルクス主義に對する防波堤の役割をもはや充分に効果的には果し得ない。であるから、新カント主義は——これこそ全問題のより深い背景なのであるが——「ヘーゲルに還れ」とによつてのみ達せられる健康法と塗り換へとを要する、と言ふのであつた。「カントに還れ」といふ合言葉の傳令使で



あつたウイルヘルム・ヴインデルバンドが一九一〇年に更に改めて告知者の役割を引き受けた——けれども今度はヘーゲルに與して引き受けたのだ——時、それは新カント主義的觀念論の危機に外ならない。祝祭演説者が述べたヘーゲル主義の更生の『動機』に就いての數行を、ここに再録する必要があるであらう。

「我々の若い時代を捉へ、そしてヘーゲルにおいてその満足を見出してゐるものは世界觀に對する渴望である。我々は、ここでは、精神的状態のいかなる行動によつて、國民精神のいかなる體驗、全生活のいかなる宿命によつて、こういうやうな氣分が生れたのであるかの問題は問はぬ迄も、こういう氣分は到る處にある、またそれは根原的な力で爆發してゐる。我々の文學、我々の藝術、我々の科學はそれを到る處で認めしめる。そして、これらの人々が實證主義的貧困と唯物論的荒廢から精神的な生命の基礎に歸りたく思ひ、暮ふ時、そこには何ら新しい力強い哲學が提供されなために、宇宙を精神の發展として大規模に提示する學說に膠着し初めることを怪むべきであらうか？……加ふるに、その學說に貫き脈打つてゐる發展的な樂觀主義、それによつて世界の貧困に就いてのシヨウベン、ハウエル、の陰氣な説教を打ち負かすところの理性の世界に對する信賴がそこにはある。かくして、最後には、ニイチエが我々の國民を長く酔はした際限のない個人主義に對して、青年ヘーゲル主義的潮流に於いて精神的全體性、理性的なまた普遍妥當的な生命内容への献身が力強く勃興する。」(註一)

(註一) ウイルヘルム・ヴインデルバンド、「ヘーゲル主義の革新」。ハイデルベルク、一九一〇年、七頁。

また、その祝祭演説の結末に於いてとりわけ次のやうに述べてゐる。

「我々が立つてゐるところの興奮せる、また激情的に切り裂かれてゐる精神的状態から、高い多數の聲をなして、行爲のまた意志の哲學を求める叫びが我々の方へ響いて来る。」(註二)

(註二) 同書、一五頁。

觀念論的専門哲學者は、資本主義社會の事實的な社會的諸關係、階級闘争を、すべての自己の及ぶ限りの力を以つて神祕化し、そのことによつて彼が奉仕してゐる支配階級の利害を代表する職務を持つてゐる。ウイルヘルム・ヴインデルバンドは、そのヘーゲル主義の復興の『動機』の説明に於いて、全力を以つて戦争のために準備し、またそのための新らしい精神的武器を必要としたところの、大戦前の帝國主義的ドイツの利害を代表した。思惟と存在との、形式と内容との、存在と當爲との二元論を持つカント主義、神を『先驗的理念』として解釋するカント主義は、自由主義と自由主義的國際主義コスモポリタニスムの哲學としては少くとも妥當し得るが、ドイツの發展の帝國主義的時期には適せず、不充分になり、時代に適合しない。ホーヘンツォルレルンの帝國は、世界大戦のために準備した。その徹底的な帝國主義的プログラムと目的は××的勞働者階級の打倒をその必然的な前提條件とした。このドイツ・ブルジョア階級の帝國主義的「二重綱領は、そのイデオロギー的表現を『世界觀に對する渴望』のうちに、『行爲と意志の哲學』に對する力強い叫喚のうちに見出した。若い人々、即ちブルジョアの、また小ブルジョアの青年と所謂知識階級は、『實證主義的貧困から』、また『唯物論的荒廢』から、『精神的な生命の基礎に』歸りたいと思つた。——即ち、平時にあつては唯物論に反對する武器として役立つ皮相な實證主義、また更に××的プロレタリアートがそれに従ふ唯物論は、近くに迫つてゐる偉大なる『國民的』問題を前にしては無條件に退け去られねばならないか、或ひはまた唯物論の場合には最も烈しく征服されねばならない。『國民的』行爲力と意志力は、俗物的なシヨウベン、ハウエルの悲觀論も、またニイチエの小ブルジョアの『褐色の畜生』の個人主義も使用することを得ないし、またカントは不充分である。——自己の勞働者階級と異國、及び異國民を抑壓し、征服せねばならなかつたところの、ドイツ帝國主義の計畫的な大攻勢は、大規模な神祕化、この攻勢を最もよく隠蔽し得る哲學を求めた。また、實際に、人間の思惟の歴史は、現存するものをヘーゲルの哲學よりもよりよく神祕化するかに見える他の哲學を知らない。この特質のために、ヘーゲルの哲學は、ヘーゲルの在世時にあつても、また過

去の世紀の三十年代、また四十年代に至つてもドイツの流行であつた。資本主義社會の矛盾に満てる運動を、世界大戰の前後に於ける實踐的なドイツ・ブルジョア階級は決定的に感じた。かくして、實踐的なドイツ・ブルジョア階級は、再びヘーゲル辯證法の神祕化的側面を必要とした。

ヴインデルバンドの祝祭演説以來經過した二十年は、資本主義の世界に於ける矛盾を幾重にも尖鋭化した。ドイツ・ブルジョア階級は、大戰中に、「ドイツ觀念論」を、ドイツの輝ける哲學的過去を、極端にとり入れた。カント、フイヒテ、またヘーゲルの精神が多數の聲を以て想起せしめられた。そして、それらの人達の名に於いて、ドイツの勤勞大衆の巨大な犠牲が要求された。帝國主義的戰爭のすべての犯罪は、「ドイツ觀念論」によつて辯護され、神聖にされねばならなかつた。坊主ゲオルク・ラッソンは、一九一六年、「ヘーゲル主義とは何か？」といふ講演のなかで特に次のやうに述べた。

「そして、若しも現在まさに恐るべき世界大戰に於いて、ドイツ觀念論とドイツの現實感との不可思議な統一が歴史的にあらはれてゐるとすれば、我々の現在の精神文化の思想的基礎が置かれた當時に於いて、ドイツの觀念論とドイツの現實感を獨特にまた典型的に結びつけた思想家が、新しいドイツの精神的父達の一人としてすぐれた尊敬を受けることは理解される。」

(註三) ゲオルク・ラッソン、「ヘーゲル主義とは何か？」五、六頁。

坊主ラッソンは、ヘーゲルに於いて、恐るべき世界大戰に當つて、一つの「不思議なる統一」のうちにあらはれた、「ドイツ觀念論」と「ドイツの現實感」を畏敬した。簡単な率直な言葉で翻譯すれば、坊主的説教の意味は次のやうになる。即ち、我々は(ラッソン達は——譯註)ヘーゲルに於いて、その辯證法が現存する諸關係を最も聖化するかに見えると

ころの哲學者を畏敬する。我々は、(ラッソン達は——譯註)ヘーゲル哲學、このドイツ古典哲學の歸結を、ドイツ國民の「統一」を維持するために、戰爭を勝利に終らせる前提條件として缺くべからざるものであるところの階級闘争の制御のために、精神的武器として使用する。「ドイツ觀念論」、「ドイツの現實感」といふ言ひ現はしは、ヘーゲルに關聯して簡単なドイツ語にすれば、現實の觀念論的哲學的聖化と現存するものへの降伏を意味し、また勤勞大衆に關聯して言へば、階級闘争の際限のない犠牲と放棄を意味する。

數十年の長きに渡つて死せる犬として取り扱つたヘーゲルへの歸依、「ヘーゲルへの歸還」は、資本主義の帝國主義的時期のうちに深く根ざしてをり、近代ブルジョア社會の異常に増大した矛盾、階級闘争を反映してゐる。最近の十年間に於いてヘーゲルに對する、辯證法に對する關心がなほそれ以上にたかまり、新ヘーゲル主義者の數が増し、また彼等の聲が力強くなり、そのために殊に哲學的ドイツの姿が變形されつゝあり、またヘーゲルに對する關心がドイツ以外に於いても異常に増大するとすれば、その根據は、勿論、新ヘーゲル主義者がさう我々を信じさせようとしてゐるやうに精神の變遷のうちにもなければ、内在的な精神運動のうちにも、また「精神の歴史」のうちにもない。さうではなくて、本質的に、また原則的に、絶えざる矛盾を伴ふ帝國主義的大戰後の状態のうちに、帝國主義が體驗した、またより以上に、より深刻に、またより廣範圍に作用すればするほど遂には資本主義の現在の一般的危機にまで導いたところの社會的、經濟的震撼のうちこそその根據があるのだ。

理論的哲學的には唯物論的辯證法の勝利を意味する大戰後の時代の最も偉大なる事件である曾てのロシアに於ける勝利に満ちたプロレタリア革命は、本源的な力をもつてブルジョア階級のイデオロギー的代辯者をして、マルクスとエンゲルスとが「顛倒した」ヘーゲルの辯證法に注意を向けしめ、この「顛倒」をどうにでもして否定し、辯證法を再びブ

ルジョア階級の利益のためにその神秘化する形態に於いて利用せんとする試みに彼等を押しやつた。以前のツァールの帝國に於けるプロレタリアートの世界史的勝利を目睹し、世界の隅々に於けるマルクス・レーニン主義の勝利に満ちた前進を目睹して、ブルジョアのイデオログ達は、もはや辯證法を嘲る「贅澤」を許されない。

「科學的精神は」、——とヘーゲル聯盟の代理人、リハルト・クローナーは書いてゐる。——「非常な緊張をもつて、精神が用心深く避けてゐた世界觀の中心的問題に向ひ初めた。精神は、哲學は「内容」を持たねばならないといふことを再び要求し始めた。……我々の時代が形而上學的問題の科學的解決を求めてゐるといふこと、我々の時代が思惟する精神の最深奥のうちに故郷を作らんとし、その生活感情と世界感情に對してこれに相應の概念的表現を作らんとしてゐるといふことは、一の公然たる秘密である。」(註四)

(註四) リハルト・クローナー、「カントからヘーゲルまで」第一卷、二四頁。

更に、他の箇所でも次のやうに述べてゐる。

「あらゆる現在が自己を自ら把握すべきであるといふこと、そしてそれにもかかはらず、*Philosophia Perennis* (不滅の哲學、エム・エフ)があるといふこと、これこそヘーゲルの確信であり、またこの點に關して私は彼の歸依者たることを告白する。我々の現在の永遠性を哲學的知にまでたかめることに成功するならば、我々がヘーゲルの體系に對してとるべき位置も決定し得られるであらう。また、それができなければ、この體系のあらゆる批判は弱い亞流達の雜談であり、困りものである。従つて、私はどういふ意味でまたどの程度に我々が今日猶ほ「ヘーゲル主義者」たればならぬかを言ふことを避けるとは言へ、私は私の歴史的敘述によつて現在の體系的思惟に對してもいささか功績を示したと信ずる。……私の本は、……ヘーゲルが我々にとつて、我自身の深奥の思想的開明にあつて指導者たり得るし、たらねばならぬことを示してゐる。」(註五)

(註五) 同書、第二卷、序文、十二頁、十三頁。

クローナーは、曖昧な言葉で語つてゐる。彼は、ヘーゲルに對する増大した關心と自己の興奮の眞の根據を隠さうと努めてゐる。けれども、次のことは明瞭である。世界觀の問題に對する、「内容」の哲學に對する、烈しい緊張、精神的「故郷」に對する憧憬、現在を永遠性にたかめる、即ちすべての結合が破れてゐるブルジョア社會を「永遠性の範疇」にたかめることに對する憧憬(何故なら、これこそクローナーの要求の意味であるから)——これは精神的危機の表示である。危機は、人々がそれを隠し了せるには餘りに進んでゐる。危機は、實際に「公然たる秘密」である。そればかりでなく、もう何の秘密でもあり得ない。救助、治癒を、クローナーは自己が指導者として選んだヘーゲルに求めてゐる。けれども、この際最も興味のあることは、クローナーがそれを極端に不確實にやつてゐることである。しかもそれは確かにヘーゲルの罪ではなく、ブルジョアの立場からは一般にもはや理解されない「現在」の罪であるといふことである。そのことは、リハルト・クローナーが「最も正しい」新ヘーゲル主義者たるやうに見えるから一層顯著である。數十年の長きに亘つてヘーゲルの辯證法を「野蠻な論理」として、手品、法螺吹きとして、悪口し、輕蔑し、嘲笑ひ、その教授をすべての無神、非倫、革命的活動の源泉として禁じて來たブルジョア階級が、客觀的狀勢の力によつて今一度「幸福」への試みをヘーゲル辯證法をもつてなすことを餘儀なくされたのは、歴史の辯證法の「奸策」である。そして、もしブルジョアと其の空論的代辯者達が再びヘーゲル辯證法によつて見放されるならば、それは再び客觀的歴史的發展の辯證法の「奸策」である。

II

我々は、この短い論文においてできる範圍で、若干詳しく、「名譽を恢復した」辯證法が、その名譽あるブルジョアの

代表者と「辯護者」に於いて、どんな姿をしてゐるかを調べやう。こゝでもまた、我々はウイールヘルム・ヴィンデルバンドから始めやう。彼の態度は西南ドイツ學派にとつて典型的であるばかりではない。「ヘーゲルへの轉向」に對する二つの理由が彼によつて擧げられてゐる。第一に、ヘーゲルが方法的に解明した人類の歴史に、彼の表現をかりれば、「諸文化科學の經驗が提供するところの歴史的宇宙^{コスモス}から、理性の諸原則をつくり上げる」ために、向ひ行くことの哲學にとつての必然性。所謂、ハイデルベルク學派の新カント主義（ヴィンデルバンド・リッケルト）がその主要な目標を歴史に向けるといふことは、既にそのことだけで危機の表示である。ヴィンデルバンド自身、「一種の奇怪な擴大化と粗雑化を以つて、人は一つの方法から、も一つの方法へのかの道をも一度通り抜けねばならない」（こゝでは、このことは、カントからヘーゲルに至る道を指す）と述べることによつて、自分で白狀してゐる。（西南ドイツ學派の子孫であるリハルト・クローナーは、また後にこの道をその有名な著書「カントからヘーゲルまで」において通り抜けやうとした。）第二の理由は、ヴィンデルバンドによれば、「批判主義」は遂に、「相對主義」に導き、「理性價值」の「消滅」に導くところの經驗的なるものを確認するに至つた、といふのである。（註六）人々がこの思惟過程に於いて、觀念論的塵埃から本質的なものを分離するならば、以上のことは、新カント主義もまた方法的には満足させ得ないといふこと、新カント主義の主觀主義的形式主義的な、また機械論的經驗論的方法是、蒐集された科學的材料の豊富を體系的に把握し得ないといふこと、また新しい哲學、新しい方法をどうしても作らざるを得なくなつたといふことの告白に外ならない。加ふるに周知の如く、新カント主義は種々なるマツハ主義的相對主義に對して無力に對立してゐる、このマツハ主義は、最近の數十年に於いて領土を奪取せんと試みた、そしてそれは新カント主義とヒューム主義が、また機械論的な平板な唯物論がこれに對して相應の抵抗を呈し得なかつた限り、効果なき試みではなかつた。カント主義は、完全に無力を示した。ひとり辯證法

的唯物論のみが、主觀主義、及び經驗論とその避け難い同伴者である相對主義と不可知論とに終末を與へ得るのである。レーニン^{レニ}ンは、鋭い眼眸を以つて自然科學の危機を見、その根據と深奥を發見し、また假借するところなき徹底さをもつて、カント主義、ヒューム主義及びマツハ主義をやつつけ、機械論的唯物論の制限性を明るみに出し、近代自然科學に、そこに立つてのみ自らの困難を解決することのできる辯證法的唯物論の道を示した唯一の人であつた。レーニンは、次のやうに述べてゐる。

「實際に、相對主義に關する唯一の理論的に正しい問題提起をマルクスとエンゲルスの唯物論的辯證法がなした。そして、そのことを知らないといふことは、不可避的に相對主義から哲學上の觀念論に導かざるを得ない。」（註七）

（註六） 前掲書、十一頁。
（註七） レーニン、「唯物論と經驗批判論」二二三頁、一四頁。

とは言へ、觀念論者ヴィンデルバンドにとつては、自然科學の危機が問題なのではなくて、その危機を彼が認めたところのカント主義が問題なのである。この危機に對して彼によつて擧げられた二つの理由は、それが既に二十世紀の最初の十年の終末にいかにも深く進展してゐたかを示すものである。加ふるに、新カント主義が歴史の領域に於いて一般に何物をも始める術を知らなかつたといふことは周知のことであり、そしてヴィンデルバンドによつてこゝでは終にただ謂はば確認的に證據立てられたのみである。「消滅」の前にある「理性價值」のために、新カント主義者は憂ひ、泣いてゐる。理性價值を、相對主義の流れから、即ち、ブルジョアの「秩序」、その經濟學とイデオロギーの不確實性と不恒常性の多かれ少かれの公然たる認定から護るために、あれこれの新カント主義者は、彼がヘーゲルとともに絶對精神の住家として見ることに既に賛意を表明したところの歴史の領域に避難した。「價值」形而上學者、カントの存在と當爲との二元論の勇士

は、ヘーゲルの歴史上の絶對的觀念論を自己の目的のために使はんとする。何故なら、カント主義者は、このやうにして實證主義から、カント主義が變性しそれへと進んでゐるところのカントからヒュームへの退却から逃れることが出来ると思つてゐるから。新カント主義は、救助の試みを企てる。本來救助の試みが問題であり、一つのイデオロギー的形物他のより高いそれへの順應が問題であつて、ヘーゲルの精神においてするカント主義の眞剣な反駁は問題でないことは、歓迎すべきヘーゲル主義に對しても「限界を定め」ねばならないとか、ヘーゲルの「理念の實體化」には賛成するわけにゆかないとか、ヘーゲルの辯證法、その「特質や悪質」に對しては「慎重な」態度をとらねばならない等々といふヴィンデルバンドの側からなされた警戒や忠告が證明してゐる（註八）。ヴィンデルバンドは「理性價値の聯關」を「吾々の理性諸機能」とは獨立に離して持ち、「理性價値」の絶對的「妥當」を得たいのだ。——簡單に言へば、ヴィンデルバンドは、ヘーゲルに於けるプラトリーのな理念の神話をヘーゲルの辯證法（たとへ、それが神秘的形態に於いてであれ）なしに、そして諸理念の聯關をその辯證法的運動なしに得たいのだ、即ちその靜學的、形而上學的聯關を得たいのだ。けれども、それはヘーゲル無きヘーゲル主義が可能なりといふに等しい。そして、事實多くの新ヘーゲル主義者の新ヘーゲル主義は、猫が獅子に似てゐると同じ位に、またその限りで、ヘーゲルに似てゐるだけである。吾々は、そのことを二、三の例ですぐに明らかにしやう。

上に述べた坊主ラッソンの主要命題は、次のやうである。即ち、「ヘーゲル主義は、包括的に貫徹された、完成されたカント主義である」（註九）。「カント主義の完成」を、ラッソンは、カントの感性と悟性、物自體と意識の二元論を除去したといふ點に見た。周知のやうに、新カント主義は數十年以來、主として、カント哲學の唯物論的要素を排除し、「物自體」を世界から取除かうとすることに従事してゐた。この點に新ヘーゲル主義は結びつき、その仕事を續行した。カ

ントは、純粹の觀念論者に變型させられる。他方、ヘーゲルはできるだけ主觀的觀念論者に落されねばならぬ。カントの「物自體」は、「精神なき」ものではなく、吾々の外に實存してゐるものでもない。「かく理解するならば、批判主義の判斷は、ヘーゲル主義の判斷と全く一致するであらう」（註十）とラッソンは述べた。ヘーゲルに就いて、彼は次のやうに言つてゐる。

「ヘーゲルの著作は、經驗の觀念論的構成であり、精神、自我、主觀、人格或ひは自己意識的理性の創造と啓示としての全現實性の築造である」（註十一）。

（註九） ゲオルク・ラッソン、「ヘーゲル主義とは何か？」ヘルリン一九一六年、一〇頁、傍點はラッソン。

（註十） 前掲書、一三頁。

（註十一） 前掲書、一五頁。

吾々は、こゝでカントとヘーゲルの誤解に同時に關係する。カントに於ける認識の客體は、理性自身であるとされ、他方、ヘーゲルの理性は「自我」として主觀化され、また宗教的なるもの、心靈的なるものが特に取り上げられねばならぬとされる。——カントから物質的なるものが追ひ出され、ヘーゲルに於ける客觀的なるものが除去され、かくして新ヘーゲルの御馳走がサービスのために用意されたのだ。

ヘーゲルの辯證法的方法を先驗的カントと宥和させることは、ラッソンにとつては同様に何らの困難ではない。解釋變更と歪曲の術は、正に全能的なものだ。カントの先驗的方法は、その重心を、主觀の構成による「客體形式の可能性」の證明のうちにも、「經驗の條件」の發見のうちにも有せず、却つてこの方法は「まさにヘーゲルにとつて哲學を意味したところのものを意味する、即ち、現實性の形態が成熟し、客體が形成されるときに初めて常にあらはれるところの世

界の思想として現實性の背後に動いてゐる認識』を意味する（註十二）。マールブルク學派の新カント主義者にあつては「客觀形成の可能性」に就いての問題を意味するところの「經驗の可能性」に就いてのカント的問題は、こゝでは更に進んで世界の思想の認識に就いての問題として解釋し直される。ラッソンは、新カント主義よりも「より徹底的」たらんとした。そして、カントがその二元論に即して、經驗の形式的な先天的條件として把握し、またマールブルクの新カント主義が客體形成の可能性として示した「先驗的なるもの」は、ラッソンにあつては理性の自己認識として理解される。ラッソンは、更に一步を進めて、カントの完全な觀念論的調變に向つて進み、マールブルク派の解釋によれば猶ほ依然として残つてゐる二元論の殘滓を除去しようとした。物自體が世界の中から取り去られた後には、その對立物たる先驗的なるものよりも適應的に變型されねばならない。何故ならば、カントの「吾々の外」のみならず、それと結びついてゐる先驗的思惟方法が「ヘーゲルの」解釋し直された時、その時初めて新ヘーゲル主義への道が開かれるのであるから。他方、ヘーゲルを「先驗哲學的に書き變へる」ことが試みられる。例へば、他の同様に名聲噴々たる「ヘーゲル主義者」であるヘルマン・グロツクナーは、その著書「哲學者の倫理的、政治的人格。ヘーゲルの精神の世界の變革に對する原則的研究」の序言のなかで次のやうに述べてゐる。

「ヘーゲルを先驗哲學的に書き變へるといふドルフ・ハイムの有名な要求は……私には未だ未完成の、勿論同様に困難な、しかもまた同様に人を引きつける問題であると思はれた、で、私の研究は「先驗哲學的に書き變へられたヘーゲル」の意味における「綱領草案」として親られることを望む」（註十三）。

（註十二） 前掲書二十一頁。

（註十三） ヘルマン・グロツクナー、本文に擧げた著書。チュートビンゲン、一九二二年、序文、六頁。

同一の事柄において、二つの側面から働きかけが行はれてゐる。けれども、吾々はまたラッソンに立ち還らう。

さて、最も重要な問題に入らう。しからば、ヘーゲルの辯證法、矛盾の論理はいかにして解釋し直さるべきであるか？ 非常に簡単に、即ち、判断の代りに推理が置かれることによつてなのだ。SはPであるは判断ではなくて、推理である。結び付ける力は、憐れな繋辭（接續詞）「である」のうちにはない。主辭と賓辭、認識と對象は、人々が判断の領域に動いてゐる限り、決して一しよにはならない。關係は、SとPがその中で契機であるところの推理として把握されねばならない。矛盾の命題を、ヘーゲルは、一般に彼に歸せられてゐるやうに拒絶したのではなくて、反對にそれを正しい効用にもたらししたのである。辯證法的方法にあつては、特殊なものをもその契機として指定するところの有機的聯關の概念からのすべての特殊なものも認識が問題なのである。それ故に、辯證法は、吾々が吾々の意識の内容として吾々のうちに擔つてゐるところの宇宙の映像を與へる。辯證法的方法は、吾々のうちに於いても、宇宙に於いて展開するのと同様に展開するところの概念の内在的運動に適合する。以上のやうに、ゲオルク・ラッソンは述べてゐる（註十四）。忠實に吾々によつて再録されたこのラッソンの思想過程の意味は、ヘーゲルにあつてびんからきりまで形式的な推理が問題であるといふこと、即ち、思惟の結合の他の仕方が問題なのであつて、もはや他の結合方法、矛盾の形式的命題のより徹底的な遂行が問題ではないといふことである。ヘーゲルの推理、ヘーゲルに於ける論理的な圖形は、一つのものが他のものから導かれ、從屬せしめられ、そしてヘーゲルの最後の根本命題に、一般者と特殊者の同一性、對立物の同一性、思惟と存在の同一性——従つてこの同一性は事實的に考へられてゐる——に、依據して居り、従つて實體的に考へられてゐるといふこと——このことは、何處にも述べられてゐない。そして、人間の實踐を論理的圖形の他在として觀るところのヘーゲルの「行爲の推論」に言及するだけで満足してゐる。それこそ、存在、自然を開明しないで、

存在、自然を客観的なるものとして、「自身のうちから解放する」絶對的、辯證法的觀念論である。論理的觀念は自然のうちに移行する、「けれどもこの存在する觀念が自然である」とヘーゲルは言ふ。レーニンは、こゝで次のやうに注意した。

「唯物論に全く近づいてゐる。エンゲルスが、ヘーゲルの體系は顛倒された唯物論であると言つたのは正し。」

(註十四) 同書の他の箇所、二三頁—二五頁。

ラッソンは、ヘーゲルにあつては「理念の他在」であるところの現實の世界、自然を、意識のうちへ蒸發した。主観は、ラッソンによれば、宇宙の内容を自らのうちに擔つてゐる。それで、主観は、この内容を、即ち宇宙を開明するために、推理の正しい術を必要とする。従つて、辯證法はもとから主観的方法であつて、それによつて事物、宇宙は推理によつて開明され、本來たゞ先驗的にのみ構成され、定立される。ヘーゲルをいくらかでも知つてゐるものは、こゝでヘーゲルが論ぜられてゐると思はないだらう。何故なら、ヘーゲルによれば、存在は開明されるものではないし、また推理されるものでもない。ヘーゲルにあつて、支配的な、第一義的なものは、絶對理念であり、それは吾々の外にあり、時間と空間の外にあり、永遠から實存してゐるものであり、そして自然、現實の世界はその模寫である。ヘーゲルにあつては、事物は顛倒してゐる。ラッソンにあつては、事物一般は存在しない。ヘーゲルは、ラッソンによつて主観主義者に、形式主義者に落される。新ヘーゲル主義は、カントばかりでなく、ヘーゲルをも歪曲し、カントとヘーゲルとの間を振子のやうに動く。ヘーゲルの辯證法的方法は、ドイツ古典哲學のこの輝かしい成果は、客観的運動の法則の理説から、主観的推理の理説に、更に推理の術になる。ラッソンの新ヘーゲル主義は、退歩、全くの哲學的反動を意味する。けれども、ヘーゲル辯證法とその畸形化に於いては、ラッソンは決して單獨な現象でない。上に引用したヘー

ルマン・グロツクナーは、公然とヘーゲルの體系に與しながら、そこにヘーゲル哲學の核心を認めねばならぬことを拒絶したところのヘーゲルの辯證法、ヘーゲルの矛盾の學説に對して駁論の銃を向けてゐるとき、彼はより率直に振舞つてゐるのだ(註十五)。充分な場所がないために、こゝでは、ヘーゲルの辯證法の新ヘーゲル主義的歪曲のその他の證據としての他の「ヘーゲル主義者」を引證することは出来ない。個々の場合が問題なのではなく、極く僅かの例外を除いて全體の方向が問題なのである。事態がそのやうだといふことは、最もよく、ヘーゲルの發展の觀念に對する最も名聲のある新ヘーゲル主義者ラッソンの態度が證明してゐる。新ヘーゲル主義の極端な反動的な面貌を示すには、二、三行で充分であらう。

「次のことは只々遺憾である。」と、ラッソンは考へる。——「といふのは、人々が……ヘーゲルに於いて、全世界を區別なき無規定な端初から絶えずより豊かな構成へと展開せしめるところの發展の理論家を見るやうに誤り算かれてゐることである。

……發展は……概念の發展としての發展は、ヘーゲルにとつては、より低きものからより高きものへの單に一面的に向けられた上昇ではない……それに反して即自的には、ヘーゲルの表現に従つて世界の創造の前の神の思惟として見られた論理學は、まさにヘーゲルの立場から、概念の發展を、上昇的にも下降的にも敘述せしめる。或ひは、より正しく言へば、概念のあらゆる契機は概念をその總體性に於いて自らのうちに持つ故に、敘述は常に概念を、敘述がその特殊の誘因と目的とによつて目指すところの契機から發展せしめ得る(註十六)。

(註十五) ロゴス、ヘーゲル號、一九三一年、一八八頁、一九一頁。

(註十六) 他の箇所、三〇頁、三一頁。

これは、資本主義を超えて社會主義に至る進展を恐れ且つ憎んでをり、そのために客観的な歴史的發展を、それを「誘因と目的」とに従ふ主観的方法とするために、否定する陰鬱なブルジョアの反動者流の明瞭な言葉である。マルクス、

エンゲルスとレーニンが(レーニンは殊に力をこめて)強調したやうに、ヘーゲルの論理學が人間の思惟の歴史的生成行程の總計、論理的要約を敘述したといふこと、従つてヘーゲルの論理學の建築は、ラッソンが吾々に説得せんと欲するやうに何らの偶然ではなく、偉大なる辯證法家の異常なる歴史的精神に根ざしてゐるといふこと——ヘーゲルに對するかやうな見方は、反動的なヘーゲル主義にとつては承認し難いものである。まさに低きものから高きものへの上昇こそ、ヘーゲルにとつて存在並びに思惟の運動の、彼の解釋にとつて特徴的であり、その根本法則をなすものである。けれども、それを、反動家としての、現存するブルジョアの諸關係のイデオロギー的防衛者としてのラッソンは持つことを欲しない。それが支配階級の利害と兩立し難い場合、何のための上昇か？ヘーゲルの論理學は、ヘーゲル自身の言葉によれば、世界の創造前の神の思惟と見られ、従つて下降的に敘述され得るといふ。反動家は、反動的結論を下すために、ヘーゲルに於ける反動家からみつき、ヘーゲルに於ける偉大なるものと永遠なるものとを偶然的なるもの、副次的なるものに落す。むなしい努力だ、前述の言葉にも拘らず、ヘーゲルは思惟と歴史の運動を、低きものから高きものへの發展として説明したのだ。また、その故にこそすべての時代の反動家は、大抵ヘーゲルを憎んだのだ。その例として、こゝで古いヘーゲル食らひ、シュバルトが一八四四年に書いた文章の數行を引用しよう。ヘーゲルにあつては——と彼は述べてゐる。

「過去は、すべての意義とあらゆる價値とを失つてゐる。過去は、caput mortuum(蒸溜の殘滓)となり、單なる骸骨を示すものであつて、その規定は、建築が進められその完成が近づくと、すぐに破壊され、側へ押しやられるといふことである。この點に私の意見によれば、單なる前進の上に置かれてゐるヘーゲルの歴史解釋の革命的要素がある。」(註十七)。

(註十七) シュバルト、「吾々の時代の歴史哲學へのアンチ・プロレコメナ」第一冊、一八四四年、序文。

ヘーゲルの矛盾の平板な形式的な批判と「單なる前進」に對する恐怖を、ラッソンはシュバルトと分ち持つてゐる。即ち、ブルジョアの反動家は、主要問題に於いては封建的反動化を繰り返してゐるのだ。兩者ともイデオロギー的には、過去を代表する。しかも假面は異なる。何故なら、彼等が代表する階級が異なるから。であるから、シュバルトは牧人と農民との道徳のために偽善的に振舞ふ。(こゝに考へられてゐるのは、ブルジョア革命を以つて脅やかすところの牧人と農民に對する封建階級の支配である)。しかるに、ラッソンは、ドイツ國民の「統一」、ドイツの勤勞大衆の「基督教的」倫理、即ち、プロレタリアの階級闘争の制縛を確保せんとする。兩者の主要なる努力、理論的また實踐的主要目的は、それにもかゝらず、同一である。即ち、上昇、「單なる前進」を世界から除き去らんとすることである。おゝ忌むべき、邪道に導かれたヘーゲル！

科學的社會主義の創始者であり、プロレタリア革命家であつたマルクスとエンゲルスは、「低きものより高きものへの限りなき上昇」といふヘーゲルの思想のうちに、彼の辯證法の特質的な革命的特徴を見た。されども、彼等は辯證法を、事實上自然と歴史にあらはれるところのもの、「思惟する脳髓に於ける單なる反映」として觀察した。マルクスとエンゲルスとは、ヘーゲルに於ける辯證法のイデオロギー的顛倒を除去し、そして、自然と歴史に於ける辯證法的發展を「あらゆるジグザグな運動と一時的な退歩を通して自己を貫徹する、より低きものからより高きものへの前進の因果的關聯」として把握した。マルクスとエンゲルスとは、ヘーゲルの上昇の思想を保持したけれども、唯物論的な科學的な形態に於いてであつた。彼等は、與へられた社會的有機體の發生、發展、死、及び他のより高い社會有機體による交替を規制するところの特殊的諸法則の解明を、科學的研究から求めることによつて、ヘーゲルの思想の合理的核心を救つた。かゝる科學的處置のうちに、マルクスは自己の方法の適確なる特性を見た。この立場から、マルクスとエンゲ

ルスとはダーウインの學説を、自己の見解に對する「自然史的基礎」と見做した。何故なら、ダーウインの學説は、自然科學に於ける「目的論」に最後の打撃を加へ、同時にその合理的意味を経験的に證明したから。

カントの歪曲、並びにヘーゲルの主觀化と形而上學化、またヘーゲルの發展の思想に對する反對が同一の源泉から、即ち反動的ブルジョアジーの利害と委任による哲學的反動から、流れ出てゐることを示す必要がまだあるだらうか。そんな必要は少しもない。このことはしかし更に、ブルジョア階級はドイツ古典哲學を繼承する權利を要求することができないし、してはならぬといふことを意味するのである。

III

ヘーゲルの發展の思想に對する敵對的態度は、新ヘーゲル主義の特殊な特質そのものではないにしても、その一つである。ヨナス・コーン、社會民主主義的教授ジークフリート・マルク、アルトウール・リーベルトその他の如き、辯證法に於ける批判主義の代表者達は、發展の思想の或る時は隠れた或る時は公然たる敵對者である。コーンの著書「辯證法の理論、哲學の形式論」は、實際には、それが辯證法を完全に否定したといふ點で、辯證法に反對する著書である。それを示すには、一、二、三の例で充分であらう。まづ第一に、辯證法の一般的特徴について、次のやうに述べてゐる。

「辯證法的思维は、絕對者の思想であるといふことはできない。」とか「すべての辯證法的思维は、絕對者に向けられた思维であるが、絕對者の思维ではない。」「絕對者は、辯證法の極、或ひは源泉たり得ない。たゞ、——理念として辯證法を統制するのみである。」(註十八)。

(註十八) ヨナス・コーン「辯證法の理論」三四七頁、三四九頁。

けれども、以上のことは、辯證法はただ思维方法にすぎないと言ふに外ならない。けれども、吾々がこの三つの文章を引用したのは、このことを確證するためではなくて、同じ著者の他の言葉と比較するためである。

「辯證法は、生命自身から發する、——辯證法は、また思维と生命の對立からも發する。」

ヨナス・コーンは、思维の外部にある存在を多少は斟酌しようとする。けれども、この存在は、抽象的に「生命」として認められる。自然に就いて、物質、客觀的な人類史に就いて語ることを、觀念論的な考へ方は禁じてゐる。一般に、「生命哲學」を追求することは最近のブルジョアの流行の一つである。ここではドイツ學派に屬する専門的學者ばかりでなく、「ゲゼルシャフト」と「フォールヴェルツ」ともにドイツ社會民主黨の出版物、譯註の社會的裏切者も訓練をやつてゐる。であるから、ヨナス・コーンもまた辯證法の源泉を「生命」のうちに求める。さて、彼の辯證法的眼は何をこの「生命」に於いて見るであらうか。「生命は、形體である。即ち、生命のうちに自らを保持するもの、變化のうちに同一にとどまるものは、自身靜止せるものではない。」(註十九)。

(註十九) 同書、一八〇頁。

ヨナス・コーンは、生命に於ける形成と破壊、變化と新しいものゝ形成、等々に就いて語る。けれども、これらすべては、見せかけの辯證法たるにすぎない。何故なら、辯證法の主要範疇は、形式主義的に變へられ、形而上學的に解釋されてゐるから。例へば、ヨナス・コーンは「あらゆる規定は否定である」といふスピノザの命題を誤つてゐると説明する。彼によれば、この命題は顛倒され、「あらゆる否定は、規定として認識されねばならぬ」と言はねばならぬ。

かくするときはこの命題は「要請として大なる意義」(註二十)を獲得する。否定は、「秩序づける意義」(註二十一)を持つと云ふのだ。この歪曲の意味は三重になつてゐる。第一に、否定が形式的矛盾に還元せられてゐること(註二十二)に非

す、或は同様にして——BはAに非ずとしても同じ）第二に、否定が思惟要請として解明せられ、かくて形式的な矛盾の命題は、それが命題から要請に引下げられることによつて、一層悪化され、かくて論理學は諸要請の總和へと解消されるに至ること。然して、第三には、ヨナス・コーンが否定の辯證法的範疇を眞面目に彼の「辯證法」へ取り入れてゐるといふみせかけを呼び起さうとしてゐる點である。彼の表明する所によれば、否定は「批判力」を有してゐる、即ち言葉を換へて言ふと、「否定は分界するものであつて、滅却するものではない」、思惟は「肯定的なるものの優位」に依つて一般に特徴づけられ、そしてこのことは「また否定に對する積極的態度を」（註二十二）要求する。これを一層分り易い言葉で言ひ換えてみるならば、つまり、吾々は否定するのではなくて、分界し、區別するでなければならぬといふことになる。「滅却」に對する恐怖は大きい、——否定からは辯證法的な、革命的な鋭鋒は折り返されねばならぬのだ。さうだ、コーンは又、ヘーゲル辯證法を「創造的否定から解放」すべきことを要求してゐる。（四四頁参照）。さて、こゝに於て既に自ら明らかなく、ヨナス・コーンは、否定の否定を皆目知つてはゐないのである。新らしいものは發生する、しかし如何なる方法を以て、又如何なる法則に従つてかは、吾々の哲學者連の問題ではないのだ。

（註二十） 同書二二七頁。

（註二十一） 同書三二二頁。

（註二十二） 同書一六四頁。

そのほか全章が綜合ジンテーゼにあてがはれてゐる。發端に次のやうに言つてゐる。

「ジンテーゼは決してテーゼとアンチテーゼとの聚合體ではない。しかしそれはまた單に、それらとは係りなき無縁なものではない。それはまた最後に排中律を破壊するものではない。何となれば、ジンテーゼは肯定と否定とに、第三の性質を附

與するものではない、すなはち判断の同一の質料において中間的な或は結合的な態度を附加するものではなく、却つて矛盾は、質料の變形を強ひ、そしてこの變形された質料が肯定さるべきであるから」（註二十三）。

（註二十三） 同書二四六頁。

人々はこゝで躊躇なく言ふことが出来る、何人といへどもこの嚙言からは只ヨナス・コーン自身もそこで何ものをも理解してゐないといふこと以外に何ものをも理解することができないと。

同章の數頁後に於て吾々は次の如き注目すべき文字にぶつかる。

「辯證法は論證的であり、遠廻しに事物に近づいて行き、判断に判断を繋ぎ合せる。然し辯證法にとつて本質的なことは、それが綜合に導くこと、即ちそれが論證的行程を統一的に總括することである。——辯證法の目的そのものは統一といふことを直覺と共通にもつてゐる。……他方、いかなる直觀も、感覺的直觀でも、本質的には知的なものであるのと同様に、こゝに「直覺」と名付けられたものも、決して暗い根據への盲目的な凝視ではなく、根據の明るくなることであり、根據における構造の暴露し、現前することである。そのためには、然し、いまや直覺の統一へと謂はゞ壓縮されてゐる辯證法が助けとなる」（註二十四）。

（註二十四） 同書二五四頁——五五頁

このあいまいな言説の意味は次の通りである、即ち、この「生命哲學者」ヨナス・コーンは、ジンテーゼを合理的に説明することを心よしとしないといふこと、それから、彼は、それを直覺——それは論證的なもの、終極及び辯證法の目標を形づくる——に還元したといふことである。そして暗闇を明るくするために、フイヒテールセリング哲學の「知的直觀」といふ様な古いがらくたが持ち出されてゐる。そしてこの曖昧な説言の一層明るい意味は、辯證法の本來の「根源」は再び直覺であるといふことであらう。ヨナス・コーンは曰く、

「従つて自我は——或は更に一般的に言へば——辯證法の前辯證法的根據は……辯證法によつて認識される。」

又、他の個所では、

「自我の、自己認識の、辯證法は、それ自身の内に辯證法の總ての他の諸根源を含んでゐる。純粹自我は、それ自身非自我であるところの諸規定のうちのみ現はれ、又、對象は、その最も縁遠きものといへども、自我からその志向によつて形成されたものとして、常に認識統一性に導き入れられるといふこと、これは、思惟形態と思惟に縁遠いものとの折衷性、及び總ての認識の前提の二元性に相應してゐる。自我は至る所に前提されてゐる、然しながら、それは同様にまた目的である。」(註二十五)

(註二十五) 同書二〇七頁

辯證法の客觀的根源に關するこの長々しい論説は、一章全部を満たしてゐるものだが、これは全くの所三文の値打もないものだ。——辯證法の眞の根源は自我であると。折衷性——この用語は注目すべきである——は、全く主觀的であり、従つて思惟に縁遠きものも同様に思惟に屬する。ヨナス・コーンは、こゝに至つて、完全なる主觀的觀念論者、非合理主義者、そして神秘主義者の正體をあらはしてゐる。

ヨナス・コーンは辯證法を純粹に主觀的に把握しようとする努力、イタリーのファツシスト・ジエンテイレが大つびらに言つてゐることを、恥づかしさうに述べてゐる。ジエンテイレの所謂「現實的觀念論」は現實的な、活動的な「自我」から全世界を、總ての出來事を——歴史的過程をも含めて——導き出す。

「過程は主觀に關係する。何となれば、客觀は、それ自身では唯、靜止的であるに過ぎない。そこで人々が過程を以つて客觀に歸するならば、それは、過程が主觀の生命中に現實に演ぜられる限りに於てのみ正し。」

歴史的過程は、だから、ジエンテイレに従へば、決して、空間的、時間的系列ではない、即ち、決して客觀的過程ではなく、却つて、一つの「線の直覺」であり(註二十六)自身、線を構成する」ところの直覺である。ジエンテイレの「實踐」は總ての物質から、客體から自由なのである。この哲學の社會的意義はかうである。即ち、ファツシズムは、

マルクスにとつてコンムニズムがさうであると同様にジエンテイレにとつて「必然的」であるといふのである。直觀に根を置いた辯證的思惟方法を具へたる現實的「自我」は、同一の效果をもつて兩者のいづれをも産出することが出来るといふのだ。客觀的合法性、客觀的發展の完全なる否定である。辯證法の主觀化、主觀的辯證法は今日流行してゐる所のものだ。何故なら、それは、ファツシズムの實踐にとつて理論的基礎を與へてゐるやうに見えるからである。ジエンテイレにあつては、ヨナス・コーンに於けるよりそれは一層明白、且つあからさまである、が兩者は同じことを考へてゐるのだ。

(註二十七) Spirito come atto puro. 一〇七頁

コーンの綜合に再び歸れば、次のことが言はれねばならぬ。コーンの綜合は本來綜合ではないといふことである。直覺から出發しつゝ、論證的處置を通じ、判斷を通じて、思惟は再び直覺に歸つて來る。これに反し、ヘーゲルにあつては否定も又綜合も同様に創造的である。ヨナス・コーンの「辯證法」は主觀的神秘的反省である、その名稱を除いてはヘーゲルの辯證法とは何一つ共通點はない。

ヨナス・コーンよりも一層實證的色彩の強いジークフリード・マルクは「批判的辯證法」を欲してゐる、即ち、ヘーゲルのそれとは違つて、何等か客觀的なものにも歴史主義にも結び付いてゐない辯證法、又なら、客觀的なものを模寫するのではなく、且つ、發展説を述べない辯證法を欲してゐる。模寫説に對して彼は、それは、ヘーゲルの觀念論ばかりか批判主義をも目茶くにするものだといふので彼は、かんかんになつていきり立つてゐる。模寫説は「マルクス主義哲學の奥所」を形成するものであり、ヘーゲルの辯證法を「それにとつては縁もない素朴實在論の形而上學の地盤へ」移植することは適當でないと云ふ(註二十七)。ブルジョア哲學のイデオロギイ的從僕の立場からは、こゝでは

「總ては秩序だつて」ゐる。なぜなら、それはマルクス主義の全ての敵に依つて幾千回となく、又、K・カウツキー、マックス・アドラー等に依つて屢々繰返された所のものの今更ながらの反芻だからだ。塊太利のファッシストであり社會學者であるオトマル・シユバンが次の様に言つてゐるのは一層公然と自己を表白したものである。

「辯證法的態度の一つの誤用は、カール・マルクスに於て見ることが出来る。何となれば、辯證法は、精神が自己の異論、その對立を定立し、それを貫いて進むときにのみ意味を持つからである。」

(註二十七) ヘーゲル主義とマルクス主義。十一頁から十三頁迄。

彼はマルクスの辯證法を「法外の不合理」と言つてゐる、といふのは、マルクスは精神の辯證法を「全く機械的な過程」に適用したからだといふのである。オトマル・シユバンは猶續けて言ふ。

「けれども、この途方もない誤用をマルクスの『唯物史観』は冒してゐる、即ちそれは人類の發展を彼の己惚れに従へば辯證法的方法に従つて、機械的法則から……規定したから。(註二十八)

(註二十八) オトマル・シユバン、『社會哲學』四十頁。

オトマル・シユバンは決して「批判論者」ではない、がそれにも拘らず唯物辯證法に立ち向ふ時は、ジークフリード・マルクと本質的に同じ議論をやるのである。オトマル・シユバンは決して社會民主主義者ではない、いや反つて公然たるファッシストである、——が兩人は主要な點では全然同一のことを言ふ、尤も、例へばジークフリード・マルクが對立の關係を相關と名付け、それに應じてヘーゲルの矛盾辯證法に「批判論的相關辯證法」を對置し、一方に於てオトマル・シユバンはヘーゲルの矛盾辯證法を同様に、すつかり否定しつゝ、對立を「精神の異論」と名付けたなどの相異はまことに興味あるものであるが、議論の本質に於ては兩者は何等異なる所はない。「相關」といひ、「精神の異論」といふも、

實は同一のものである、即ち大學正教授の腦髓から出るスコラの所産である。吾々は更に比較してみよう。ヘーゲル並びにマルクスの發展論の關係に就いて、オトマル・シユバンは次のやうに表明してゐる。「ヘーゲルの發展概念は、ダウインやマルクスの機械的なそれとは少しも關係がない。」これと同じことを、吾々がたつた今見た如くS・マルクが言つてゐるのである。

歴史や經濟の問題に於てはファッシスト的並びに社會的ファッシスト的哲學者は互に手を差し延べ合ふ。資本主義社會の諸矛盾を、支配階級の有能な侍僕、新カント學派の價值形而上學者としてのS・マルクは單に倫理的のものであると見做してゐる。道德的感情は人間の本質中にある。

「矛盾は——と彼は言ふ——こゝでは(即ち、社會科學の中では)むしろ倫理的矛盾である。それは反目的性を意味してゐる。しかし單に非倫理的な生物學的生産理想に對する反目的性ではなく究極目的に對するそれである(註二十九)。

(註二十九) S・マルク、『ヘーゲル主義とマルクス主義』二十五頁。

オトマル・シユバンは、新カント的價值形而上學に訴へつゝ、現存の諸關係を公正なものとする。この根據から彼は例へば價格に關する「正しい」「高い」「低い」などの概念を拒否し、その代りに「公正な」(註三十)といふ概念を定立してゐる。こゝから彼は「全體性」の目的の立場から全資本主義的秩序を公正なものとする、この立場よりすれば總ての不正なものも正當なものに見做されねばならぬ、何となれば、それは善き公正な目的への手段であるからである。ファッシスト哲學者とその社會民主主義的相棒とは共に價值標尺を以つて歴史的現實性に近づいてゆく。彼等の間の一時的な確執はた易く根絶される、といふのは、彼等と同じやうに僞瞞的に、客觀的、社會的合法性と、それに依つて規定される階級の實踐との代りに、「倫理的的感情」とか、「究極目的」といふ標準を問題にするからである。兩者共社會の科學の

敵である。「知識」の代りに「評價」が定置される。兩者共に「歴史主義」、即ち發展思想の敵である。兩方とも、歴史的發展の思想を、たとひ逆立ちの方法であつたとはいへ、安全な妥當性へ持ち來すといふ大なる功績をもつ所のヘーゲルを、こゝに於ても又拒否してゐる。ヘーゲルに於ける革命的なるもの、偉大なるもの、眞に科學的なるものは彼等によつて綺麗に排斥される。それに代つて彼等にあるものは、ヘーゲルの内の非科學的なるもの、神秘的なるもの、そして反動的なるものである。國家の問題に於てオトマル・シユバンとS・マルクは兄弟の様に一致してゐる。兩者共に、ヘーゲルを引き合ひに出してゐる。

(註三十) オトマル・シユバン、「國民經濟學の危機」參照。

オトマル・シユバンは調子を合せて言ふ。

「國家は總てのより下位の諸段階の最後になされた綜合であるといふヘーゲルの高遠なる見解はよく知られてゐる。『國家は道德的諸理想の現實性である』。『國家は……道德的全體であり、自由の實現である……』。『國家の存在は、この世に於ける神の行程である』。ヘーゲルによれば、丁度ブラトローに於けると同じく、國家は主觀的倫理に對して、客觀的倫理である」(註三十一)。

(註三十一) オトマル・シユバン「社會哲學」四十七頁。

ジークフリード・マルクは、

「然し、若しヘーゲル主義とマルクス主義との間に辯證法の問題で本質的な區分が行はねばならぬとすれば、國家及び文化哲學的根柢態度について決定的にヘーゲル主義とマルクス主義！と言ふことができる」(註三十二)。

(註三十二) 上掲書三十二頁。

エス・マルクは、自ら「マルクス主義者」だと見做してゐる、これが唯、社會民主主義的労働者の瞞着に用立つのみであるといふことは、彼の完全なるオトマル・シユバンとの連帶性と、ヘーゲルの非科學的、反動的國家概念——これ

はマルクス及びエンゲルスが徹底的に否定し且つ暴露した所のものであるが——に對する二人の意見の合致とで既に證明されてゐるものだ。

IV

新ヘーゲル主義全般の眞に反動的な性質の最もよき證左は、それが個々の陰影及び傾向の區別なくマルクス主義に對して統一戦線を形成してゐることである。特にそれは國家の問題に於て不細工に行はれて居る。こゝでは、彼等は全く例外なく、ヘーゲル主義者である。それについて吾々にとつて興味あるのはアルトウール・リーベルトの場合である。アルトウール・リーベルトはヘーゲルの公然たる敵であり、國家論に觸れる部分を除いては……ヘーゲル哲學から文字通り一つの部分をも取り容れない。アルトウール・リーベルトはヘーゲルに對して猛烈に否認的な態度をとつてゐる、それは主として彼がヘーゲルを「歴史主義」の父と見るからである。ところが、ヘーゲルの歴史的、形而上學的國家論は「歴史主義」の敵、リーベルトの妨げにならないのである。國家は、リーベルトに従へば「絕對者の啓示」であり、「道德的に權威ある妥當性」を有つ、等々(註三十三)。彼はヘーゲルが反動的な場合各にはヘーゲルに完全に一致してゐる。

(註三十三) アルトウール・リーベルト「辯證法の精神と世界」四五二頁、四五五頁。

ヘーゲルの辯證法に對するリーベルトの反對は多くの點に於て注目し得る。それは、新ヘーゲル主義が如何なる深い動機と傾向とによつて魂を入れられて居るか、如何なる動因がそれを呼び起したか、いかなる源泉がそれに對して營養を供給して居るかを、恐らく最も明瞭に示してゐる。

リーベルトはカント主義者であり、全くカントに歸依して居り、カントの存在及び當爲の二元論の立場に立ち、然もカントを越えようとしてゐる。何故か？ 又何處へ行かうといふのか？ リーベルトは言ふ。

「吾々が、こゝにおいて一つの課題に直面してゐるといふことは明らかである。この課題たるは、新カント主義が若しも理論的哲學、近代の知識學に課せられた最も差迫つた要求の一つの前に降伏すまいとするならば、その取扱ひを回避してはならぬものである。手短かに言ふならば、このテーマは「批判主義と精神科學」といふことが出来る。カントの認識論、特に、新カント主義のそのこれに對する能力を否認し、それは數學及び數學的自然科學の批判的基礎づけに關してのみ充分であると考へる人々は少くない。この認識論的研究を、主としてそして第一に、史的・二律背反の構成並びにその適用價值の中に、及び史的辯證法の諸範疇の中に導き入れる必要がある、すなはち例へば、存在と當爲、自由と必然等の間の一般的形而上學的對立を基礎づけ展開するのみならず、この對立が史的認識に於て現はれる固有の様式や仕方に就いて分析をなすこと、が現在の急務である。例へば、創造的な自己責任と、發展史的に與へられた境遇との間や、自律性に對する倫理的な要求と、傳統の歴史的法則との間や、自己自らの吟味とそれに劣らず必然的な、權威への信仰、及びそれへの感情的依存性との間、等々の絶え間なき、揚棄し難き軌跡における對立がそれである（註三十四）。

（註三十四） 同書三〇五—一六頁。

こゝでは、吾々は、ヱイルヘルム・ヱインデルバンドによつて述べられた所のもとの本質的に全く同じ問題提起、同じ危機の評価、そして、同じ救済策を得るのである。唯、それがこゝでは一層開けつ放しに、むき出しな言葉でなされてゐるに過ぎない。リーベルトは「實際、事實的な辛辣味」の歸依者である。だがこのことは彼をしてブルジョア哲學、ブルジョア・イデオロギーの一般的危機の事實をヱインデルバンドと同様に柔かく、溫和に、弱々しく、新カント派の危機として敘述せしめることを妨げはしない。多くの事柄において「事實的な辛辣味」を持つブルジョア學者も柔かく

やさしい。リーベルトは危機を感じはするが、それを理解しはしない。

「吾々の認識のみでなく——とリーベルトは言ふ——吾々の歴史の體驗も亦、新人文主義の柔かい調和的な精神によつて教養を受けた時代の人々の場合に於けるよりも、全く別個の諸困難と闘つて居り、憐れみと苦しみとの姿や危機の諸特徴を、はるかに鋭く刻み出された強さにおいて刻印されて居る」（註三十五）。

（註三十五） 同書三一〇頁。

リーベルトは危機を感じ、體驗し、それを確證する勇氣を持つてゐる、然し、その説明は間違つてゐる。何故、今日の時代は精神的危機に面してゐるか、吾々が今日、以前と全く異なる困難に際會してゐる根據と原因は何處に求められべきであるか、之等の問を、リーベルトは一再ならず提出してはゐるが、この危機の説明を歴史の客觀的な歩みの内に求める代りに、彼は「人文主義」に對し、「歴史主義」に對して、即ち發展思想に對して憤り、當り散らすのである。この憤怒は歴史、歴史的に與へられたるもの、及び生成するものを把握することに無力なることの證左である。いや、そればかりではない、リーベルトは「歴史主義」のみならず「合理主義」即ち、合理的認識の反對者でもある。これは然し、歴史的、客觀的眞理に對する無力から、當惑から、心配からの逃避を意味する。「歴史主義」は彼にとつては相對主義に等しく、合理主義は餘りに人文主義的臭味があり、「比較的」揚棄的である。リーベルトは辛辣な、臆面もなき哲學を欲する。説明は附隨的のものである。歴史的方法は有害であり、人文主義的時代からの遺物だ。リーベルトは曰ふ。

「相對主義と、それから非常に展々導き出される歴史主義は、……あらゆる體系的認識の呪ふべき弱さを意味し、同時に、嚴格な哲學的認識に缺くべからざる確固たる倫理的志操の危機と没落とを招くものである……吾人の考察は幸ひにも吾人を辯證法的形而上學の倫理の問題にまで導いた。形而上學と人倫との關係は密接にして且つ深い（註三十六）。

（註三十六） 同書三七頁。

リーベルトは新カント派的なやり方で、『歴史主義』即ち、諸矛盾の裡に進行する人類の歴史の合法的進展を相對主義に等しとなし、而して、形而上學的倫理に逃げ込むのである。歴史主義が無條件に必ずしも赤裸々な相對論に導くものでないことは、リーベルトは充分に承知してゐる。何となれば、若しさうでないなら、彼はその關係を「屢々云々」の言葉を使つて制限しはしないだらう。相對主義を認識論、歴史學の基礎とすることは不可避的に主觀主義、懷疑主義に墮すことである。が、一體『歴史主義』更に適當に言へば歴史の辯證法、辯證法一般は、原理的に、且つ必然的にこの赤裸々な相對主義と結び付いて居るであらうか？ これに就ては既にヘーゲルが説明して居る。

「世界は、それが意識にとつて存する、即ちその存在は單に意識に相對的なものであるといふ意味に於て、現象なのではない。それは同時に、それ自身そうである」(註三十七)。

(註三十七) 『哲學史講義』一八三四、第二卷、三十五頁。

このことをヘーゲルは直接カントに反對して云つた、カントの主觀主義はむき出しの相對論に導いて居るからである。ヘーゲルは世界、現實性を理念の現象と看做すが、この現象は、然し、單に意識にとつてのみあるのではなく、反つて、それ自身に、客觀的に存在するのである。ヘーゲルの客觀的辯證法は相對主義を契機として自らの内に含むが、然し、それに還元されるものではない。世界、現實を第一義的なものと見る唯物辯證法に於ては尙更のこと相對主義はその一契機以上の何物でもあり得ない。

「マルクス及びエンゲルスの唯物辯證法は——と、レーニンが言つてゐる——無條件的に相對主義を含む、が、それに還元されはしない、即ち、それは吾々の總ての認識の相對性を認める、然し、客觀的眞理を否定する意味に於てではなく、吾々の知識がこの眞理に接近する程度が歴史的に制限されて居るといふ意味に於てである」(註三十八)。

(註三十八) レーニン「唯物論と經驗批判論」百二十五頁。

リーベルトの立場は、然し客觀的眞理の否定の立場であり、改悪されたカントの主觀主義の立場である。その立場よりすれば相對主義は唯、赤裸々な相對主義として現はれ、歴史は恣意的な、意味のない、何等の法則にも従はぬ運動として現はれねばならぬ。客觀的歴史的觀點はブルジョア・イデオログ達には取り得ないものとなつた。——このこと、而してこのことのみが眞理である。ブルジョア階級が歴史の前に恐れ戰かなくともよかつた時代は過ぎ去つた。死滅しつゝあるブルジョアジーは歴史を呪ひ、止まれを叫ぶ。ブルジョアジーが歴史的意識を有つて居た時代はたしかにあつた。天才的辯證法家ヘーゲルはブルジョアジーのイデオログであり、驚くべき歴史的意識を有つてゐたのである。リーベルトの『歴史主義』に對する闘争は辯證法に對するそれである。

リーベルトは、その歴史主義と合理主義との故にヘーゲルに對して憤る。これを彼は見下げて『人文主義化する汎論理主義』と呼んでゐる。

リーベルトは、次のことを注意してゐる。即ち、ヘーゲルにとつては『揚棄』は何の苦もなく行はれる、何故ならその背後には、そもぐの最初からこの任務を振り當てられてゐるところの概念と理性の全能的強制力が用意されてゐるかからだ。然し、ヘーゲルの絶對的觀念論のこの正當な批判は——そしてこれが最も本質的な點であるが——より悪い、否、俗流的な觀念論の立場よりなされたものである。リーベルトによれば、彼がカント主義の精神において『二律背反』として理解してゐる所の諸對立は、『歴史的な生活の超理論的な、或は理論外の土臺から、歴史的現實のかまびすしい非調和音と非合理から、その情熱や特異性から』生じたものである。辯證法は、非合理的なものでなければならぬ。即ち、その二分は揚棄せられぬ、統一を形成しない二分でなければならぬ。ヘーゲルは二分を『堪へ忍ばず』それを高々その

除去の前階梯として認め得たのみであるから、彼こそは辯證法を「危ふくする者」だといふのだ。(註三十九)。リーベルトは、對立を生み且つ之を克服する概念のヘーゲルの自己運動に我慢が出来ないのである。彼は絶對的な、克服せられざる對立、即ち、外及び超 理論的にして解くべからざる二律背反を用ひる。

「辯證法は——と彼は言ふ——最早や吾々にとつては、救濟への道として、即ち、論理的に云へば、對立の「揚棄」の道としては通用しない。……それは最早、吾々にとつて調停の補助手段ではなくして、吾々をしてつねにカントの存在と當爲の原始二律背反の承認を強ひる全然悲劇的な事態の表現である。……若し、吾々が二つの世界の對立性と解き離すべからざる相互關係を思惟的に考慮し、正しく維持するならば、吾々は特別に現代的な概念たる辯證法、悲劇的概念を代表する。而して、辯證法概念に於ける悲劇的意識を強調することにより、吾々はカントの世界觀の復興と再確認とを代表し得るものと信ずる」(註四十)。

(註三十九) 他個所。三百七頁—三百九頁まで。

(註四十) 同書三三〇頁より三一頁まで。

吾々は、先に、リーベルトのヘーゲル批判は、より悪い觀念論の立場よりなされてゐると述べた。リーベルトはカントに歸依し、カントの復興と再確認とに努める。如何に、リーベルトが一體にカントを改悪してゐるかを此處に示すは吾々の目的ではない、こゝに言はうと欲することは、リーベルトが統一を否認したのみならず、二分も彼にあつては何等の二分、何等の分裂をもなしてゐないこと、彼が運動を不可能ならしめる普通の俗流二元論を代表してゐることである。その二律背反は常に現存してゐる原始二律背反であり、運動に於て作られ、運動に於て解決されるそれではなす。「生命と倫理」「存在と當爲」がこれ等の原始二律背反である。然らば、これ等の原始二律背反の格闘から歴史的事件が結果し、歴史的運動が行はれるのは如何にしてあるか。之に就ては殆んど五〇〇頁もある、殊の外厚い書物の中に

たゞの一言も書いてない。そしてこれが辯證法を意味し、ヘーゲルを克服し、ヘーゲル批判を意味する筈のものなのだ！ヘーゲルは倒立した觀念論の形態に於て、思惟と人類歴史の運動を叙述した。リーベルトは「歴史主義」を憎惡し、超歴史的なものを追跡し、唯單に、理性のヘーゲルの自己運動の代りに倫理と存在との格闘を置いたが、これの合則性と意義とを少しも示し得なかつたといふ結果に到達したのみである。カントに於ける存在と當爲は、マルクスとエンゲルスが驚嘆すべき手際で分析したやうに當時のドイツ・ブルジョア階級を特徴づけて居た所の願望と能力との間の矛盾の表現である。即ち彼等は、フランス革命をドイツへ持ち來らさうと願つて居たが、當時、ドイツに於ける市民的諸關係の後れてゐたこと、未發展なりしことのために遂行し得なかつたのである。リーベルト及び、すべてのカント主義的新ヘーゲル主義者達がカントを復興せんとするならば、それはただ、現代ブルジョア階級の願望と能力との分裂を全世界に向つて證明するといふ一つの意義を持ちうるにすぎない。この分裂とは即ち、市民的社會秩序を永遠化し、その國民的及び階級的的努力を貫徹せんとする願望と、この目的を達することの不可能との間の分裂である。これは更に、インマヌエル・カントの哲學と、その現代に於ける後繼者の哲學との差別は、前者が「フランス革命のドイツ的哲學」(マルクス)であつたに對し、後者がファッショ的反動の哲學であるといふ點にある、といふことを意味する。

リーベルトは英雄主義を鼓吹する辯證法を欲する。「現實の混亂の中に於ける矛盾を無慈悲に」認める「英雄的にして且つ悲劇的な冒險」を要求する。宇宙主義者オトマル・シユバン、新ヘーゲル主義者、イタリーのファシスト、ヂェンティイレーも亦、英雄主義に呼び掛けてゐる。この「エロイカ」は然しながら絶對的なものである。リーベルトは適當にも「冒險」といつてゐる。「冒險」は勇敢と同じではない。それは亦、冒險的、即ち、單なる危険をも意味する。これは、幸福なる偶然を追掛けることである。偶然を期待することは、然し、自己の立つ地盤をもはや信用しないことである。

この英雄主義への呼び、この絶望的なる『エロイカ』は労働者階級の革命化及びソヴェート同盟に於ける社會主義の勝利に満ちた建設がブルジョアジーの頭に、プロレタリアートの勝利が無慈悲にやつてくるに違ひないといふ意識を、たゞき込んだことの一つの證據ではないか？ さうだ、それ以外では決してない。

全力を盡して、プロレタリアートの勝利を妨げることが、現代のブルジョア哲學が良心をもつて奉仕する所の主たる目的である。アルトウール・リーベルトは現實を悲劇的なものと見做し、それに依つて人々の心情を悲劇的冒險の方へ鍛へ上げようと欲することによつて、この目的に奉仕する。彼の『革命の精神に就いて』と題する小冊子に於て、彼は革命を歴史的なものに對する形而上學的に必然なる反抗と解してゐる。そして、彼の讀者に、革命を單に拒否せず、又そのまゝ受取ることなき様にと要求し、更に革命が歴史的律背反のためにその本來の理念から脱落しなければならぬといふことのうちに存する革命の固有の悲劇を指示しつつ、讀者に、革命を變じて進化となすために、これを征服し、革命の主人となることを要求してゐる。ドイツのブルジョアジーの階級的並びに國民的目的の貫徹を助けんがために、古典的ヘーゲルに最も接近してゐる様にみえるリハルト・クロナーは彼の動的辯證法の理論を用ひようとする。

「この動的辯證法——はとクロナーは言ふ——現實が、永遠に實現された理想と共に永遠に實現されない理想をも表現して居ること、現實と理想とは決して同じ歩調を保つことは出来ぬが、同時に又、全く互に背馳することも出来ぬ、むしろ、交互に移り變り、一步毎に追驅けたり同伴したりするといふことを教へる。」——そして、それ故に、「今の瞬間がドイツ國民に要求するのは儀式的な辭禮ではなく、眞面目な、どつしりとした行爲である」(註四十一)。

(註四十一) リハルト・クロナー「國家の理念及び現實性」キール、一九三〇、三頁、二二頁。

こゝに響いてゐるのはヘーゲルのモチーフである。現實性は、ヘーゲルの場合に於けると同じく、現象する理念として把握されてゐる。が、クロナーの「動的辯證法」は、形而上學的であり非歴史的であるので、之はヘーゲルのそれではない。吾々はヘーゲル辯證法の名に於て、正當にクロナーに對して次の問を發すべきである。彼が述べてゐる所の現實はヘーゲルの意味に於て果して理性的であるか？ 又、現代のドイツ國家は理性的であるか？ ブルジョアジーのイデオログ達は、クロナーが次のやうに言ひ表はしてゐるところのものを實現すべき委託を受けたのである。「この(政治的)形成のために民族の諸力が鍛えられることに寄與すること」と(註四十二)。いかなる形成のためにか？ ヘーゲルはその法律哲學に於て立憲君主制を最高にして完全なる統治形態であると説いた時、ブルジョアジーの側に立つてゐたのである。

「彼は彼流に——とエンゲルスは言ふ——此の國のブルジョアジー達が近く政治權力に到達せんとしてゐることを告知した」(註四十三)。

(註四十二) 同書四頁。

(註四十三) 「獨逸に於ける革命と反革命」一五頁。

クロナー會社の諸君、諸君は、とつくの昔に破産したブルジョアジーに何を知らせようとするのか？ ブルジョア哲學は今日、搾取階級を捉へてゐる不安と緊張を反映して居り、そして今後ますます、反映するだらう。矛盾の論理學としての、運動の法則の學としての辯證法に對する興味は、現實に於ける矛盾が、ブルジョアの空論家の頭に辯證法をたゞい、き込む程、それ程増大したといふ事の明白なる證左である。

吾々は、新ヘーゲル主義者の辯證法が如何なるものかを見た。ヘーゲル——吾々は辯證法家ヘーゲルのことを言つてゐるのだ——は傍に追ひやられたか、或は、元の形なきまでに不具化され改悪されてゐる。之に反し、「法律哲學」の著

者ヘーゲルには賛意を表され——ヘーゲルの國家學説は尊敬されてゐる。それは、ブルジョアジーは今日従前にもまして、ヘーゲルの辯證法をその合理的な姿に於て自分のものとすることができないといふこと、ヘーゲルの辯證法がブルジョアジーにとつて『恐怖と憤怒』(マルクス)であるといふこと、以外の何ものを意味するか？ リハルト・クローナーが次のやうに言つたことは全く正しい。即ち、新ヘーゲル主義は、力弱い亞流の雜談であり、困りものであると。ヘーゲルに於ける偉大なるもの、合理的なるヘーゲルは、唯、プロレタリアートのみに屬する。

『觀念論的體系の價値に満ちた成果、ヘーゲルの辯證法……この素晴らしい眞珠』(レーニン)を、新ヘーゲル主義者は絶對的觀念論の霧から選び出し得ない。そして、この『素晴らしい眞珠から』その壯麗さと貴重さを奪ふために彼等の側で塵埃や泥を盛澤山に積み重ねるがよい。それはしかし彼等にとつて成功し得ず、また成功しないであらう。歴史の辯證法は死滅するブルジョア階級の空論的代辯者に泣面をかゝせるであらう。

——ドイツ版「マルクス主義の旗の下に」一九三一年十二月號所載——

カール・マルクス

ヘーゲル現象學批判のためのテーゼ草案

(まへがき)——次のプラン草案は、一八四五——一八四六年に於けるマルクスの「フオイエルバッツハに關する」十一のテーゼを含むノートの第一六頁に見出される。それは恐らく「神聖家族」の脱稿後、パリに於いて、一八四五年二月初めに行はれたマルクスの國外追放前に書き下されたものである。それは「ドイツチエ・イデオロギー」で果されたヘーゲルとフオイエルバッツハに關する計畫的批判的解明の最初の素描をなすものであり「フオイエルバッツハに關する」テーゼの中に特殊的に確定されたマルクスの見解を一般的に定式化してゐる。その脱稿の時期はだから凡そ一八四五年一月である。——この草稿の寫しはマルクス、エンゲルス全集第五卷の中に、この巻の内容をなす「ドイツチエ・イデオロギー」の附録としてつけられてゐる。

現象學のヘーゲル的構成

- 一、人間の代りに自己意識。主觀——客觀。
- 二、事態の諸差別は重要なものではない、なぜなら實體が自己差別作用として把握されてゐるから、換言すれば、自己差別作用、差別作用、悟性の活動が本質的なものとして把握されてゐるから。ヘーゲルはだから思辨の埒内で現實的な、事態を把握する、諸區別を興へた。
- 三、疎外の揚棄は對象性の揚棄と同一視されてゐる(特にフオイエルバッツハによつて發展せしめられた一つの側面)。

四、表象せられた對象の、すなはち意識の對象としての對象の揚棄が、現實的對象的揚棄と、すなはち思惟から區別された感性的行爲、實踐、および實在的活動と同一視される。

カール・マルクス

「ヘーゲルの辯證法及び哲學一般の批判」(一八四四年)

(まへがき) — こゝにはじめて、上掲の、マルクス・エンゲルス全集編輯者によつて選ばれた表題の下に發表されたマルクスの勞作は、マルクスがバリーに於いて一八四四年、「神聖家族」起稿前、すなはち一八四四年末エンゲルスとの邂逅前に書き下し、彼の遺稿の中に残つてゐたところの大量の原稿の中から採用されたものである。これらの原稿は主として國民經濟學、國家、法律、政治、道德の批判のための諸研究を含んでゐる。一八四四年八月に書かれた「序言」草案から分る如く、マルクスは當時これらの諸研究の一部を、つまり「國民經濟學批判」を小冊子として發表しようと思つてゐた。そこにエンゲルスが現はれて、國民經濟學の小冊子の代りにブルノー・パウエル及びその「アルカイキークラフツァインツ一般文學——新聞」に向けられた「神聖家族」の起稿となつた。この論文のためにマルクスはすでに出来上つてゐた彼の批判的諸研究を豊富に利用した。

上に述べられた「國民經濟學批判」の「序言」の中では就中次の様に語られてゐる。「この書の末章、ヘーゲル辯證法及び哲學一般の分析を私は吾々の時代の批判的、神學者と對照して全然必要なものと思つた、なぜならこの様な仕事はまだ完成されてゐなから。」

このヘーゲル「分析」も「神聖家族」の中で豊富に利用されることになつた。特に「思辨的構成の秘密」及び「絶對的批判の思辨的循環と自己意識の哲學」を参照すべきである。

一八四四年に於けるマルクスの原稿のすべては最近に刊行される「マルクス・エンゲルス全集」第三卷の中に現はれる。

今や恐らくこゝで、ヘーゲル哲學一般に關する、また特に現象學及び論理學に於けるその詳説に關する、最後に最近の批判的運動の關係に關する理解及び正當化のために二三の指示を與へるべき場所である。

舊世界の内容の取扱ひは、近代のドイツ的批判の、素材に把はれた發展は、批判の方法に對する全然無批判的な操作及び一部は形式的な、しかし眞實には本質的な問題に關する完全な無意識性が起つた程、強力であつた、では吾々はヘーゲル辯證法に關してはどう考へるか？ 無意識性——ヘーゲル哲學一般及び特に辯證法に對する近代の批判の關係に關する——はきはめて大であつた、すなはちシュトラウスやブルナー、パウエルの様な批判家は、前者は完全に、後者は彼の『初三福音書作者』(註一)の中で(そこで彼はシュトラウスに對抗して抽象的人間の「自己意識」を「抽象的自然」の實體の代りに置いてゐる)、及びまた「被ひをとられた基督教」(註二)の中でさへも少くとも傾向^{ポテンツ}上は完全にヘーゲル論理學の埒内に把へられてゐたのである。たとへば被ひをとられた基督教の中では次の如く言はれてゐる。「自己意識は、それが世界を、區別を設定し、自ら産出する所のもの、中に自己自身を産出する——なぜならそれは産出されたものと自己自身との區別を再び揚棄し、且つそれは産出と運動の中に於いてのみそれ自らであるから——とき、——恰かもかゝる運動の中に自らの目的を持つのではないかの如くである」等々、或は——「彼等(フランス唯物論者)は、宇宙の運動は自己意識の運動としてはじめて現實的に對自的になり、且つ自己自身との統一に合一するといふことを悟ることが出来なかつた。」これらの表現は一つの言葉もヘーゲルの見解と異なる所がないのみならず、むしろそれを言葉通り繰返してゐるのである。

批判(パウエル、初三福音書作者)の行爲の間にいかにヘーゲル辯證法との關係の意識が存しなかつたか、いかにこの意識が素材的批判の行爲の後にも發生しなかつたかを、パウエルは、彼が彼の「自由のよき事柄」(註三)の中でゲルツヘ氏の「はて論理學は如何」といふ騒々しい問題を未來の批判家に一任することによつて拒否した場合、證明してゐるのである。

しかも今や、フ、オ、イ、エ、ル、バ、ツ、ハ、が——彼のアネクドトチス中に於ける「テーゼ」(註四)の中で、ならびに「將來の哲學」(註五)の中で詳細に舊い形而上學及び哲學を萌芽的に顛覆した後にも、——他方この仕事を遂行することを知らず、しかもこの仕事を遂行されたものと已惚れてゐる所のかの批判が、純粹な、決定的な、絶對的な、透徹せる批判として觸れ廻つた後にも、かの批判がその精神的高慢の中に於いて全歴史的運動を他の世界——彼等と反對に「大衆」(註六)の範疇の中に入るところの——の批判自身との關係に還元し、かくてすべての獨斷的諸對立を彼等自らの伶俐性と世界の愚鈍性と、批判的キリストと人間との一つの獨斷的對立の中に「一塊」として解消せしめた後にも、かの批判が自己の優越性を絶えず大衆の無精神性によつて證明して來た後にも、最後にかの批判が批判の最新の法廷を宣言して、滅び行く全人類はこの法廷の前に群り來り、この法廷によつて諸群に分けられ、すべての特別な集團はその貧困の證言(證明 nonium paupertatis)を獲得する日が近づいたと見せかけた後にも、かの批判が人間の感情ならびに世界——その上にかの批判は崇高な孤獨性に於いて君臨しつゝ、只時折にオリンポスの神々の笑をその嘲笑的な唇から響かせるにすぎない——に對するその優越性を押捺せしめた後にも、——すべてこれらの、批判といふ形式の下に瀕死に陥つてゐる觀念論(新ヘーゲル主義)の愉快な身振りの後にも、この新ヘーゲル主義は、今や彼等は彼等の母、ヘーゲル辯證法を批判的に解明しなければならぬといふ豫感を一度も口にしなかつた、しかり彼等はフ、オ、イ、エ、ル、バ、ツ、ハの辯證法に對する批判的關係さへも説明することを知らなかつたのである。自己自身に對する完全に無批判的な態度。

フ、オ、イ、エ、ル、バ、ツ、ハは、ヘーゲル辯證法に對する眞面目な、批判的な關係を持ち、且つこの領域に於いて眞實の諸發見

をなし、一般に古い哲學の眞の克服者である所の唯一の人である。その業績の偉大さと、フオイエルバツハがこれを世に與へた物靜かな單純さとは、それは逆な顛倒された關係と驚歎すべき對照をなしてゐる。

フオイエルバツハの偉大な功績は、第一に、哲學は思想に持ち來され且つ思惟を通じて完成された宗教に外ならないこと、従つて同様に、人間の本性の疎外の他の形式及び存在方法と判定すべきであることの證明である。

第二に、眞の唯物論と實在的科學の確立である、それはフオイエルバツハが「人間に對する人間の」社會的關係を同時に理論の根本原理となすことによつてなされた。

第三に、彼が、絶對的に肯定的なものであると主張するところの、否定の否定に對して、自己自身の上に休らひ、且つ肯定的に自己自身の上に基礎づけられた肯定的なものを對置することによつて。

フオイエルバツハはヘーゲル辯證法を次の様に説明する——（そしてそれによつて、肯定的なもの、感性的なものからの出發を基礎づけてゐる。）

ヘーゲルは實體の疎外（論理的には、無限なるもの、抽象的普遍）から、絶對的な固定した抽象から出發してゐる、——即ち通俗的に表現すれば、彼は宗教と神學から出發してゐる。

次に、彼は無限なるものを揚棄し、現實なるもの、感性的なるもの、實在なるもの、有限的なるもの、特殊なるものを設定する。（哲學、宗教と神學との揚棄）。

第三に、彼は肯定的なるものを再び揚棄し、抽象、無限なるものを再びつくり上げる。宗教と神學の再設定。

フオイエルバツハはだから否定の否定を單に哲學の自己矛盾として把握する、即ち神學（超絶性等々）を一旦否定した後に肯定するところの、従つて自己自身に對立して肯定するところの哲學として把握する。

否定の否定のうちに存するところの肯定もしくは自己肯定は、自己自身に關してなほ確實ならぬ、従つてその對立物によつてつき纏はれた、自己自身について疑ひを持つた、その故に證明を必要とするところの、従つてその否定によつて自己自身を證明するのではないところの、すなはち承認されざる肯定として把握され、従つてこれに對しては、直接に且つ無媒介的に、感覺的に確實な、自己自身の上に基礎づけられた肯定が對置される。

しかしながらヘーゲルが否定の否定を——その中に存する肯定的關係の上からは、眞にそして唯一に肯定的なるものとして——その中に存する否定的關係の上からは、一切の存在の唯一的に眞實な行爲及び自己確證行爲として——把握したことによつて、彼は歴史の運動に對する單に抽象的、論理的、思辨的表現を見出したにすぎない、しかもこのものは未だ前提された主體としての人間の現實的歴史ではなく、せいぜい人間の創生、行爲、發生史である。——吾々は抽象的形式をも、ならびに又この運動がヘーゲルにおいて、近代的批判と對立しつゝフオイエルバツハの基督教の本質における同一の過程に對して持つ差異をも、或ひはむしろこのヘーゲルにあつては未だ無批判的な運動の批判的形態をも、明らかにするであらう。

ヘーゲルの體系を一瞥しよう。人はヘーゲル哲學の眞の生地であり且つその秘密であるところの、ヘーゲルの現象學（註七）から始めねばならぬ。

（註一）ブルノー・バウエル、ヨハネの聖書史の批判。ブレイメン、一八四〇年。初三福音書著者の聖書史の批判。二卷。ライプチヒ、一八四二年。三卷、ブラウンシュヴァイク、一八四二年。

（註二）ブルノー・バウエル、覆ひをとられた基督教。十八世紀への追憶及び十九世紀の批判のための貢獻。チューリヒ及びヴィンタートゥール、一八四三年。——新版は、エルンスト・バルニケルの三月前における被ひをとられた基督教。宗教及び基督

教に對するブルノー・パウエルの闘争……イエナ一九二七年、の中に入つてゐる。

四四

(註三) ブルノー・パウエル、自由のよき事柄及び私の事柄。チューリヒ及びウインタートウル一八四二年、一九三頁。

(註四) 最近の哲學及び出版に關する挿話、アーノルド・ルーゲ發行。チューリヒ及びウインタートウル一八四三年。第二卷六二頁。哲學改革のための暫定綱領、ルドウイヒ・フ、オ、エル、パツ、ハ著。

(註五) ルドウイヒ・フ、オ、エル、パツ、ハ、將來の哲學の根本原則。チューリヒ及びウインタートウル一八四三年。

(註六) ブルノー・パウエルによつて發行された一般文學——日刊。月刊。第一——二卷。シャロットテンブルグ、一八四四年。第一冊、第一頁、第五冊二三頁、第八冊、一八頁參照。

(註七) ゲー・ツエー・エフ・ヘーゲル、科學體系。第一部、精神の現象學。ハンブルグ及びウエルツブルグ、一八〇七年。

現象學

A、自己意識

一、意識。a、感覺的確實性、或ひはこれと私念。b、知覺、或ひは諸性質を伴へる物と錯覺。c、力と悟性、現象と超感性的世界。

二、自己意識。自己自身の確實性の眞理。a、自己意識の自立性と非自立性、主人と奴隸。b、自己意識の自由。ストア主義、懷疑主義、不幸なる意識。

三、理性。理性の確實性と眞理性。a、觀察的理性。自然及び自己意識の觀察。b、理性的自己意識の自己自身による實現。歡樂と必然性。心情の法則と己惚の妄想。徳性と世間。c、即自且對自的に實有的なる個性。精神的動物王國

と欺瞞、或ひは事態そのもの。立法的理性と法律吟味の理性。

B、精神

一、眞の精神、人倫。二、自己を疎外されたる精神。三、自己自身を確信せる精神、道德。

C、宗教。自然的宗教、藝術的宗教、啓示的宗教。

D、絶對的知識。

ヘーゲルのエンチクロペデイが論理學を以つて、純粹なる思辨的思想を以つて始まり、そして絶對的知識、自己意識的な、自己自身を把握せる哲學的或ひは絶對的精神、換言すれば超人間的抽象的精神を以つて終るが如く、全エンチクロペデイは哲學的精神の擴大された、本質(註八)その自己對象化に外ならない。同様にまた哲學的精神は、その自己疎外の埒内において思惟的に、即ち抽象的に自己を把握するところの疎外されたる精神世界に外ならない。論理學——精神の貨幣、人間及び自然の思辨的な、思想價值——一切の現實的規定性に對して完全に無頓着となつた、従つて非現實的な本質——外化された、従つて自然及び現實の人間から抽象された思惟、抽象的思惟。——この抽象的思惟の外在性……自然。この抽象的思惟に對してあるが如き自然。後者は前者に對して外的であり、前者の自己喪失である、そして前者はまた後者を外的に把へる、すなはち抽象的思想として、しかも外化されたる抽象的思惟として。——最後に精神、この自己自身の生地に歸還するところの思惟、それは人間學的、現象學的、心理學的、人倫的、藝術的——宗教的精神としては未だ自己自身に對してのみ通用し、最後に絶對的知としては今や絶對的、換言すれば抽象的精神のうち自己を見出し、自己を結合し、自己の意識的且つ自己に相應せる定在を獲得する。なぜならこの精神の現實的定在は、抽象で

あるから。……………

二重の缺陷がヘーゲルにある。

第一のそれはヘーゲル哲學の生地としての現象學において最も明瞭に現はれる。もし彼が例へば富、國家權力等々を、人間的、本質から疎外された本質として把握したとしても、このことはたゞ思想形式において起るにすぎない。それらのものは思想物である——従つて單に、純粹な、換言すれば抽象的哲學的な思惟の疎外である。全運動は従つて絶對的知を以つて終る。これらの諸對象がそれによつて疎外され、且つそれに對して現實性の自負を以つて立ち現はれるところのもの、それこそまさに抽象的思惟である。哲學者は自己自身を——だからそれ自身疎外されたる人間の抽象的姿態を——疎外されたる世界の標尺として適用する。外化の全歴史及び外化の回復の歴史は、かくて、抽象的、即ち絶對的思惟の、論理的思辨的思惟の生産の歴史に外ならない。疎外——それは従つてこの外化及びこの外化の揚棄の本來の關心事をなす——は、即、自と對、自との、意識と自己意識との、客觀と主觀との對立、即ち抽象的思惟と感性的現實或ひは現實的感性との對立、しかも思想の埒内におけるそれである。他の一切の諸對立及びこの諸對立の一切の諸運動は、單に、他の世俗的諸對立の意味をなすところのこの唯一の興味ある諸對立の假象、覆被、顯在的姿に外ならない。人間的、本質が非人間的に、自己自身との對立において自己を對象化するのではなくて、それが抽象的思惟からの區別において且つそれに對する對立において自己を對象化するといふことは、指定され且つ揚棄さるべき疎外の本質として通用するのである。

對象に、しかも疎遠な對象になつたところの人間の諸本質力の領得は、従つて第一に、單に意識内において、純粹思惟において、即ち抽象において起るところの領得、思想及び思想の運動としてのこれらの諸對象の領得にすぎない。そこですでに現象學において——その徹底的に否定的、批判的外見に拘らず、且つ現實的にその中に含まれてゐるところの後期の發展にしばしはるかに卓越してゐる批判にも拘らず——すでに後期のヘーゲルの著作の無批判的實證主義、及び同様に無批判的な觀念論——現存の經驗知のかゝる哲學的解決及びその復活——が潜在的に横はつて居り、萌芽として、潛勢として、秘密として存在してゐるのである。第二に、對象的世界を人間のために返還せしめてゐること——例へば、感性的意識は決して抽象的に感性的な意識ではなくして、人間的に感性的な意識であるといふ認識、宗教、富等等は單に人間的對象化の、機關として産み出された人間的諸本質力の、疎外されたる現實にすぎないといふ認識、——かかる過程の領得或ひはそれへの洞察はだからヘーゲルにおいては次の様に現はれる、即ち感性、宗教、國家權力等々は精神的本質である——なぜなら精神のみが人間の眞の本質であり、そして精神の眞の形態は思惟する精神、論理的、思辨的精神であるから。自然及び歴史によつて創造された自然の人間の性質は、それが抽象的精神の生産物であり、従つてその限りに於いて精神的諸要素、思想物であるといふことのうちに現はれる。現象學は従つて隠蔽された、自己自身に關してなほ不明確な、神秘化的批判である。しかしそれが人間の疎外を——たとひ人間がたゞ精神の姿においてのみ現はれてゐるとしても——確保してゐる限り、その中には批判のすべての諸要素が隠されて居り、且つしばしはるかにヘーゲルの立場をはるかに超越する様な仕方準備され、完成されてゐる。「不幸なる意識」、「正直なる意識」、「高尚なる意識」と野卑なる意識（註九）との鬭争、等々、これらの個々の章節は批判的要素を含んでゐる——しかしなほ全領域の——すなはち宗教、國家、市民的生活等々の如き——疎外されたる形態においてだ。従つて本質、對象が思想物として存する如く、主觀もまた常に意識或ひは自己意識であり、或ひはむしろ對象は單に抽象的意識として現はれ、人間は單に自己意識として現はれ、立ち現はれるところの疎外の區別された諸姿態は従つて單に意識及び自己意識の様々な姿態で

ある。即、自、的、には抽象的意識——かゝるものとして對象は把握されてゐる——は單に自己意識の區別契機である如く——かくてまた運動の結果としては自己意識の意識との同一性、絶對的知——それはもはや外部に向つてゆくものではなく、たゞ自己自身の中でのみ進行するところの抽象的思惟の運動である——が結果として現はれる、即ち純粹思想の辯證法がその結果である。

ヘーゲルの現象學とその終局の成果——起動的、創造的原理としての否定性の辯證法——における偉大なるものは、そこで即ちヘーゲルが人間の自己創造を過程として把握し、對象化を對置作用として、外化及びこの外化の揚棄として把握してゐること、従つて彼が労働の本質を把握し、對象的人間、眞なる、現實的なるが故に眞なる人間を、その人間自身の労働の成果として把握してゐることである。種屬本質としての自己自身に對する人間の現實的、能動的態度、或ひは一の現實的種屬本質、即ち人間の本質としての人間の自己實現化は、たゞ彼が現實に彼のすべての種屬の力を採り出し、——このことはまた人間の總體的作用によつてのみ、歴史の成果としてのみ可能である——これらの諸力を諸對象としてこれに關係する——このことはまた先づ疎外の形態においてのみ可能なのであるが——といふことによつてのみ可能である。

ヘーゲルの一面性と限界とを吾々は今や現象學の最終章、絶對的知——この章は現象學の總括的精神を、ならびに思辨的辯證法に對する現象學の關係を含むと共に、兩者及び兩者の相互關係に關するヘーゲルの意識を含んでゐる——において詳細に叙述するであらう。

吾々は先づしばらく次の點を問題にしよう——ヘーゲルは近代の國民經濟學の立場に立つてゐる。彼は労働を本質として、人間の恒存的本質として把握する。彼は労働の肯定的側面のみを見てゐる、その否定的側面を見てゐない。労働

は外化の埒内における、或ひは外化されたる人間としての、人間の自覺 (Für-sich-werden) である。ヘーゲルが知り且つ承認してゐる労働は、單に抽象的精神的なそれである。そこで一般に哲學の本質を形づくるところのもの、自己を知る人間の外化或ひは自ら思惟する外化されたる科學、これをこそヘーゲルは哲學の本質として把握する、そしてそれ故に彼は先行哲學に對してその個々の諸契機を總括し、そして彼の哲學を哲學そのものとして敘述することができるのである。他の哲學者達がなしたこと——即ち彼等は自然及び人間生活の個々の諸契機を自己意識の諸契機として、しかもつまり抽象的自己意識の諸契機として把へてゐる、——このことをヘーゲルは哲學の行爲から知つてゐる、その故に彼の科學は絶對的である。

今や吾々は吾々の對象に移らう。

絶對的知。現象學の最終章。

主要な事柄は、意識の對象は自己意識に外ならないこと、或ひは對象はたゞ對象化された自己意識であり、自己意識が對象としてあることである。(人間の指定自己意識)

そこで意識の對象を克服する必要がある。對象性そのものは、疎外されたる、人間の本質及び自己意識に相應せざる人間の關係として評價される。疎遠なものとして、疎外の規定の下につくり出された人間の對象的本質の奪還は、従つて疎外を揚棄する意味を持つのみでなく、また對象性を揚棄する意味をもつのである、即ちかくて人間は對象的ならざる、靈的なる本質として評價されるのである。

さて意識の對象の克服の運動をヘーゲルは次の様に記述してゐる。

對象は單に(それはヘーゲルに従へばかの運動の一面的な、従つて一側面を把へてゐる把握である)自己のうちへ還

歸するものとして示されるのみではない。人間は自己と等置されてゐる。自己はしかるに單に抽象的に把握され、抽象によつて産み出された人間にすぎない。人間は自己的である。彼の眼、彼の耳等々は自己的である。彼の本質諸力のすべてはその中に自己性の性質をもつてゐる。しかしだからといつて次の様に云ふのは全く間違つてゐる。自己意識は眼、耳、本質諸力を持つてゐると。自己意識はむしろ人間的な自然、人間の眼等々の一つの質であつて、人間的な自然が自己意識の一つの質ではない。

對自的に抽象され、固定された自己は、抽象的、エゴイストとしての人間、その純粹抽象たる思惟にまで高められた、エゴイストである。(吾々は後にこの點に立ち歸らう。)

人間の本質、人間は、ヘーゲルにとつては自己意識と等しい。人間の本質のあらゆる疎外はそれ故に自己意識の疎外以外のなものでもない。自己意識の疎外は、人間の本質の現實的疎外の表現、知識と思惟の中に反映されるその表現としては値ひしない。現實的な、實在的なものとして現はれる疎外は、むしろ、その最奥に隠された——そして哲學によつてはじめて光の下にもたらされるところの——本質に従へば、眞の人間の本質の、すなはち自己意識の疎外の現象に外ならない。このことを理解してゐるところの科學は、だから従つて現象學と稱してゐるのである。疎外された對象の本質の一切の奪還はそれ故に自己意識の中への同化作用として現はれる。その本質を奪還せんとする人間は、單に對象の本質を奪取せんとする自己意識にすぎず、對象の自己への歸還はそれ故に對象の奪還である。

あらゆる側面から意識の對象の克服が表現されてゐる。

1、對象そのものは意識に對して消滅的なものとして現はれる。2、物を指定するものは自己意識自身の外化である。3、この外化は單に消極的の意味のみならず、積極的の意味を有すること。4、この意味を單に吾々に對してのみでなく、

それ自身に對して持つてゐること。5、それに對しては對象の消極的なものは、或ひはそれの自己揚棄は、そのことによつて積極的の意味を有し、或ひはそれは自己の無なることを、自己自身を外化することによつて知る、なぜならこの外化においてそれは自己を對象として指定する、或ひは對象の自覺(Fürsichsein)の不可分の統一のために自己自身として指定する、からである。6、他方またこの中には同時に次の様な他の契機が存してゐる、すなはちそれはこの外化及び對象性を同様にまた揚棄し且つ自己中へ奪取してゐること、従つてそれ、他在において自己自身に止まつてゐるといふことである。7、これが意識の運動であり、これがそれ故その諸契機の總體である。8、それは同様に對象をその諸規定の總體に従つて處理し、その諸規定の各々に従つてかく把握しなければならぬ。對象の諸規定のこの總體性は對象を即自的に精神的本質となし、そしてこの精神的本質は眞實においては、これらの諸規定の各々を自己のそれとして把握することによつて、或ひはこれらの諸規定に對する上に述べられた如き精神的態度によつて、意識に對してのものとなる。

(1) に関しては、對象そのものが意識に對して消滅的に現はれるといふことは、上に述べた對象の自己自身への歸還である。

(2) に関しては、自己意識の外化は物を指定する。人間は自己意識と等しいから、その外化された對象の本質或ひは物——(彼に對して對象たるもの、そして對象は眞に彼に對してのみ存する、そこでそれは彼にとつて本質的對象であり、従つて彼の對象の本質である。ところがさて現實的人間ではなく、それ故にまた自然——人間は人間的、自然である——がかゝるものとして主観となされてゐるのではなくして、單に人間の抽象、自己意識が、主観となされてゐるが故に、物は單に外化された自己意識たり得るのみである)は、外化された自己意識に等しく、そして物がかゝる外化によつて指定されてゐる。生命のある、自然的な、對象的即ち物質的本質諸力をもつて裝はれ且つ賦與された本質もま

たその本質の現實的、自然的諸對象をもつのみならず、またその自己外化が、一つの現實的な——しかも外在性の形態のもとにおける、だからその本質に屬せず、且つ超強力的な——對象的世界の措定であるといふことは全く自然的である。そこには理解し難き且つ不可思議なるなものもない。むしろその反對が不可思議であらう。しかし自己意識が、即ちその外化が單に物を、即ちそれ自身單に抽象的な物を措定し得るのみで、なんらの現實的なものをも措定し得ないといふことは同様に明らかである。更にまた、従つて物は自己意識に對してなんら自立なるもの、本質的なものではなくして、單なる被造物、それによつて措定されたものであり、そして措定されたものは、自己自身を主張する代りに、たゞ措定の行爲の主張であり、この措定行爲は一瞬間そのエネルギーを生産物として固定し、そしてこの生産物に外見上——しかも單に一瞬間の間——自立的、現實的本質の役割を分けてやるのである。

もし現實的な、有體的な、固い圓くなつた地球の上に立つた、すべての自然力を呼吸してゐる人間が、彼の現實的、對象的諸本質力を自己の外化を通じて疎遠な諸對象として措定するならば、そのときは措定作用が主體ではない。それは對象的諸本質力の主觀性であり、その行爲は従つてまた對象的なものでなければならぬ。對象的本質は對象的に作用する、そして對象的なものがその本質規定のうちに存しないならば、それは對象的に作用しないであらう。それ(對象的本質)はたゞ諸對象をのみつくり出し、措定する、なぜならそれは諸對象によつて措定され、それは素々から自然であるから。だから措定の行爲においてそれはその「純粹活動」から對象の創造に落ち込むのではなく、その對象的産物はたゞその對象的活動を、對象的、自然的本質的活動としてのその活動を實證するのみである。

吾々はこゝに、徹底された自然主義或ひは人間主義がいかに觀念論からも、また唯物論からも異つてゐるか、そして同時に兩者を合一する眞理であるかを見る。吾々は同時に、いかに自然主義のみが世界史の行爲を理解する能力を有す

るものであるかを見る。

人間は直接に自然物である。自然として且つ生ける自然物として彼は一方、自然的諸力、生命力をもつて装はれ、活動的、自然物である。これらの諸力は彼のうちに素質及び能力として、衝動として現存してゐる。他方彼は自然的、有體的、感覺的、對象的本質として、動物や植物がそうである様に、受動的、制約的、制限的本質である。換言すれば彼の諸衝動の諸對象は彼の外部に、彼とは獨立な諸對象として存在する、しかしこれらの諸對象は彼の欲望の諸對象であり、彼の諸本質力の活動と實現のために不可欠な、本質的諸對象である。人間が有體的、自然力的、生命的、現實的、感覺的、對象的本質であるといふことは、まさに彼が現實的、感覺的諸對象を彼の本質及び彼の生活表現の對象としてもつこと、或ひは彼が現實的、感覺的對象においてのみ彼の生活を發現せしめ得ることを云ふのである。對象的、自然的、感覺的であること、及び對象、自然、感覺を自分の外に持つこと、或ひは自ら第三者に對して對象、自然、感覺であることは同一である。飢餓は一つの自然的欲望である。飢餓はそこで自己を満足させるために、自分の外に自然を、外部の對象を需める。飢餓は自身の外に存在するものに對する、自身の充實と本質發現のために不可欠なる諸對象に對する。肉體の欲望である。太陽は植物の對象であり、植物にとつて不可欠な、その生活を實現せしめる對象である、同様に植物は太陽の對象であり、太陽の生命實現力、太陽の對象的本質力の發現としての對象である。

その自然を自己の外に有しないところの本質は、自然的本質ではなく、自然の本質に關與しない。自己の外になんらの對象をも有しないところの本質は、對象的本質ではない。

第三者に對して自ら對象でないところの本質は、なんらの本質をもその對象として有しない、換言すれば對象的に振舞はない、その存在はなんらの對象的なものではない。

非對象的本質は**非本質**（非存在——譯註）である。

自ら對象でもなく、また對象を有するでもないところの本質を假定するとせよ。かゝる本質は第一に**唯一の本質**であらう、その外にはいかなる本質も存在せず、それは孤獨に存在するであらう。なぜなら私の外に對象が與へられるや否や、私がひとりでなくなるや否や、私は私の外にある對象とは**他のもの**であり、他の**現實性**であり、換言すればその對象であるから、他の本質の對象ではない様な本質はだから、いかなる對象の本質も存在しないことを豫想する。私が對象をもつや否や、この對象は私を對象としてもつ。しかし對象的ならざる本質は非現實的、非感覺的、單に思惟されたる、即ち單に想像されたる本質、抽象の本質である。感覺的であること、換言すれば現實的であることは、感覺の對象であること、感覺的對象であること、従つて自己の外に感覺的諸對象を有すること、その感性の諸對象を有することである。感覺的であることは受働的であることである。

對象的**感覺的本質**としての人間はそれ故に受働的なものであり、そして彼の受働（悩み）を感受する本質であるが故に**激情的本質**である。激情、パッションは、その對象に向つて強力に迫進するところの人間の**本質力**である。

併し人間は單に自然物ではなく、**人間的**自然物である。換言すれば自己自身に對して存在する本質であり、その故に種屬本質であり、斯るものとして人間はその存在並びに知識において自己を主張し且つ實證しなければならぬのである。そこで**人間的**諸對象は直接に見出されるがまゝの自然的諸對象でもなく、なほまた**人間的**感覺も、それが直接的に存在し、對象的であるがまゝでは、**人間的**感性、**人間的**對象性ではない。客觀的なものとしての自然も、主觀的なものとしての自然も直接的に**人間的**本質に對して相應的に存在してゐるものではない。そして一切の自然的なるものが發生しなければならぬ如く、人間もまた彼の發生行為、歴史をもつ、このものはしかし彼にとつて自覺的なものであり、意

識を伴へる發生行為として自己を揚棄する發生行為である。歴史は人間の眞の自然史である。——（このことについては後で立ち還らう。）

第三に、物のかゝる指定はそれ自身單に假象にすぎず、純粹活動の本質に矛盾する行為であるから、それは再び揚棄されねばならぬ、物は否認されねばならぬ。

(3)、(4)、(5)、(6)、に關して。(3)意識のかゝる外化は單に消極的意味を有するのみならず、また積極的意味をもつ、(5)それ（意識——譯註）に對して對象の消極的なもの或ひは對象の自己揚棄は、次のことによつて積極的意味をもつ、換言すればそれ（意識——以下同様——譯註）は對象のかゝる虚無性を次のことによつて知る、即ちそれが自己自身を外化することによつて、なぜなら、この外化においてそれは自己を對象として知る、換言すれば對象を對**自的存在**（Fürsichsein）の不可分的統一性のために自己自身として知るが故である。(6)他方このことのうちには次の様な他の契機が存在する、すなはちそれはかゝる外化及び對象性を同様にまた揚棄されたものとして自己自身のうちに取り返し、従つてかくてそれの**他在**そのもの、うちにおいて自己自身の許に止まつてゐるといふことである。

吾々はすでに見て來た。疎外されたる對象の本質を己がものにする、或ひは**疎外**——それは無頓着な疎遠性から現實的な、敵意ある疎外にまで進んで行かねばならない——の規定の下における對象性を揚棄することは、ヘーゲルにとつては同時に、或ひは更に主として、對象性を揚棄するといふ意味をもつてゐる、なぜなら對象の一定の性質がではなく自己意識に對するその對象的性質が疎外における衝動的なものであるから。對象はそれ故に消極的なもの、自己自身を揚棄するところのもの、虚無性である。對象のこの虚無性は意識にとつて單に消極的意味のみでなく、また積極的意味をもつ、なぜなら對象のかの虚無性こそはまさに**非對象性**の、**抽象**の、即ちそれ自身の自己實證であるから。意識

そのものに對しては對象の虚無性は次の故に積極的意味をもつ、即ちそれはこの虚無性を、對象性的本質を、その自己外化として知るが故に、即ち對象のこの虚無性がたゞその自己外化によつて存在することを知るが故に……意識がいかにあるか、或るものがそれに對していかにあるか、の仕方が知である。知は意識の唯一の行爲である。或るものはだから、意識がこの或るものを知る限りにおいて、意識に對して存在する。知は意識の唯一の對象的態度である。——意識はいまや次のことによつて、對象の虚無性を知る、換言すれば對象と自己自身との無差別性を、意識に對する對象の虚無性を知る——即ち意識が對象を己れの自己外化として知るといふことによつて。換言すれば自己——對象としての知——を次のことによつて知る、すなはち對象はたゞ對象の假象、假現的な煙であるが、しかしその本質からいへば知そのもの以外のなものでもない、といふことによつて。この知は自己に自己自身を對置し、従つて自身に對して虚無性を、或るもの——それは知の外になんらの對象性を有しない——を對置したのである。或ひは知は次のことを知る、すなはち意識は、それが對象に關係する場合、たゞ自分の外に存在し、自己を外化するのみであるといふことを、即ちそれ自身が自身に對して對象として現はれるにすぎない、従つてその他在そのものにおいて自己の許に止まるといふことを。

吾々はこの説明の中に思惟のあらゆる幻想が總括されてゐるのを見る。

第一に、意識は、自己意識はその他在そのもの、うちにおいて自己の許にあるといふこと。意識はだから——或ひはもし吾々がこゝでヘーゲルの抽象を捨象して、自己意識の代りに人間の自己意識を置くならば——この意識はそれの他在のものにおいて自己の許にある。このことの中には先づ次のことが含まれてゐる。意識——知としての知——思惟としての思惟——は直接的に自己自身の他者であり、感性、現實性、生活であると誇負する——これ即ち思惟において

掛値を云ふところの思惟(フオイエルバッハ)である。意識が單に意識として、疎外されたる對象性においてではなく、對象性そのものにおいてその障害物をもつ限り、かゝる側面がこゝに含まれてゐる。

第二に、こゝには次のことが含まれてゐる、即ち自己意識の人間は、彼が精神的世界——或ひは彼の世界の精神的一般的な定在——を自己外化として認識し且つ揚棄した限り、しかも彼がこれを再びかゝる外化された姿において確認し且つ彼の眞の定在として示し、この世界を再構成する限り、彼の他在そのものにおいて自己の許にとゞまると誇負し、かくて例へば宗教の揚棄のうちに、宗教を自己外化の産物として認識するのに、しかも宗教としての宗教のうちに自己が實證されてゐるを見出すといふことである。こゝにヘーゲルの謬れる實證主義の、或ひは彼の單に、外見的な批判主義の根が存する。これすなはちフオイエルバッハが、宗教或は神學の措定、否定、そして再措定と名づけたものである——しかもこれはより一般的に考へられるべきものである。かくて理性は非理性としての非理性のうちにおいて自己の許にある。法律、政治等々の中で外化された生活を遂行することを認識した人間は、かゝる外化された生活そのものうちにおいて彼の眞の人間の生活を遂行する。自己自身との矛盾に於けるならびに對象の知と本質との矛盾における自己肯定、自己實證は、それ故に眞の知及び生活である。

宗教、國家等々に對するヘーゲルの順應に關してはだからもはや一言の説明もあり得ない、なぜならかゝる虚偽は彼の前進の虚偽であるから。

私が宗教を外化されたる人間的自己意識として知る場合には、私は従つて宗教の中に私の自己意識が實證されてゐるのを知るのではなく、私の外化されたる自己意識がその中に實證されてゐるのを知るのである。私の自己自身に、自己の本質に屬する自己意識を、私は従つて宗教の中に實證されてゐるのを知るのではなく、むしろ破棄された、揚棄され

た宗教の中に實證されてゐるのを知るのである。

ヘーゲルにあつてはそれ故に否定の否定は、まさに假象の否定を通じての眞の本質の實證ではなく、却つて假象の實證、或ひは疎外されたる本質のその否定における實證であるか、或ひは對象的な、人間の外部に棲息する、彼とは獨立な本質としてのこの假象體の否定、従つてこの獨立の本質の主觀の中への移住であるかである。

その中に否認と保存、肯定とが結合されてゐるところの揚棄作用はそこで獨特の役割を果してゐるのである。

そこで例へばヘーゲルの法律哲學において、揚棄されたる私權は道德に等しく、揚棄されたる道德は家族に等しく、揚棄されたる家族は市民的社會に等しく、揚棄されたる市民的社會は國家に等しく、揚棄されたる國家は世界史に等しい。現實においては私權、道德、家族、市民的社會、國家等々は恒常的に存在してゐる、たゞそれらは諸契機に、すなはち孤立的には妥當せず、交互的に解消し且つ産出し等々するところの、人間の諸生存及び諸生存様式になつた、即ち運動の諸契機になつたのである。

これらのものゝ現實的存在のうちにはこういふ可動の本質が隠されてゐる。それは思惟において、哲學において、はじめて眼前に、啓示にもたらされる、そしてそれ故に私の眞の宗教的存在は私の宗教、哲學的存在であり、私の眞の政治的存在は私の法律、哲學的存在であり、私の眞の自然的存在は私の自然、哲學的存在であり、私の眞の藝術的存在は藝術、哲學的存在であり、私の眞の人間的存在は私の哲學的存在である。同様に宗教、國家、自然、藝術の眞の存在は、宗教哲學、自然哲學、國家哲學、藝術哲學である。しかしもし私にとつて宗教哲學等々がたゞ宗教の眞の存在であるならば、私はまたたゞ宗教、哲學者としてのみ眞に宗教的であり、従つて私は現實的、宗教性及び現實に宗教的な人間を拒否することになる。しかし同時に私はこれらのもの（宗教、國家、等々——譯註）を確認する、一部は私がこれらのものに對置する

ところの私の固有存在或ひは他人の存在——なぜならこれは單に上のものゝ哲學的表現にすぎないから——の内部において。他方上のものゝ獨特の、原始的姿において、なぜならそれらのものは私にとつて單に外見的、他在として、寓意として、その固有の眞の、即ち私の哲學的存在の、感覺的覆被のうちに隠された姿として妥當するからである。

同様に揚棄されたる質は量に等しく、揚棄されたる量は度合に等しく、揚棄されたる度合は本質に等しく、揚棄されたる本質は現象に等しく、揚棄されたる現象は現實性に等しく、揚棄されたる現實性は概念に等しく、揚棄されたる概念は客觀性に等しく、揚棄されたる客觀性は絶對理念に等しく、揚棄されたる絶對理念は自然に等しく、揚棄されたる自然は主觀的精神に等しく、揚棄されたる主觀的精神は人倫的客觀的精神に等しく、揚棄されたる人倫的精神は藝術に等しく、揚棄されたる藝術は宗教に等しく、揚棄されたる宗教は絶對知に等しく。

一方この揚棄は思惟されたる本質の揚棄であり、従つて思惟されたる私有財産が道德の思想の中へ揚棄される。しかも思惟は自ら直接に自己自身の他者、感覺的現實であると思惟するが故に、従つて思惟の行爲はまた感覺的、現實的行爲として妥當するが故に、そこでその對象を現實においてはそのままに放置してゐるところのこの思惟的揚棄は、この對象を現實的に克服したと信ずる、他方、この對象はいまや思想的契機となつてゐるが故に、この對象はその現實性においてこそ自身、すなはち自己意識の、抽象の、自己確認と考へられるのである。

一面においては、それ故に、ヘーゲルが哲學の中で揚棄するところの存在は、現實的宗教、國家、自然ではなくして宗教そのものはすでに知の對象として教條學であり、同様に法學、國家學、自然科學である。一方ではだから彼は現實的本質ともまたこの本質の直接的非哲學的科學、或ひは非哲學的概念とも對立してゐる。彼はそこで現實的本質の日常的概念と矛盾してゐる。

他方、宗教的等々の人間はヘーゲルにおいて彼の最後の確證を見出すことが出来る。

いまやヘーゲル辯證法の積極的諸契機——疎外の規定の埒内における——を把握せねばならぬ。

a. 對象的な、外化を自己の中へ取り返す運動としての揚棄作用。——これ對象的本質のその疎外の揚棄を通じての獲得（自己化）に關する、疎外の埒内において表現されたる洞察であり、對象的世界の疎外されたる規定の否定を通じて、その揚棄を通じて、その疎外されたる存在においての、人間の現實的對象化、その對象的本質の現實的獲得に關する疎外されたる洞察である、たとへば無神論は神の揚棄として理論的人間主義の生成であり、共產主義は私有財産の揚棄として、人間の財産としての現實的人間の生活の返還請求である。實踐的人間主義のかゝる生成、或ひは無神論は、宗教の揚棄によつて、共產主義は私有財産の揚棄によつて自己自身と媒介されたる人間主義である。この媒介——これはしかし必然的前提である——の揚棄を通じてはじめて、積極的に自己自身から始まるころの、積極的人間主義が生ずる。しかし無神論、共產主義は、人間によつて産み出された對象的世界の、彼の對象性にまで産み出された本質諸力からの逃避でもなく、抽象でもなく、その喪失でもなく、不自然なる、未發達なる單純性に逆戻りする様な貧困でもない。それらの本質諸力はむしろ現實的生成であり、現實的に人間に對して生成したところの彼の本質の實現であり、現實的なるものとしての彼の本質の實現である。

ヘーゲルはだから、彼が自己自身に關係する否定の積極的意味を——たとひ再び疎外された仕事においてとはいへ、——把へることによつて、人間の自己疎外、本質發現、對象化を、自己獲得、本質變化、對象化、現實化として把へる、約言すれば彼は——抽象の埒内において——労働を人間の自己産出行爲として、疎遠なる本質としての自己自身への關係及び疎遠なる本質としての自己の實證を、生成しつゝある種屬意識及び種屬生活として把へる。

b. ヘーゲルにおいては——すでに述べられた倒逆性を度外視して、或ひはむしろその必然の結果として——この行爲はしかし第一に單に形式的なものとして現はれる、なぜなら抽象的なるものであるから、といふのは人間の本質そのものは單に抽象的、思惟的本質として、自己意識として考へられてゐるからである。或ひは

第二に、把握が形式的且つ抽象的であるが故に、外化の揚棄は外化の確證となる、換言すればヘーゲルにとつては自己外化及び自己疎外としての自己産出、自己對象化の運動は、絶對的な、それ故に最後のな、自己自身を目的とし且つ自己自身のうちに靜止してゐるところの、すなはちその本質に到達した人間の生活發現である。

その抽象的形式におけるこの運動は辯證法としてかくて眞に、人間の生活として考へられる、ところがそれは抽象であり、人間の生活の疎外であるが故に、神的過程と考へられ、従つて人間の神的過程と考へられる、——この過程を、人間から區別された、抽象的な、純粹な、絶對的本質が自ら通過するのである。

第三に、この過程は一つの擔ひ手、主觀をもたねばならぬ。しかし主觀は成果としてはじめて生成する。この成果、すなはち自己を絶對的自己意識として知るところの主觀は、だから神、絶對精神、自己を知り且つ實現する理念である。現實の人間及び現實の自然は單にこの隠れた非現實的人間及びこの非現實的自然的客語となり、象徴となつてゐる。主語と客語とは従つて互に絶對的顛倒の關係をもつ、神秘的、主觀客觀或ひは客觀を覆はんとする、主觀性、過程としての絶對主觀、自己を外化しそして外化から自己の中へ歸還するところの、しかもこの外化を同時に自己中へ取り戻すところの主觀及びかゝる過程としての主觀。純粹な、休みなき、自己内における循環。

第一に、人間の自己産出、或ひは自己對象化行爲の形式的、抽象的把握。

疎外された對象、人間の疎外された本質的現實は——ヘーゲルは人間を自己意識と等置してゐるから——意識以外の

ものでもない、單に疎外の思想であり、この疎外の抽象的な、且つそれ故に無内容な非現實的な表現、即ち否定である。外化の揚棄はそれ故に同様にかの無内容な抽象的、無内容的揚棄、否定の否定に外ならない。自己對象化の内容に充てる、活ける、感覺的、具體的活動は、それ故に、その單なる抽象、絶對的否定性になる、この抽象は再びかゝるものとして固定せしめられ、自立的活動、活動自體と思惟されるところの抽象である。この所謂否定性はかの現實的なる活ける行為の抽象的、無内容的形式に外ならないが故に、そこでその内容もまた單に形式的な、あらゆる内容からの抽象によつてつくり出された、内容であり得るのみである。それはだから一般的、抽象的な、いかなる内容にも所屬する、その故にまたいかなる内容に關しても無頓着な、またそれ故にいかなる内容にとつても妥當するところの、抽象の諸形態であり、現實的精神及び現實的自然から切り離された論理的諸範疇である。(吾々は絶對的否定性の論理的内容を更に下で發展せしめるであらう。)

ヘーゲルがこゝで——彼の思辨的論理學の中で——なし遂げた積極的なものは、自然及び精神に對しての獨立性における一定の諸概念、一般的、固定的、思惟諸形態は人間の本質の、従つてまた人間の思惟の一般的疎外の必然的結果であること、及びヘーゲルはかくてそれらのものを抽象過程の諸契機として表現し且つ總括したことである。例へば揚棄されたる存在は本質であり、揚棄されたる本質は概念であり、揚棄されたる本質は……絶對理念である。ところがさて絶對理念とは何であるか？ 絶對理念は、もしそれが再び始めから全抽象行為を經過し且つ次のことを以つて満足することを欲しないならば、すなはち諸抽象の總體或ひは自己を把握する抽象たることを以つて満足することを欲しないならば、絶對理念は再び自己自身を揚棄する。しかし自己自らを抽象として把握するところの抽象は自己を無として知る。それは自らを、抽象を揚棄しなければならない、そしてかくてそれはまさに自己の反對物たる本質に、自然に歸つて来る、全論理學はそれ故に、抽象的思惟は對自的には無であること、絶對理念は對自的には無であること、自然がはじめて或るものであることの證明である。

絶對理念、抽象的理念——それは「自己自らとのその統一の點から觀るときは直觀であり。」(註十)(ヘーゲルのエンテクロペディ第三版二二二頁)、且つそれは「それ自身の絶對的眞理性において、自ら決定し、その特殊性の契機、或ひは最初の規定及び他在の契機を、直接的理念を、その反映として、自己を自然として、自由に自己のうちから放出せんと決意するものである」——ヘーゲリアンにとつて怖るべき頭痛をもたらしたところの、この全ての、かくも不思議且つ珍妙な恰好をしてゐる理念は、全然抽象の外のものでもない、即ち經驗によつて頓智をつけられ、その眞理性に關して開明された抽象的思想家が種々の——虚偽の、なほまた抽象的の——諸條件の下に次の如きことを決心することに外ならない、すなはち自己を放棄し、自己の他在、特殊なるもの、規定されたるものを、自己の據自存在、非存在、一般性、無規定の代りに置き、理念が單に抽象として、思想物として自己の中に隠してゐたところの自然を、自由に自己のうちから放ち、やること、即ち抽象を放棄し、自己を一たび抽象から自由なる自然として見ることを、決心することに外ならない。直接に直觀となるところの抽象的理念は、全く、自己を放棄して直觀にまで自らを閉出すところの抽象的思惟に外ならない。論理學の自然哲學へのこの全移行は、抽象的思想家にとつてしかく證明することの困難な、従つて彼によつてしかく冒險的なものとして記述されてゐるところの、抽象作用から直觀作用への移行に外ならない。哲學者をして抽象的思惟の中から直觀へと驅り立てるところの神祕的感情は、内容に對して憧憬する、無聊の感情である。

(自己自身から疎外された人間はまた彼の**本質**、即ち自然的及び人間の本質からも疎外された思想家である。彼の思想は

だから自然及び人間の外に棲息する固定せる諸精神である。ヘーゲルは彼の論理學においてすべてのこれらの固定せる諸精神を包括し、それらの各々を最初、人間の思惟の否定として、即ちその外化として、次に否定の否定として、即ちこの外化の揚棄として、人間の思惟の現實的外化として把へた。だがしかしそれ自らなほ疎外のうちに捉へられたものとして——この否定の否定は、一方ではその疎外におけるそれらの復活であり、他方ではこの外化の行爲に立ちとどまることであり、これらの固定されたる諸精神の眞の存在としての外化における自己關係作用である（即ちヘーゲルは抽象の自己内循環的行爲をか固定の諸抽象の代りに置いてゐる。このことによつて彼は第一に、その本源の日附に従へば個々の哲學者達に附屬するところのこれらのすべての不相應な諸概念の誕生地を追證し、それらを總括し、そして一定の抽象の代りにその全範域において汲み盡された抽象を批判の對象として創造したといふ功績を持つてゐる）（何故にヘーゲルが思惟を主觀から切離したかは吾々は後に見よう。しかし次のことは今や明らかである、即ちもし人間が存在しないならば、彼の本質發現もまた人間的是であり得ない、従つてまた人間の本質發現として、人間の且つ自然的な眼、耳等々を具へた、社會及び世界及び自然の中に生活してゐる主觀の本質發現として把へられることは出来なかつた）一方この抽象が自己自らを把握し、そして自己自身について無限の無聊を感じる限り、ヘーゲルにおいては、抽象的な單に思惟の中のみ動いてゐる思惟——それは眼もなく、齒もなく、耳もなく、すべてのものを缺く——の放棄は、自然を本質として承認し、自身を直觀に投ずる決心として現はれる。

しかし自然もまた、抽象的にとられ、對自的に、人間からの分離において固定せしめられるときは、人間にとつて無である。直觀へと決心したところの思想家がそれを抽象的に直觀することは自ら明らかである。恰かも自然が思想家に

よつて彼自身に對しても隠蔽された謎の如き姿において、絶對理念として、思想物として包括されて存在したが如く、彼は眞實においては、自然を自己のうちから放り出したことによつて、單にこの抽象的自然を——しかもいまや、この自然は思想の他在であり、それは現實的な直觀されたる、抽象的思惟から區別されたる自然であるといふ意味を伴つて——單に自然の思想物を自己のうちから放り出したのである。或ひは、人間の言葉で語るならば、彼の自然直觀において抽象的思想家は、彼が禱的辯證法の中で、自己自身の中で動きまはり現實を覗かうとせぬ思惟の仕事の純粹産物として、無から、純粹抽象から創造しようと思つたところの諸本質は、自然諸規定の諸抽象に外ならないといふことを經驗する。全自然はそれ故に彼にとつてたゞ感覺的、外的形態において論理的諸抽象を繰返すのみである。——彼は自然及びこれらの諸抽象を再び分析する。彼の自然直觀はそれ故に自然直觀からの彼の抽象の實證行爲、彼によつて意識的に繰返される彼の抽象の産出行程にすぎない。そこでたとへば時間は自己自身に關係するところの否定性に等しい（二三頁I、C、X註十一）。定在としての揚棄されたる生成に對しては——自然的形態においては——揚棄されたる運動が物質として對應する。光は——自然的形態——自己内反射である。月及び彗星としての物體は、論理學上一方自己自身の上、に休らう積極的なものと他方自己自身の上、に休らう消極的なものとの對立の——自然的形態である。地球は、對立の否定的統一としての論理的根據の自然的形態である等々。

自然としての自然は、即ち自然が感覺的なほかの祕密な、自らの中に隠された意味から區別される限り、即ち自然がこれらの諸抽象から分離され區別される限り、無であり、自己を無として保存する無であり、無意味であり、或ひは單に揚棄されてしまつてゐるところの外在性の意味を有するのみである。

「終局的——目的論的立場においては、自然は自己自身のうちに絶對的目的を包含しないといふ正しい前提が見出され

る〔二二五頁〕。自然の目的は抽象の實證化である。自然は他在の形態における理念として自己を示した。理念はかくてそれ自身の否定的なるものであり、或ひは自らに對して外的であるが、しかも自然は單に相對的にこの理念に對して外的なのではなく、却つて外在性こそはその下で自然が自然であるところの規定をなすものである〔二二七頁〕。

外在性はこゝでは、自己を發現するところの、そして光に對して、感覺的人間に對して開かれたる感覺性として理解すべきではない、この外在性は、こゝでは、存在すべからざるものであるところの、放擲、缺陷、不具の意味にとらるべきである。なぜなら眞理性は依然として理念であるから。自然は單にその他在の形態にすぎない。そして抽象的思惟は本質であるから、それに對して外的であるところのものはその本質上單に外的なるものである。抽象的思想家は同時に、感性は自然の本質であり、外在性は自己の中で紡いでゐる思惟と對立してゐることを認める。しかし同時に彼はこの對立を次の様に表現する、即ち自然のかゝる外在性は思惟に對するその對立、その缺陷であり、それは自らを抽象から區別する限り、缺陷ある本質であると。單に私にとつて、私の眼中において缺陷あるのみでなく、それ自體において缺陷ある本質は、自己のうち欠缺してゐるところの或るものを自己の外に有するのである。即ちその本質はそれ自身より以外のものである。自然はだから自己自身を抽象的思惟のために揚棄しなければならぬ、なぜなら自然はすでに思惟によつてその潜勢上揚棄されたる本質として措定されてゐるからである。

「精神は吾々にとつて自然をその前提として持つてゐる、即ち精神は自然の眞理であり、従つてその絶対的起始である。この眞理性の中で自然は消失し、そして精神は自己をその對自的存在に到達せる理念として示した、この理念の客觀ならびに主觀は概念である。この同一性は絶対的否定性である、なぜなら自然において概念はその完全な外的客觀性をもち、しかもかゝる己れの外化を揚棄し、そして概念はかゝる外化の中で自己自身と同一であるから。概念はそれ故

に自然からの歸還としてのみかゝる同一性である〔三九二頁〕。

「啓示——それは抽象的理念としては自然の直接的移行、生成である——は、自由なる精神の啓示としては、その世界としての自然の措定である。この措定は反省としては同時に自立的自然としての世界を前提することである。概念における啓示はその自然を概念の存在——その中で概念は自己の自由性の肯定と眞理性とを自己に與へるところの——として創造することである。」「絶対的なるものは精神である。これ絶対的なるものゝ最高の定義である〔註十二〕。

〔註八〕「哲學的精神の」のあとに、下端に、挿入個所の明示なしに次の様な注意書きがある。フ、オイエル、バツ、ハはなほ否定の否定、具體的概念を、思惟において掛値を云ひ且つ思惟として直接に直觀、自然、現實たらんと欲するところの思惟として把てゐる。

〔註九〕ヘーゲル、第四卷の他の箇所、及び第六卷I b、C、c、

〔註九〕この箇所は言葉通りには次の様に言つてゐる、「對自的であるところの理念は、かゝる自己自身との理念の統一の點から觀察されるとき直觀である。そして直觀する理念は自然である。」

〔註十一〕この箇所は言葉通りには次の如し、「點として自己を空間に關係せしめ、そしてその中で自己の諸規定を線及び面として發展せしめるところの否定性は、しかも自己外存在の領域においても同様に對自的であり、そして對自的存在における自己の諸規定を同時にまた自己外存在の領域において措定し、しかもその際靜止せる一並立」とは無關係なものとして現はれる。かく對自的に措定されたとき否定性は時間である。」

〔註十二〕ヘーゲル、エンチタクロベディ……三九三頁。

辯證法に關するレーニンの 二つの斷篇

まへがき——こゝに譯載された二つの斷篇はドイツの讀者にすでに知られてゐる斷篇「辯證法の問題について」と共に、辯證法の理論に關するレーニンの最もまとまつた、最も思想に富んだ表白に屬するものであつて、それは彼が折にふれ、また彼の一九一四—一九一六年のヘーゲル研究との緊密な結びつきにおいて、彼の「ノート」に記しておいたものである。

こゝで「ヘーゲル辯證法（論理學）のプラン」の二つの根本思想が強調されるべきである。レーニンはヘーゲル辯證法のプランのうちに、次のやうな効果多き、天才的な思想を觀取してゐる、すなはち、思想は歴史的過程として、また論理學はこの過程の成果として觀察されなければならないといふ思想がそれである。レーニンは、ヘーゲルの論理學のプランの總體をそのまま、正しいものと認めることからは全くかけ離れて、たゞ本質への、すなはち法則等々への行路は直接的存在の上に、現象の上に横はつてゐるといふ點のみを贊成的に強調してゐる。「これは實際——と彼は云ふ、——すべての人間認識（すべての科學）一般の一般、的發展行程である。……論理學においては思想の歴史は大體において思想の諸法則と一致しなければならぬ」と。なる程ヘーゲルは、直接的なものから本質へ、そして實踐を通じて客觀的眞理へと進む思想の行路を天才的に敘述してゐる、だが彼は轉倒した觀念論的な仕方で行つた。レーニンはそれ故ヘーゲルを是正して、この行路を、感覺——こゝには、すでにフォイエルバツハが云つたやうに、質が含まれてゐる、——から客觀的眞理への行路として觀察してゐる。吾々は眞理の規準としての實踐を通してこの客觀的眞理に到達するといふのである。そして思想のこの行路は人類の思想一般の歴史が通過する行路と、大體において一致しなければならぬ、とレーニンは考へてゐる。吾々はこの双方の場合において外部世界の反映を問題とするの

であり、——思想と存在の同一性（統一性）は双方の場合において妥當するのである。

レーニンは疑もなくヘーゲルの強力な思想行程に魅惑された。人類の思想および知識の歴史的生成行程に關する偉大な眞理はヘーゲルが神秘化された形態をもつて表現したところのものであるが、それは唯物論的に轉倒され改作されなければならないかつた。マルクスはこの勞作を遂行した。「資本論」のうちには論理學、辯證法および認識論——これは何れも同一のものだ——が適用されてゐる。「資本論」はこの見地から研究されなければならない。そしてかやうな研究にして初めて、如何に唯物論的論理學を建設すべきかの道を示しうるのであらう。レーニンは「資本論」を新たな方面から觀た。「資本論」をこの方面から觀察しようとは、社會民主主義の最良の智者といへども誰一人として思ひつかかなかつたことである。形而上學的に哲學すること、形而上學的思维様式が大體において（小數の例外を除いて）支配的であつた。そこにはヘーゲルの辯證法に對する深い理解が缺けてをり、またこれに結びついて、マルクスの學說およびその革命的辯證法の眞實な了得が缺けてゐたのである。

辯證法のレーニンの規定に移るに當つて、次の點が注意されるべきである。

辯證法のヘーゲル規定に不満なレーニンは、辯證法を自己流に規定化することに移つてゐる。吾々はこゝでヘーゲルとの一つのつながりを持つてゐる、だが他のすべての點においてはレーニンの獨立的な創造を持つてゐるのであり、この創造はマルクスおよびエンゲルスの勞作を最良の語義において續行し、一層發展させてゐるものである。物は對立物の總和および統一であり、その際對立物は不斷の闘争のうちに在る、——かやうに理解された對立物の統一が辯證法の核心を形成する。これによつて最も重要なことは語られてゐる、だがそれは「解明と發展」を必要とする。「解明」の根本思想は先づ第一に各々の物の關係の一般的、普遍的性質、すべてのもの、相互の普遍的統一、辯證法的、唯物論的、世界的把握の思想である。それはスピノーザ的思想である、だがそれは、——そしてこれは肝要なことだが、——より高い段階にあるものであり、そこでは世界の統一性は論斷され、設定されるべきでなく、示されるべきであり、そこでは統一性は凝固的なものとしてでなく、つねに動く、相對的な、一時的なものとして把握されるべきである。第九の規定の深い意味もまた統一性の思想のこの擴張、變革および辯證法的發展に在るのである。「單に對

立物の統一のみでなく、また各々の現象、各々の質、各々の特徴、各々の側面、各々の性質の、それらの他者への移行もある」
 一、單に統一性のみでは認識にとつて不充分であり、無効果であつて、認識は世界の多様性を制約するところの移行の研究を要する。凝固的な統一でなく、互ひに移行し、互ひに闘争のうちに在る諸々の現象、質等々の統一があるのである。従つて認識過程は對立物の移行、闘争のこの無限の過程を把握し、法則等々のうちに表現することに在るわけである。この認識過程は無限なものであるしまたあらねばならない、何故なら對立物の移行、闘争の客觀的過程は無限だからであり、互ひに決して合致しない思惟と存在の間の矛盾は永遠だからである。認識の行路はそれ故、物等々への無限の沈潜、現象から本質へ、またヨリ深い本質からヨリ深い本質への前進、の行路以外のものでありえない。かるが故にレーニンの辯證法は如何なる凝固的な限界、如何なる凝固的な概念をも知らない。本質といへどもレーニンにとつては決して窮極的に存在するもの、與へられたものではなく、現象に比して一層進んだ認識段階なのであつて、認識は單に現象から本質へと前進運動するのみでなく、ヨリ深い本質からヨリ深い本質へと前進運動するのである。

吾々は、近い中にこのテーマに戻つてくる機会を持つことを期待しつゝ、ここでは以上の簡単な評註をもつてやめ度い。

斷篇「ヘーゲル辯證法(論理學)のプラン」はレーニン資料集第十二卷から、辯證法の規定に關する斷篇はレーニン資料集第九卷から取つたものである。

編輯局

1 ヘーゲル辯證法(論理學)のプラン

(小論理學「エンチクロペデー」の目次)

I、存在論

(A)質 (a)存在 (b)定在 (c)對自の存在

(B)量 (a)純量 (b)定量 (c)度

(C)質量

II、本質論

(A)實存エグジステンスの根據としての本質

(a)同一性 差別 根據

(b)實存

(c)物

(B)現象 (a)現象の世界 (b)内容と形式 (c)關係

(C)現實性

(a)實體性の關係

(b)因果關係

(c)交互作用

III、概念論

(A)主觀的概念 (a)概念 (b)判斷 (c)推論

(B)客觀 (a)機械性 (b)化學性 (c)目的論

(C)理念 (a)生命 (b)認識 (c)絕對理念

概念（認識）は存在のうちに（直接的現象のうちに）本質（因果の法則、同一性、差別等々）を明かにする、——これが實際にすべての人間的認識（すべての科学）一般の、一般的發展行程である。これはまた自然科学並びに經濟學（および歴史）の發展行程でもある。その限りヘーゲル辯證法は思惟の歴史の普遍化である。このことを個々の科学の歴史の上でヨリ具體的に、ヨリ詳細に追求してみることは、極度に有益な課題だと思はれる。論理學においては思惟の歴史は大體において思惟の諸法則と一致しなければならぬ。

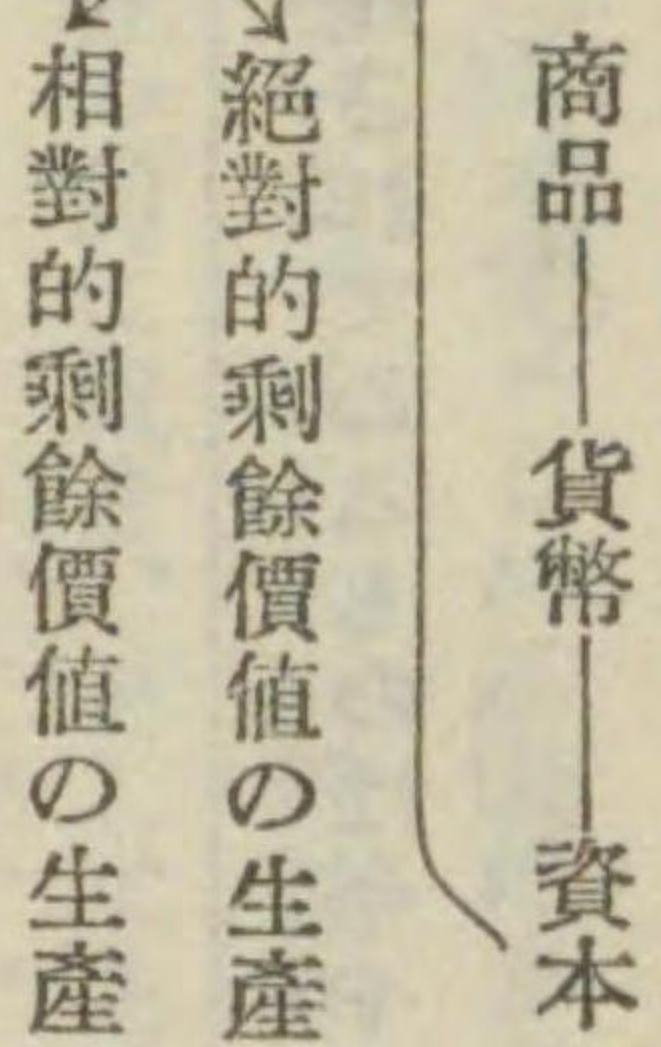
萬物流動
における
單なる一
契機とし
ての抽象
的存在

ヘーゲルが時には抽象的なものから具體的なものへと行き「存在」——抽象的なもの——「定在」——具體的なもの——「對自の存在」、時にはその逆に行つてゐる（主觀的概念——客觀——真理〔絕對理念〕）ことが目につく。これは觀念論者の不徹底さ（マルクスがヘーゲルにおける「理念の神祕論」と呼んだところのもの）ではないだらうか？ それともヨリ深い根據があるだらうか？（例へば存在は無であるといふのは生成、發展の理念であるといふ如き）。最初に印象が現はれ、次に或るものが突出し、——しかるのちに質の概念（物又は現象の諸規定）や量の概念が發展する。次に研究や思索は同一性——差別——根據——現象對本質——因果等々の認識へと思考を差し向ける。認識のこれらすべての段階、過程）は主觀から客觀への方向において運動するものであつて、その際それらの契機は實踐によつて檢證され、契機（歩み、そしてこの檢證を通して眞理へ（すなはち絕對理念へ）到達する。

質と感覺は同一のもので、とフォイエエルバッハは云ふ。感覺は吾々にとつては最初のものとして、また最も知れたものとして、現はれる、ところで感覺のうちには不可避的にまた質も……

「マルクスが「論理學」(大文字の「理」)を残さなかつたにしても、彼は尙も「資本論」の論理學を残した、そしてこれは

今の場合の問題のためには最高度に利用されなければならないだらう。「資本論」においては、ヘーゲルにおいて價值のあるすべてのものを吾がものとなし、そしてこの價值あるものを一層發展させたところの、唯物論の論理學、辯證法および認識論(三つの言葉は必要でない、それらは同一のものなのだ)が一つの學問に適用されてゐる。」



〔資本主義の歴史と、この歴史を概括する諸概念の分析〕

端初は——最も單純な、普通な、大量的な、直接的な「存在」である、すなはち個々の商品(經濟學における「存在」)である。社會關係の分析としての商品の分析。演繹的と歸納的の、二重の分析——論理的分析和歴史的な分析(價值の諸形態)。

(事實による、従つて實踐による檢證はこゝでは分析の一步毎に行はれてゐる)
現象對本質の問題と對照せよ。

- 價格と價值
- 「價值」(すなはち「結晶化した労働」)
- 對需要供給
- 労働賃銀と労働力の價格

(註) すなはち論理學に關する何らの著作をも殘さなかつたわけである、何故ならロシア語においてはたゞ固有名詞と表題だけが
が大文字で書かれるからである。——編輯局

2 辯證法の諸規定^{註一}

第三章「絶対理念」(三二七頁)。

……「絶対理念は、すでに示された如く、理論的理念と實踐的理念の同一性である。兩者は、各自單獨では未だ一面的なものである」(三二七頁)。

理論的理念(認識^{註二})と實踐の統一——これに注目せよ——そしてこの統一は、まさに認識論のうちにある、何故なら「絶対理念」(ところで理念は「客觀的に眞なるもの」である)總和として生じるからである(第五卷二三六頁)

觀察すべく殘されてゐるものは今やすでに内容ではなく……「その形式の一般的なもの——すなはち方法」だといふのである(三二九頁)。

「探求する認識においては方法はまた、道具として、主觀的方面に立脚する手段として立てられてゐるのであつて、主觀的方面はそれを通して客觀に關係する。……これに反し眞なる認識においては方法は單に特定の規定の集合ではなくて、それは、たゞ客觀的なものの意義をも有するが故にのみ中間項(論理學上の推論式における中項)であるところ

の概念の即自且つ對自の規定された存在である」(三三一頁)……

……「絶対的方法(すなはち客觀的眞理の認識の方法(註三)はこれに反し、外的反省として振舞はずに、規定されたものをその對象そのものから取つてくる、何となればこの方法そのものは對象の内在的原理であり魂だからである。これ(三三五頁)はプラトールが認識に要求したところのことである(三三六頁)、すなはち物を即自且つ對自的に觀察すること、すなはち一方ではその一般性において觀察し、だが他方では物から外れたり、事情、例および比較に擱まらないう物を單獨に自分の前に置き、そしてそれに内在してゐるものを意識に持ち來たすといふことである」(三三六頁)……

「絶対的認識」のこの方法は、分析的である……「だが同時に、綜合的でもある」(三三六頁)……
判斷のこの分析的にして同時に綜合的な契機は、端初的一般者がよつてもつてそれ自身よりして自身を、自身、他者として規定するところのものであつて、辯證法的契機と呼ばれるのである」(三三六頁)……(尙も次の頁を参照せよ)

「判斷のこの分析的にして同時に綜合的な契機は、端初的一般者(一般概念)がよつてもつて(この契機によつて)それ自身よりして自身をそれ自身に對して他者として規定するところのものであつて、辯證法的契機と呼ばれなければならない」

明白でない規定だ!!!

- (1) 概念の、それ自身よりする規定「物そのものはその關係およびその發展において觀察されなければならない」
- (2) 物そのものにおける矛盾(自身の他者)、あらゆる現象における矛盾した諸力と諸傾向。
- (3) 分析と綜合の統一

辯證法の
規定の一



見受けるところ、以上が辯證法の諸要素である。ひとはこれらの要素を尙もつと詳細に次のやうに表象することができよう。

- (1) 観察の客観性(例でなく、瑣末のものでなく、物自體)
- (2) これらの物の、他の物に對する多様な關係の完き全體。
- (3) この物(従つて現象)の發展、その固有の運動、その固有の生命。
- (4) この物における、内的に矛盾した諸傾向(および諸側面)
- (5) 對立物の總和および統一としての物(現象註四等々)
- (6) これらの對立物の鬭争、従つて展開、諸動向の矛盾等々。
- (7) 分析と綜合の統一——個々の部分の分解と總體、これらの部分の總括。

辯證法は簡單には對立物の統一に關する學として規定されうる。これによつて辯證法の核心は把握される、だがそれは解明と發展を要求する。

- (8) 各々の物(現象等々)の關係は單に多様なのみでなく、一般的、普遍的である。各々の物(現象、過程等々)は各々の物と結びついてゐる。
- (9) 對立物の統一のみでなく、各々の規定、各々の現象、各々の質、各々の特徴、各々の側面、各々の性質の、それぞれ、他者への(その對立物への?)移行。
- (10) 新たな側面、關係等々の發見の無限の過程。

辯證法の諸要素

(11) 人間による物、現象、過程等々の認識が、現象から本質へ、そしてヨリ深くない本質からヨリ深い本質へと深まつてゆく無限の過程。

- (12) 同時存在から因果へ、そして關聯と交互的依屬との一つの形態から他の、ヨリ深い、ヨリ一般的な形態へ。
- (13) 下位の段階の特定の特徴、性質等々の、より高い段階でのくり返し、および
- (14) 古いものへの外見上の復歸(否定の否定)
- (15) 内容の形式との、またその逆の、鬭争。形式の放擲、内容の改造。
- (16) 量の質への、またその逆の、移行。
(15と16は9の例である)

(註一) 題目は吾々がつけたものである。編輯局
 (註二) 草稿では「認識」といふ言葉は「理論的理念」といふ言葉の上に書かれてゐる。編輯局
 (註三) 草稿では「すなはち客觀的眞理の認識の方法」といふ言葉は「方法」といふ言葉の上に書かれてゐる。編輯局
 (註四) 草稿では「現象等々」は「物」といふ言葉の下に書かれてゐる。編輯局

マルクス・レーニン主義と辯證法

アドラツキイ

七八

マルクス及びエンゲルスによつて打ち立てられた方法たる唯物辯證法は、その後出現した新なる時期、帝國主義及びプロレタリア××の時期に於いて、レーニンによつて具體化せられ發展せしめられた。

「レーニンの方法は、マルクスの批判的・革命的方法、即ち彼の唯物辯證法の回復であるばかりでなく、またその具體化でもあり進展でもある」(スターリン「レーニン主義の基礎」第二章の結文)。(註一)

註(一) スターリン「レーニン主義の諸問題」マルクス主義叢書、第五卷、第四版、二六頁。

マルクス及びエンゲルスは、ヘーゲルの辯證法を根本から改造した。「反デューリング論」(一八八五年)の第二版の序文の中で、エンゲルスは言つてゐる。

「マルクスと私とはたしかに、意識的辯證法をドイツ觀念論哲學から自然及び歴史の唯物論的把握のうちに救ひ上げた唯一の人だつた。」

それが行はれた顛末については、エンゲルスが、ルードウィヒ・フォイエルバッハに關する彼の優れた勞作の中で、詳細に叙べてゐる。「救出」はヘーゲル辯證法の完全な作り直しに、その「顛倒」に(マルクス及びエンゲルスの表現によれば、ヘーゲル辯證法は頭で立つてゐた)存してゐた。唯物論の確固たる地盤の上に立つて、マルクス及びエンゲ

ルスは、彼らの科學的勞作に於いて、またその實踐的活動に於いて、唯物辯證法を利用し輝かしき成果を收め得たのである。彼らがプロレタリアートの大衆闘争の諸經驗を研鑽したこと、この闘争に最も生き生きとした仕方に参加し且つそれを指導したこと、このことを通じて彼らは、階級運動の科學的豫見の模範を、労働者階級の闘争指導の模範を與へた。彼らは、××的なプロレタリア階級闘争の歴史的經驗の諸成果を總括し、社會主義への唯一の可能な道——プロレタリア××とプロレタリアート××——の必然性のための科學的基礎付けを與へた。彼らは日和見主義に對して假借なき闘争を行つた。唯物辯證法は彼らの手にあつて、立派な、信頼すべき、理論的武器であつた。その方法を、最も内的な本質に於いて批判的な且つ革命的なものとして特質づけた人こそ彼らであつた。

マルクスは、辯證法の體系的・意識的適用の、その諸法則の研究の、最初の試みを企てた偉大な功績をヘーゲルに認めた、だが同時に彼はまた觀念論者ヘーゲルの矛盾、根本的缺陷、弱點を假借なく暴露した。

「資本論」(一八七三年)第一卷第二版の序文の中で、マルクスは、彼の辯證法的方法が「その根本において、たゞにヘーゲルのそれと異なるのみならず、むしろその正反對のもの」であることを指示した。しかしマルクスは、この相違の存する點を更らに説明してゐる。

「ヘーゲルにとつては、彼が理念の名の下に、一の獨立せる主體にまで轉化したところの、かの思惟過程は、現實的なものゝ創造主であり、現實的なものはたゞこの思惟過程の外的現象をなすにすぎない。私にあつては、これに反し、觀念的なものは、人間の頭腦に移植され翻譯されたる物質的なものに外ならぬ。」

なほマルクスは、その外にも、相違のも一つの本質的要素を示した。「その神秘化された(即ち觀念論的な)形態において、辯證法は、ドイツの流行となつた、それは現在事物を聖化するかに思へたからである。」唯物辯證法、乃至マルク

七九

スの表現するように、その合理的形態に於ける辯證法は、「何ものによつても畏伏せしめられず、その本質上批判的であり革命的である。」唯物辯證法は、対象の全面的支配を行ふ、それは対象をその運動に於いて、その發展に於いて、爾餘の世界とのあらゆるその複雑な聯關に於いて、探究し支配することを教へる。一八七〇年一月廿七日附のクーゲルマン宛の書簡の中で、マルクスは、「材料を處理する自由な運動は」辯證法的方法の本質の表現に外ならぬ、と言つてゐる。このやうにして彼は、かゝる方法によつてこそ、探究せられる客體の運動及び生命を餘蘊なく且つ忠實に反映し、対象を様々な觀點から研究することが出来るといふことを指示したのであつた。

辯證法的唯物論の上述の諸特質に、尙ほ、「対象の完全な規定」は、レーニンの言ふ如く、人間の總實踐的活動、即ち「全人間の實踐」をも包含してゐるといふことが附け加へられなくてはならぬ（レーニン「再び労働組合について」、全集、第二十六卷）。哲學者（その中にフォイエルバッハもまた屬する）による現實の觀察に對して、マルクスは、たゞに認識のみではなくまた外界の××をも要求するところの、能動的・活動的態度を對置する。哲學者達は世界をいろいろに解釋して來ただけだ。だが世界を××することが主眼なのだ。（一八四五年の初年に於けるマルクスのフォイエルバッハ論網。註）

註 エンゲルス「ルードウィヒ・フォイエルバッハ」、マルクス主義叢書、第三卷、七六頁参照。

辯證法的唯物論のまさに此の方面が、いかに偉大な、本質的な、決定的な意義を持つかは、特に現時に於いて到る處に現はれてゐる。革命期に於いては、革命の發展の急速なる進行のうちには、すべての矛盾が尖鋭に提起され、あらゆる政派の、あらゆる政黨の社會的性質が特に明瞭に窺はれ得る。ある一派が、マルクス主義的用語の衣裳でその言辭や演説を裝つてゐても、現實的な××的活動が、労働階級の××闘争との緊密な結合がそれに伴つてゐないならば、か

ゝる黨派は結局マルクス主義を裏切り、プロレタリアートの任務を裏切るに違ひないことは明瞭だ。

カール・カウツキイ、オットー・バウエル、マックス・アドラー等々のごとき、第二インターナショナルの若干の理論家共は、未だにマルクスの名に對して拜跪してゐるが、本質に於いて彼らは、マルクスの學說を裏切り、事實に於いて之と絶縁してをり、實際はプロレタリア革命の最も陋劣な裏切者であるのだ。吾々のところソヴェート同盟に於いてはマルクス主義を單なる成句集に、アカデミックな客觀主義に、單なる觀察に引下げることによつて、マルクス主義を去勢するところのメンシエヴィキ化しつゝある觀念論の代表者共が同じ流れに滑り込んでゐる。例へば、同志デボリーンはヘーゲル全集第一卷の序文の中で書いてゐる。

「辯證法的方法は、それ自身からは対象に何ものも運び込まず、却つて対象を觀察し対象そのものの發展の行程を追及することを課題としてゐる。辯證法的方法はこの意味に於いて、現實的な科學的・客觀的方法である。辯證法的方法は、たんに対象の發展の行程を再生産するにすぎない。」

また更に次の言葉が注意される。

「辯證法は、研究者が対象そのものの運動をたんに「觀察」し且つかゝる客觀的運動をたんに再生産しなければならぬといふことを教へてゐる。」

デボリーンは彼の論文に於いて、辯證法に關して百頁以上に亘つて述べてゐるが、マルクスの唯物辯證法の最も重要な特徴——革命的實踐——については一言も述べてゐない。マルクス主義の方法をば、現實に生起するものをたんに再生産することだけに限るのは、マルクス主義の方法を贅造することを意味してゐる。それはマルクス、エンゲルス及びレーニンの辯證法的唯物論とは天地雲泥の差だ。マルクス、エンゲルスにとつて辯證法的唯物論とは、彼らが自然及び

社會の研究に於いて、彼らの實踐的活動に於いて、適用したあの普遍的な世界觀及び方法であつた。

メンシエヴィキー化しつゝある觀念論の上述の「官學主義」^{アカデミズム}やその觀察的・直觀的・受動性の御説法は決して偶然な現象ではない。理論の實踐からの分離、哲學の黨派性の否定、ヘーゲルの觀念辯證法とマルクス辯證法との並置、——はインテリ日和見主義の理論の新しい一形態として簇生せる修正主義的潮流の若干の特徴である。かゝる修正主義的潮流は主としてヘーゲル主義的性格のものであり、それは一般にヘーゲルをマルクス主義的に把へずに、哲學に於ける觀念論的な線を繼續してゐる。多くの點に於いて、それは、マルクス、エンゲルスが彼らの時代に抗争したあの青年ヘーゲル主義を復活せしめてゐるのである。正統マルクス主義の衣裳を纏へるメンシエヴィキー化しつゝある觀念論の根本的に全く觀念論的な性質、一切の誤謬を詳細に研究し分析することは、本論に於いては可能でない。それは特別の論文に於いて必ず爲されなければならぬ、併しこの潮流がヘーゲル辯證法を利用してゐるのは、現實的なマルクス主義及び唯物辯證法とは何らの共通するところもないといふことが注意されなければならぬ。

レーニン^{レニ}はマルクス及びエンゲルスと同じ仕方^{レニ}でヘーゲルに接近する。マルクス及びエンゲルスと同じく、レーニンはヘーゲルの辯證法を頗る高く評價し、ヘーゲル辯證法を「偉大なるもの」と呼び、「一步前進、二歩退却」全集、第六卷四三四頁）、且つそれを「最も包括的な最も内容豊富な最も深奥な發展の學說」と看做した（「カール・マルクス」、全集第八卷、十七頁）。レーニンは、ヘーゲルをば彼の辯證法の故に高く評價し乍らも彼は一再ならず注意してゐる。

「人はヘーゲルの論理學を、その儘の形態では適用し得ないし、それをその儘受け取ることは出来ない。人はそれを理念の神祕論から淨化した後で、論理的（認識論的）陰影をそれから撰り出さねばならぬ。それはたしかに一つの大事業だ」と（ヘーゲル「哲學史」に對する註釋）。

それは決して生やさしい課題ではなく、それを獨立的に遂行し得る人は僅かしかゐない。例へば、自らマルクス學徒を以て任ずるラッサール（實際には彼は決してマルクス主義者ではなかつた、依然としてヘーゲル學徒だつた）は、ヘーゲル觀念論を克服し、ヘーゲル辯證法を唯物辯證法に變ずることによつて改造する、と云ふ課題をこなし得なかつた。ヘラクリットに關するラッサールの勞作を評價する際に、レーニンは、マルクスがラッサールの該著作を「博學」と稱したのは正當だつた、と書いてゐる。

「ラッサールは單純にヘーゲルを蒸し返す。」とレーニンは書いた、「ヘーゲルを剽窃し、ヘラクリットから個々の文章を矢鱈に反芻し、彼の著作を信じられぬ位夥しい、博學な、あまりに博學な底荷で充滿させてゐる。」

レーニンはマルクスの方法を之に對置する。

「……マルクスには新しい點が多々ある、しかも彼の關心を惹くのは、ヘーゲル及びフォイエールバツハからの、觀念辯證法から唯物辯證法への、前進運動のみである。」

吾々は、ヘーゲル辯證法に對するレーニンの態度が、それに對するマルクスの態度とピッタリ符合するのを見る。レーニンは、ヘーゲルの翻譯に際し、ヘーゲルの方法から唯物辯證法を作り出すためには「理念の神祕論」から正しいものを引き出すことを理解せねばならぬ、ヘーゲルに就いて充分に研究してみなければならぬ、と注意してゐる。

ヘーゲル「論理學」への彼の註釋の一つで、レーニンは、ヘーゲルから次の命題を拔萃してゐる。

「論理學は純粹科學であり、それはその發展の全範圍に於ける純粹知識である。」

しかししてレーニンは之に註釋を加へてゐる。

「第一行は無意味、第二行は天才的」と。

「純粹科學」について叙べられてゐる處は觀念論的無意味である、だが「その全範圍における人間的思惟の發展」について敘べられてゐる處は、「世界の認識史の總計、總量、結論」たる論理學の本質の天才的な理解である。

ヘーゲルにあつては、理念の發展はすべての現存事物の根底に存する一定の全き獨立的過程としてあらはれてゐる。レーニンは（マルクスも亦同じく）それを顛倒して、人間的思惟の發展の思想を唯物論的に適用する、即ち、人間的思惟は社會的生産の、社會的諸關係の發展に基いてその基礎の上に發展して來たのである。レーニンは彼のノートの中の多く個處で、導來された諸範疇の歴史的發展についての、諸概念の歴史的形成についての、かゝる唯物論的思想に立ち歸つて論じてゐる。

「人間の實踐的活動は、何百萬回となく、人間の意識をして諸々の論理的形像を反復せしめなければならなかつた、それに依つて是らの形像は公理の意義を保持し得たのである。」

レーニンは、一般に彼が「ヘーゲルを唯物論的に讀む」べく努めてゐる、といふことを幾度となく注意してゐる。ヘーゲルは彼の方法のうちに、全てのものの（轉倒してはゐるが）間斷なき流轉と變化とを反映してゐる。ヘーゲルは、個々の諸問題に於いては、しばしば一般にその人間社會に關する見方に於いて觀念論的立場にへばり着いてゐる形而上學的唯物論よりも、近代唯物論に（特に社會の諸問題において）一層接近してゐた。そうした場合に辯證法的思惟の完全な優越、完全な力が明瞭に示された。ヘーゲルの觀念論的な根本的立場は完全に轉倒されなければならぬ。「ヘーゲルは頭で立つてゐる唯物論である（エンゲルスに依れば）」とレーニンは書いてゐる。「即ち、私は愛なる神、絶對者、純粹理念等々を大部分削除すると云ふのだ。」

レーニンはヘーゲルの極めて曖昧なる一命題を拔萃してゐる。

「力とは、全體と部分との矛盾がその中に溶解して了つたところの否定的統一であり、かの最初の關係の眞相である。」しかしして之に次のような註釋を加へてゐる。

「これは——「科學の文法」の著者ピアソンの類の素朴な哲學者をば、カン、カンにさせるところの——ヘーゲルに於けるこれに類した數多くの文章のうちの一つだ。ピアソンはこれに類した一つの個處を引用して、吾々の學校では何と云ふ馬鹿げた事を教へるのだ！と怒號する。そして一定の制限された意味においては彼は正しい。馬鹿げた事を教へるは無意味だ。人はだから先づ第一に唯物辯證法を教へ取り出さねばならぬ。十中の九迄は併しそれは殼であり屑である。」

人は天才的な思想をそこから見出し、「殼から取り出さ」ねばならぬ、併し反動的觀念論や神秘主義は放棄して差支えないのだ。ヘーゲルの淨化と云ふこの仕事をレーニンは彼のノートの中でもやつてゐる。即ち彼は、個々の思想を拔萃し、大分のノートを作り、ヘーゲルの著作にある天才的なものに注目する、だがそれと同時にまた全然不當な觀念論的體系を批判し、ヘーゲルの缺陷に注意し、それを分析し、彼の修正を附け加へ、ヘーゲルを一般に理解され得る言葉に翻譯し、觀念論的殘滓を拋棄し、ヘーゲルを顛倒して彼を唯物論的に説明してゐる。讀書してゆく裡にレーニンは、彼獨自の思想を詳細に下に書き、ヘーゲル辯證法の個々の側面、要素の輝かしい評價及び特徴付けを與へ、讀書と關聯のある其他の様々な註釋を加へてゐる。こんな風にしてレーニンは、ヘーゲルを唯物論的精神に於いていかに改造せねばならぬかの道を示した、そしてまた彼自身このやうな方面に多大の貢獻をなした。マルクスが嘗て爲さうと企てたところのものが、其處で可成りの程度になされてゐる。エンゲルス宛の一書簡の中で（一八五八年一月十四日附）マルクスはエンゲルスに書いてゐる。

「さうした勞作の爲めの時間が又ありさへしたら、私は、ヘーゲルが発見したが同時に神秘化して了つたところの方法における合理的なものを、二ボーゲンか三ボーゲンで、普通の人間の頭腦で解かるようにすることに、大きな悦びを持つてゐるのだが。」

斯うした勞作の執筆は、マルクスには許されなかつた。レーニンのノートは、二ボーゲンよりも遙かに多くを包括してゐる（無論體系的な形態に於いてではないけれども）。だがそれは云ふ迄もなく、理解し得るかたちで、辯證法の本質の説明を與へてゐるのだ。レーニンは、マルクス及びエンゲルスによつて着手された仕事を繼續し、より高度の段階に（勞働運動自身も亦、マルクス及びエンゲルスの時代に於いてよりも著しくより大きな成果を勝ち得たことと關聯して）導くに當つて、新なる歴史的時期の變化せる諸關係に於ける新材料を處理し、かくて唯物辯證法を更に前進せしめた。マルクスは資本の發展法則を研究した、彼はその發展の方向に注目した。レーニンは唯物辯證法の適用の下に、帝國主義を、資本主義の最終段階として、あらゆるその具體性においてその國家的構造およびその政治のあらゆる特殊性とともに、研究した、そして世界最初のソヴェート共和國の指導者として現れた。

一九一七年九月にレーニンは書いてゐる。

「帝國主義××は社會主義××の前夜である。そしてこの事は、戦争がその諸々の慘害を以てプロレタリアートの××を産み出すからばかりではなく、いかなる××も社會主義が經濟的に成熟してゐなければ、社會主義を創造しないだろう——また、國家的獨占資本主義は社會主義の最も完備した物質的豫備であり、入門であるからであり、この段階と所謂社會主義のそれとの間の歴史的階段には、何らの中間的段階も存しないからである。」¹⁾ 迫りつゝある破局とこれに對する闘争方法」全集、第二十一卷、一三五頁

一九一七年に書かれたこの言葉は、今日でも充分な意義を持つてゐる。事實はその通りになつてゐる。社會××××は成熟した、それは不可避である、そののみが帝國主義ブルジョアジーがプロレタリアートと勤勞者の大衆を追ひ込んだその袋小路からの活路を示し得る。社會××××は反駁し得ざる諸事實によつて基礎づけられた斷案であり、歴史的發展の全行程を通じて確證されたところのものである。ブルジョアの體制とブルジョアジー××の××××を信じ得るのは、救はれない阿呆とブルジョアジーの阿諛者ばかりだ。

レーニンは唯物辯證法を適用することによつて、プロレタリアートの階級闘争の××的戰術の本質を特質づけてゐる。革命的・實踐的活動のない唯物論が、一面的であり、半端であり、死んでゐるといふことを注意したあとで、レーニンは書いてゐる。

「プロレタリアートの戰術の主要課題を、マルクスは、彼の唯物辯證法的世界論のあらゆる諸前提と嚴密に一致せしめて規定してゐる。所與の社會のすべての階級の交互關係の全總計を客觀的に洩れなく顧慮してのみ、従つてまたその社會の發展の客觀的段階並びにその社會と他の社會體制との間の交互關係を顧慮してのみ、進歩的階級の戰術は正しい支持を與へられ得るのである。この際すべての階級、すべての國は靜止的ではなしに動的に、即ち不動の状態に於てではなしに運動に於いて（その諸法則は各階級の存立の經濟的諸條件から生ずる）觀察されるべきである。運動自身は過去の觀點からばかりでなく、未來の觀點からも、且つその際漸進的運動のみを見る「進化論者」の平板な理解に於いてはなしに辯證法的に、觀察されるべきである。「二十年の歲月をその裡に綜合してゐるような日が後に現はれ得るであらうが」、とマルクスはエンゲルスに宛てて書いてゐる、「かくの如き偉大な發展においては、二十年も一日に如かぬ。」

と。（書簡集、第三卷、一二七頁）、（全集、第十八卷、四〇頁参照）

プロレタリアートの指導者且つ理論家としてのレーニンの活動こそは、まさにこの方法の模範である。彼自身、事物の客觀的狀態をまさに上述せる如くに取扱ふことを理解してゐた、また彼がそれを爲したのは「純粹科學」のためではなくて實踐的闘争を念頭に置いてであつた。科學を彼はプロレタリア革命に役立たしめた、蓋し彼は唯物辯證法に最後まで忠實だつたのである。しかしてまたレーニンは、労働階級の闘争を指導することをまさに上述の如くに理解してゐたのだ。

『共産黨宣言』(一八四八年)『ルイ・ボナバルトのブリュメール十八日』(一八五二年)『フランスに於ける内亂』(一八七一年)『資本論』(一八六七年)『反デューリング論』(一八七八年)等々の如きマルクス、エンゲルスの諸著作のうち、吾々は唯物辯證法の模範を有してゐる。これらの著作は腐朽することはあり得ない、何故ならばそれらは資本主義社會の諸法則、その發展の諸方向、その裡に行はれる階級闘争、革命的プロレタリアートの政策及び戰術を、忠實に反映してゐるから。レーニンは、その科學的共産主義の創設者たちの全著作の研究から諸教義を引き出し、新なる歴史的情勢から生起したプロレタリアートの闘争の新たな諸問題を研究することによつて、彼の全著作のうちでまた彼の活動のうちで獨自にこれらの諸問題を解決し、偉大な歴史的闘争を指導したのであつた。その當時の日和見主義に對するマルクス及びエンゲルスの闘争の諸々の例を利用することによつて、レーニンは、共産主義のための闘争を新たな段階に於いて繼續し、辯證法的唯物論の天才的適用と一層の發展との模範を示した。

レーニンは、大衆について學ぶこと、彼らの諸經驗を考慮すること、大衆の内に生起するすべての諸過程を把握すること、そして革命について學ぶことを理解してゐた、しかしまた彼は諸事件の自動的進行に従屬しないこと、闘争をプロレタリアートの利益にとつて望ましい發展の道のために組織することを理解してゐたし、活潑に關與すること、決定

的瞬間に於いて××の諸力を是らの諸力が充分な規模と威力をもつて發展するように導くことを理解してゐた。

レーニンはプロレタリアートの政策を指導した、そして日和見主義に對して、またプロレタリアートに及ぼすブルジョア的影響に對して假借なく闘争した。メンシエヴィクのスハーノフの著書に關する註釋中でレーニンは、吃驚する程の簡潔さで革命の唯物辯證法的理解の核心を示した。即ち、客觀的情勢をそのあらゆる具體性において捉へること、紋切型に引きづられないこと、そして大衆闘争を活潑に指導すること。第二インターナショナルの一切の小ブルジョア共は——とレーニンは言つた——マルクス主義に於ける決定的なもの、マルクス主義の唯物辯證法を理解しなかつた。ロシアは社會主義のためには成熟してゐない、と彼等は主張した。レーニンは書いた。

『社會主義の實現のためには——と諸君は云ふ——文明性が必要だと。大いに結構。處でだが、何故に吾々は我國に於いては、初め大地主の驅逐、資本家の驅逐と云つたやうな文明性のかゝる諸前提を作り出し、そしてしかる後に初めて社會主義への運動を始めることが出来なかつたのか？ 歴史的秩序の形態に於けるかかる變革が許され難く不可能である、と云ふことを諸君はどんな小冊子で讀んだのか？』

ナポレオンが "On s'engage e puis on voit" (「やつてから……わかる」と書いたことが想ひ起される。意譯するとそれは斯う云ふことだ、先づ熱心に闘争をやつて見て始めてどうなるかど判るのだ、と。で吾々もまた一九一七年十月には先づ熱心に闘争をやつた、そこで吾々はブレスト平和條約とか新經濟政策等々のやうな發展の最初の細目(世界史の觀點から見れば疑ひもなく細目である)を知つた。で、吾々が大體に於いて勝利したといふことには今日では最早何らの疑ひも存しないのだ。

我がスハーノフには——彼から遙かに右翼に立つてゐる社會民主主義については全然語らない——革命は全くあゝや

る以外にはない、と云ふことは夢にも想ひ付かぬのだ。我がヨーロッパの舊弊者共には、測られぬ程人口稠密な、社会的諸關係が極度に多様な、東洋諸國に於ける今後の諸革命が、ロシア革命以上の特異さを示すであらうと云ふことは、夢にも想ひ付かないのだ。『吾々の革命について。エヌ・スハートフの手記の概観から』、全集第二十七卷）

これは、レーニンの諸著作に見出されるところの唯物辯證法適用の多くの模範からの一例である。

一一

レーニンは今日、プロレタリアートの天才的指導者として、プロレタリアートの闘争の指導者として、プロレタリアートがそれによつて××に反抗した××××の組織者、指導者として全世界に知られてゐる。レーニンが世界最初のソヴェート國家の組織者であり指導者であつたといふこと、全世界の帝國主義ブルジョアジーによつて支持されてゐたところの反革命と妨害とに對する市民戦争におけるソヴェート國家の擁護と勝利との組織者であり指導者であつたといふことは、誰でも知つてゐる。理論家としてのレーニンの勞作はそれ程知られてゐない、だがレーニンの勞作はマルクス主義的科學及び理論的思惟一般の發展の歴史にとつて、またプロレタリアートの實踐的闘争にとつてその意義は少なからず重大である。そのノートや註のすべては、レーニンの理論的勞作——彼の實踐的××的活動と緊密な仕方で結合してゐたところの——の模範を示してゐる。實踐的活動と理論的勞作の間には、不可分の内的聯關が存する。近代プロレタリアートの實踐的闘争の指導者は同時にまたその理論的指導者でもなければならぬのである。

近代プロレタリアートの理論的指導者としての彼の役割を完全に評價するためには、彼がマルクス主義學說に、その全領域に亘つて寄與したところの新しいものをば完全な、正當な仕方で評價すべきだ——即ちこれは現時代の任務である。茲では、レーニンの理論的新業績を單に素描的にでも敘述しようとする試みさへも爲し得ない。しかし更に、レーニンが哲學において爲したところを一論文で満足に説明するのは不可能でもある。それ故、吾々はこゝでは若干の問題にのみ限らうと思ふ。

帝國主義戦争の勃發當時、一九一四年の秋及び冬に、レーニンは唯物辯證法の研究に再び着手したが、その時彼はこの問題に關して一勞作を書く意向を明らかに持つてゐた。この目的の爲に彼は、最も豊富な個々の領域に亘つて（特に「辯證法に關するヘーゲル」の問題のために）直接に汲み盡される底の、材料を蒐集した。總じて常にレーニンは唯物辯證法自體の方法の研究の偉大な意義を強調した。一九一三年後の彼の諸論文に於ては、彼は辯證法の本質に關する究明、一般化される特性の注意に更に一層多くのページをさへつけてゐる。例へば「第二インターナショナルの崩壞」（一九一五年）なる論文に於いて、レーニンは、辯證法と詭辯論との間の差異を示した。「民族自決に關する論争の諸成果」（一九一六年）、「ユニウス・プロシユールについて」（一九一六年）、「戰術に關する書簡」（一九一七年）及び其他の一系列の論文に於いては、辯證法的思惟の種々なモメントが注意されてゐる。一九二一年にレーニンは、「再び勞働組合について、政治情勢とトロツキイ及びブハーリンの誤謬」なる論文において折衷主義と區別して辯證法的論理の本質の、周知の通俗的解明をなした。これらの論文及びその時期の他の多くの諸註釋の系列は、極めて特色がある。それらは、一般的には唯物辯證法のレーニンによる優れた驅使を示してゐると共に、また特殊的には彼がヘーゲルの著作を讀んだ一九一四年——一五年當時に彼が辯證法を如何に研究したかといふことをも示してゐる。

レーニンの註釋は、極めて尠大な諸問題を包括してゐる。今この論文に於いては、これらの諸問題のすべてに簡單にでも觸れることは出来ない。吾々はこゝでは、レーニンが徹底的に分析し、發展せしめ、究明したところの、辯證法のへ

ヘーゲルは、彼の「論理學」第二部、第一章「絕對的理念」に於いて、辯證法を解かり易く次の如くに規定した。即ち

「判斷のこの分析的にして同時に総合的なモメントは、それによつて、『そのモメントによつて』、『端初的一般者』(一般概念)が『自らを自己の他者として規定するところのものであつて、辯證法的と名付けらるべきである。』

レーニンはこの規定を「明確さを缺いた」規定として評價し、そのうちの先づ三つの點を注意した。即ち、第一には、概念がそれ自身から規定されてゐること、(唯物論的には之は逆である、レーニンは括弧の中で、「事物自體はその諸關係に於いて又その發展に於いて」觀察される可きだと書いてゐる)。第二には、事物自體に於ける矛盾の充満。しかして第三には、分析と綜合の統一の必然性、區別し、分離し、分析するのみではなく、(そのことは必要だが、然し充分ではない)、また全體の關聯に注目し全體性を見失はざることの必然性、を注意したのである。

次にレーニンは、辯證法の上に引用した諸モメントの各々の更に立入つた觀察と發展とを行つてゐる。

第一の點の發展に於いては、レーニンは特に次の三要素に注目する。即ち、(a)、觀察の客觀性、(例證ではなく、逸脱ではなく、事物それ自體)(b)、かゝる事物の他の諸事物に對する極めて多様なすべての諸關係の總體。及び、(c)、かゝる事物の發展、その固有の運動、その固有の生命。

事物の客觀的觀察の要求を、レーニンはヘーゲルの世界觀に於ける特に價值多きものとして特筆してゐる。ヘーゲル

の客觀的觀念論は、その限りに於いては、主觀主義及び懷疑論によつてその世界觀が貫かれてゐたカントの觀念論よりは、唯物論的觀點に一層接近してゐた。觀念論者ヘーゲルはカントの主觀主義を批判した、そしてこの批判においては唯物論が勝利した。「眞の存在者」として、ヘーゲルは「主觀の状態とは獨立に存立する現實」を看た。彼はカントの世界の「物自體」の不可認識性の學說を批判する。

エンゲルスは、後に、ヘーゲルがカントに對するその闘争、不可知論に對するその闘争に於いて語つた言を利用した(例へば「空想的社會主義の科學的社會主義への發展」の英語版へのエンゲルスの序文を見よ)。一般に吾々は、かゝる對象に關する一連のヘーゲルの思想を、より發展せる形態に於いて、また唯物論的解釋に於いて、マルクスに、エンゲルスに、そしてレーニンに見出すのである。

例へばヘーゲルは言つた。

「従つて意志は、意志が認識から分離すること及び外的現實が意志に對して眞の存在者の形態を保持せざることによつてのみ、意志の目的の達成に自ら障礙となる。」(ヘーゲル「論理學」哲學文庫版第二卷、四八一頁)。

レーニンはこれに註釋を加へる。

「目的(人間の活動)の非遂行は、實在が現存せざるものとして(否定的に)考えられること、その(實在の)客觀的現實性が承認せられないことのうちその根據を有してゐる。」と。

マルクス主義は、客觀的現實の嚴密なる考慮をすべての觀察及びすべての活動の基本とせねばならぬと云ふ立場に完全に立つてゐる。例へば、五十年代における「左翼」シャツペル及びウイリツヒとマルクスとの對立、一九〇八年——九年の反動期に於ける召還派及び最後通譯派とレーニンとの對立、一九一八年其他に於ける「左翼共產主義者」とレ

ニンとの對立を見よ。

事物そのものを觀察することの必然性の指示は、まさに所與の事物に固有なその特性および特殊な合則性を特に研究することの必然性の承認を含んでゐる。併し乍ら、客觀的に存立する現實のかゝる承認は、マルクス主義者にとつては、この現存する現實の下に於ける人間の受動的な隷屬を何ら意味しない——××的實踐は客觀的世界の不可分な一主要構成部分であるからだ。この點については既に上述した、そしてこの問題に於いては、マルクス主義は、ヘーゲルに存してゐるあの思想を唯物論的精神に於いて發展せしめてゐる。このことによつてマルクス主義は、既に上に示したブルジョア的な日和見的な客觀主義の様々な諸形態と根本的に相違する。

同様に吾々によつて分析されたかゝる諸要素に次いで、レーニンに於いては、「所與の事物の他の諸事物とのすべての多様な諸關係の總體」の研究の必然性が説かれてゐる。

事物のすべての側面、爾餘の全世界とのすべての關聯の把握といふこの最も重要な要素をレーニンは、一九二一年の勞働組合論争に於ける辯證法の通俗的解明に於いて劈頭に押し出してゐる。

「現象を現實的に識るためには、すべてのその側面、すべての關聯及び「媒介」が把握され究明されなければならない。吾々がそこに完全に到達するといふことは決してないであらう、だが全面性は吾々を誤謬及び硬化から護つてくれるだらう」(全集第二十六卷、論文「再び勞働組合について」)。

かゝる對象に關するヘーゲルからの拔萃は數多く引用されることが出来る。だから、例へばレーニンは、完全な眞理としての理念について敘べられてゐる「エンチクロペデー」(二一三節)の一個處を取つて、彼はこれに次のやうな説明を與へてゐる。

「個別的存在(對象、現象、等々)は理念の(眞理の)一側面である(に過ぎぬ)。眞理にとつては、また獨立的且つ個別的なもの(特に對自的に存立する)としてしか現象せぬところの現實の他の諸側面が猶ほ必要だ。これらの側面の總體性に於いて(これらのものの總合に於いて)のみ且つそれらのものの關聯に於いてのみ、眞理は自己を實現する。」

眞理は、その全き完全性に於ける現實的事物のすべての側面・すべての關聯の反映の裡に存する。

之と共にレーニンは「事物の(現象の)……發展、その固有の運動、その固有の生命」に注意を喚起する。茲で運動、事物の運動性が注意されると同時に、概念なるものは事物の運動を反映せんとするものであるが故に固定化したものではないといふことの必然性が注意される。

ヘーゲルはすべての概念における運動性を示してゐる、レーニンはそれに特に注目する。

辯證法は何處に存するか? とレーニンは問ふ(概念の辯證法について語つてゐるのである)、そして彼は答へる。

「諸概念の相互的依存性、例外なくすべての概念の相互的依存性、ある概念の他の概念への移行、例外なくすべての概念の移行。注意せよ。各概念はすべて爾餘の概念と一定の關係に、一定の關聯においてある。諸概念間の對立性の相對性……諸概念間の對立の同一性。」

吾々は、こゝに、ヘーゲルの「論理學」に於ける概念の運動(固有の運動)の諸例證の一つを有する。ヘーゲルが、存立の範疇と有限者の辯證法とを分析してゐるところの「論理學」の第一部の章から、レーニンは拔萃してゐる。

「それによつて自己を超えて外へ示され且つ外へ驅り立てられるところの自己自身の矛盾として措定された自己の内在的限界を有するところの或者が有限者である。」

この文章を彼は次のやうに説明する。

「事物について、それが有限であるといふ時には、それによつてその非有がその本性であるといふことを告白してゐるのである（非有は……その有を構成する）」。

そして彼は更らにヘーゲルから一つの引用をする。

「それら（諸事物）は『存在する、然しこれらの存在の眞理はその終結である。』」

この引用文は彼に次のやうな輝かしい辯證法の特徴づけをなす機縁を與へた。

「絢爛且つ慧敏！ 普通には死んで現はれる概念をヘーゲルは分析する、そして彼はそのなかに運動がある、ことを示す。有限？

それは終局へ向つて運動することを意味する！ 或者？——それは他者であるところのもの、に非ざるものを意味する。有一般？——それは非規定性の如き非規定性を意味する。對立の同一性にまで達するところの概念の全面的な、普遍的な彈性、——そこに核心が存する。この彈性は、主觀的に適用せられると、折衷主義および詭辯論である。この彈性が客觀的に適用されると、即ち、それが物質的過程の全面性及びその統一を反映すると、その時にはそれは辯證法であり、それは世界の永遠的發展の正しい反映である。」

概念の運動性、彈力性——これは辯證法的方法の特に價値多き特徴である。併し乍らこの彈力性は客觀的に適用されなければならぬ、言ひ換へれば、探求せられる客觀の運動に適應すべきである。主觀的辯證法と客觀的辯證法との間の差別に吾々はまた立ら歸らう。

吾々は今やレーニンによつて注意された諸要素の第二のグループに移り行かう、即ち、ここでは事物自體の矛盾の充満が、辯證法が問題なのである。こゝに辯證法の核心が存する。

「有限者を無限者に變ずるものは外力ではなくて、寧ろそれ（有限者）の本性である。」

レーニンはこれを唯物論的に説明して、こゝに事物自體の、自然自體の、事象自體の行程の、辯證法が語られてゐることを注意する。

レーニンはこゝでは三つのモメント、即ち、(a)、事物の内部的に矛盾せる諸傾向（及び諸側面）、(b)、諸對立の總和及び諸對立の統一としての事物（現象等々）、(c)、これら諸矛盾の鬭争乃至展開、諸努力の矛盾の充満、を強調してゐる。矛盾に關してヘーゲルは言ふ。

「科學的進歩を獲得するためのたゞ一つのことは……否定的なものが同じくまた肯定的でもあると云ふ論理的命題、

——または自己矛盾者は零に、抽象的無に歸するのではなくて、むしろ本質的にはその特殊な内容の否定にのみ歸するといふこと、乃至斯の如き否定は一切の否定ではなく、自己を解消する一定の事物の否定であり、従つて一定の否定であるといふこと、従つて結果のうちにはそこからそれが結果したところのものが含まれてゐるといふことの論理的命題を認識することである。」（ヘーゲル「論理學」第一卷、哲學叢書出版、三五頁——三六頁を見よ）

斯くの如き見解は、物質及び運動——同時に永久的にその形態を變ずるところの——の不滅性を説く唯物論的學說と何等矛盾するものではなくて、却つて反對に此の學說と完全に一致してゐる。

發展の動力として内的矛盾を承認することは、神に關するあらゆる種類の觀念に對して致命的であり、且つまた唯物論と一致する。世界の運動及び發展にとつては、如何なる創造者も必要ではない、蓋し世界のこの運動と發展との原因はそれ自身の中に存してゐるものであるから。

普通の人間悟性、形式論理學は、矛盾を同一性ほどに本質的に觀察しない傾きがあつた。併しヘーゲルは、矛盾を同

一性よりも、ヨリ深いもの且つヨリ本質的なものとして観察すべきであるといふことを述べてゐる。
 「何となれば同一性はそれ（矛盾）に對しては、單純なる直接者の、死せる有の、規定であるにすぎない、然るに矛盾は一切の運動及び生命性の根源であり、ある者が自己自身の裡に一つの矛盾を持つ限りに於いてのみ、それは自ら運動し衝動と活動を持つのであるから。」

ヘーゲルが同様な思想を發展せしめて「否定性」は「概念の運動の轉向點」を構成すると言ひ、この「否定性」は「自己に對する否定的關係の單一點、すべての活動の生ける精神的自己運動の最も内的な源泉、すべての眞なるものを自己自身のうち有せる辯證法的魂である等々といつてゐる『論理學』中の他の個處を拔萃するに當つて、——レーニンはこの個處に「辯證法の精髓」を認めてゐる。

「ヘーゲルはこゝで「精神的」自己運動についてのみ語つてゐるが、然し現實に於いては人は物質的世界の自己運動に當然注目しなければならぬ。」

ヘーゲルに於ける一聯の文章には、矛盾や否定の最も本質的な意義に關する思想が繰返されてゐる。レーニンは注意してゐる。

「辯證法一般は第一の定立の否定の中に、第二の定立に依るその解消の中に（第一から第二への移行、第一と第二との間の聯關の表示のうちに）存する。第二の定立は第一の定立の實辭とせられ得る。」——
 としてそこでヘーゲルから引用する。

「——例へば、有限者は無限者であり、一者は多者であり、個別者は一般者である。」

これに對してレーニンは次のやうな説明を加へる。

「單純な原始的な「第一の」肯定的な主張、定立等々に關しては科學的觀察、差別の指示、聯關、移行等の「辯證法的要素」が必要である。これなくしては單純な肯定的主張は不完全であり、生命なきものであり、死せるものである。「第二の」、否定的定立に關しては、「辯證法的要素」は「統一性」の指示を望む。それは即ち、否定者と肯定者との聯關の指示であり、この肯定者の否定者に於ける發見である。肯定から否定へ——否定から諸主張との「統一」へ——これなくしては辯證法は赤裸々な否定に、遊戲に、懷疑に、なつて了ふ。」

吾々はこゝに再び辯證法と詭辯論の——かゝる對時に直面する。吾々はこの問題に暫らくとどまらなければならない、蓋しそれは眞正の辯證法の本質を説明する助けとなるから。

レーニンの特性付けによれば、ヘーゲルはその「哲學史」に於いて、(一)、ソフィスト、(二)、ツェノン、(三)、ヘラクリットの間極めて鮮やかな差別をなした。

(一)、主觀的辯證法はヘーゲルによれば「外的辯證法であり、氣まぐれな憶斷であつて、事物自體の魂を解明するものでない」——即ち、それはソフィストの辯證法であり、現實的な辯證法ではなくしてむしろ詭辯論である。

(二)、ツェノンの辯證法をヘーゲルは、「對象の内在的辯證法、だが主觀の觀察に墮せるもの」と特徴づけてゐる。レーニンはこれを、「對象の中には辯證法がある、併し私はそれを知らない、恐らくそれは現象にしかすぎないだらう。」と説明してゐる。これがツェノンの（またカントに於ける）辯證法である。こゝには主觀的判斷から獨立した客觀的辯證法が承認せられてゐる、併しそれは不十分な承認だ。

(三)、そして最後にヘーゲルは特に……「辯證法そのものを原理として把握すること」を強調する。レーニンは「一切の存在者の原理としての完全な客觀的辯證法」と説明してゐる。これがヘラクリット（およびヘーゲル）の辯證法で

ある。辯證法に於ける懷疑論の役割が論じられてゐる「論理學」の該當個處の翻譯に際して、レーニンは、辯證法はそれ自身のうちに否定の要素を包含すること、そしてその場合その最も重要な要素として包含すること、併し乍ら、辯證法に於いては本質的に且つ特質的に赤裸々の否定、「單なる」否定、懷疑的否定、動搖、狐疑が在るのではなくて、却つて、

「聯關の要素としての、發展の要素としての、肯定者を保存してゐる否定、即ち一切の動搖を伴はず、あらゆる折衷主義を伴はぬ否定」

があるのであるといふ註釋を加へてゐる。

斯くして辯證法の最も本質的な要素は否定だ、だが然しこの否定は恣意的な主觀的なものであつてはならず、また概念に於ける否定に制限されたものではなく、むしろ事物自體の本質から生ずるものであるべきだ。これが、すべての事物に、客觀的物質的全世界に固有な、そしてマルクス主義によつて認められてゐるところの客觀的辯證法である。かくの如き否定は否定されるべき事物を單に否定するばかりではなくて、之を一定の（合法的な）仕方でも改造し、その際にそれを變化した形態に於いて保持するのである。この辯證法的否定のためには單にその終局的結果が重要であるばかりではなく、かゝる結果にまで導くところの方法も亦重要である。かゝる結果が相排撃する諸對立を自己の中に統一してゐることが重要なのである。そしてかゝる否定性は、ヘーゲルが表現してゐるやうに「絶對的」である、即ちそれは中斷なしに進展する過程を表現すべきである。

今や吾々は、レーニン（及びヘーゲル）に特別の注意を喚び起させたところのこの要素に來た、そしてこの要素の強調は辯證法の本質を特に剴切に表現してゐるレーニンの（そしてマルクス主義の）辯證法の特質である。

ヘーゲルの「哲學史」の第一巻のうちで、運動の不可能に關するエレア學派の證明の分析の際に、運動及び一般にあらゆる任意な現象を思惟の助けを藉りて表現することの困難さは、思惟は現實に結合してゐるところの對象（および現象）の諸側面を區分して觀察せねばならぬといふ處に存することが注意されてゐる。之にレーニンは書いてゐる。

「持續的なものを中斷することなしに、單純化することなしに、粗大化することなしに、生けるものを分割することなしに、殺すことなしには、吾々は運動を表象することは出來ぬ。吾々は運動を表現し、測定し、描寫することは出來ぬ。思惟による運動の描寫は常に粗大化であり、殺すことである、而も單に思惟による描寫のみではなく、また知覺による描寫もそのやうであり、且つ單に運動の描寫のみならず、あらゆる概念の描寫もそのやうである。そしてその點に辯證法の本質が存する。かゝる本質は、また、對立の統一、同一性といふ定式によつて表現されてゐる。」

レーニンはこの要素を特に強調して、この「對立の同一性」なる定式は、彼の言葉によれば「辯證法の核心」を適切に捉へてゐるが故に、最も重要なものの一つとして數へてゐる。

またヘーゲルは正に同様の理由によつてこの定式を利用してゐる。レーニンの功績は、彼がマルクス主義者中の最初の人としてこの要素に適當な注意を向け且つ適當な地位を示した點に、存する。

ラッサールの「ヘラクリット」翻譯に際して、レーニンは、抽象的な概念（及びその體系）の中においては運動の原理は對立の同一性として以外には表現され得ない、と云ふヘーゲルのあの思想をラッサールが讀者の腦裡に刻み込むのに特に注意したといふ點に、注意を向けてゐる。レーニンは之に次の如く註釋してゐる。

「運動及び生成は、一般的に云つて、また反復なしにも、出發點への復歸なしにもあり得るが、だが斯くの如き運動は「對立の同一性」ではないだらう。然しまた、天文學的運動や機械的（地球上の）運動や動植物及び人間の生活——す

べてこれらのものは人類に運動の理念のみならず、また特に出發點への復歸を伴ふ運動の、即ち辯證法的運動の理念を
 腦裡に刻み込まましたのだつた。」

對立の闘争及び展開なる周知の要素に對しては、この要素が一切の現實、全自然、一切の生物の最も一般的な法則の
 一つであることを注意しなければならぬ。物質の運動は物質に固有な矛盾の結果である。有機體と環境世界との間の對
 立、有機體の外界への適應、生存のための有機體の闘争、——これらは有機的生命の全發展の根底に横はつてゐる。そ
 の成立から現代に至るまでの歴史に於ける相互に對立する階級の闘争は社會的發展の主要現象である。このことはすべ
 て十分に熟知されてゐる、だからこれを今日特に證明せんとすることは殆んど不必要である。レーニンはそのノートの
 中で、ヘーゲルが一八一二年(論理學)の發行)に於いて全世界の普遍的運動と變化とを敍べてゐたことを注意してゐ
 る。社會的發展の辯證法はマルクスによつて一八四七年に告示された(哲學の貧困)の現れた年。同じ年にはマルクス
 及びエンゲルスは『共產黨宣言』を書いた。有機的世界の發展の辯證法はダーウインによつて一八五九年に告示され
 た(この年にはダーウインの著作『種の起源』が現はれた)。自然の辯證法の問題に就いては、吾々は、エンゲルスが五十
 年代の終りに著作し始めて、七十年代及び八十年代において彼が之に熱心に没頭したことを、附言しよう。レーニンは
 一九〇八年、彼の著書『唯物論と經驗批判論』に於いて、この問題に彼の注意を向けた。今日、自然過程の辯證法に關
 する認識は益々普及しつゝあるし、自然科学の専門家に於ける辯證法の無知は、彼らの科學的研究の一層の發展に益々
 重大な妨害となりつゝある。

遂に吾々は、ヘーゲルの上述の概念規定中の第三番目(既に擧げた細目の分を算入すれば第七番目の要素となる)——
 分析と綜合の合一——『個々の部分の研究と總體、これらの部分の總括』に到達する。レーニンは、ヘーゲルにあつて
 つねに繰返されてゐる、完全な把握、一般化、だがあらゆる個別性、あらゆる特殊性をもまた反映してゐるところの一
 般化、の必然性に關する論及を、屢々注意してゐる。單に抽象的な一般ではなくして、むしろ特殊の富を自己の裡に捉
 へてゐる一般」と、ヘーゲルにあつては、彼の『論理學』への序文のうちに敍べられてゐる。レーニンはこの文章を引用
 して、マルクスはまさにこれを『資本論』の中で遵守してゐると、述べてゐる。またさらに、レーニンは、『抽象的な、
 死せる、非運動的な、ではなく、むしろ具體的な』と云ふヘーゲルの表現につけ加へて、そこに辯證法の本質と核心と
 が存するといふことを述べてゐる。

一九二一年の労働組合論争に於ける、辯證法の本質の彼の通俗的説明に於いて、レーニンは、辯證法的論理は具體的
 眞理を要求するといふことを最後に指示した。

それ故、レーニンに依ればまた『矛盾』のなかに辯證法の本質があり、『對立の同一性と闘争』のなかにその核心があ
 り、『具體性』のなかに辯證法の本質と本質とがある。

マルクスは彼の『經濟學批判』への序説のうちに於いて、具體的なものは、それが諸規定の多様性を包含し、『雜多の統
 一』として現はれるが故に、具體的なものとして現はれる、といふことを説明した。人間はますます深まりゆく認識の
 結果のうちのみ、またますます複雑となり洗煉されてゆく理解の仕上げと發展との結果のうちのみ、客觀的世界の
 全複雑性を近似的にはあるが反映するような概念を見出し得るが故に、ヘーゲルは、實在の本質はかゝる思惟の結果
 として現はれると云ふ錯覺に墮ちたのであつた。マルクスは、ヘーゲルのこの神秘的な觀念を顛倒して、具體的諸概念
 の仕上げ、抽象的なものから具體的なものへの上向の方法は、『具體的なものを獲得するための、それを具體的なものと
 して精神的に再生産するための、思惟にとつての手段たるにすぎぬ。それは何ら具體的なもの自體の成立過程ではな

具體的なものは全自然であり、吾々を圍繞する全客觀的現實である。それは自らのうちにすべての矛盾を統一してゐる。それは吾々の意識とは獨立に、吾々の外部に、存在する。吾々の認識は、辯證法的な彈力的な具體的な諸概念の助けをかりて、かゝる具體的現實のます／＼完全な、ます／＼深められた複製の方向に自ら動いてゆく。

「斯くて認識は内容から内容へと進んで行く」とヘーゲルは言ふ、そして、レーニンの意見によれば、辯證法とは何ぞやといふことの答が其處に示されてゐるのである。

「最初この前進は、單純な規定性から始まつて次いで、ますます、より豊富なり、具體的なものになるやうに自己を規定する。何となれば、結果はその端初を包含し、且つその経過は端初を新たな規定性を以つて豊富にするから。一般者は基礎を構成する。故に進展は一つの他者から一つの他者への流動として考へらるべきではない。絶對的方法に於いては概念はその他在に於いて、自己を保持し、一般者はその特殊化に於いて、判斷及び相對性に於いて、自己を保持する。それは後來の規定の各々の段階にそのまへの内容の全量を高め、その辯證法的進展によつてはたゞに何者をも失はぬのみならず、又何者をもその後放棄せぬのみならず、却つて獲得せるものをすべて自己と共に擔ひ自己のうちに自らを豊富にし、且つ稠密ならしめる」ヘーゲルの「論理學」からのレーニンによる引用。

それに續く九つの項目に於いて、レーニンは、客觀的世界の發展の辯證法的過程の思想及びこの過程の認識の思想を發展させ深化させる。こゝには質の關聯及び移行の諸モメント、他の形態への運動の諸モメント、新たな諸側面の發見、自然及び社會的生活に於ける諸現象の人間による認識の無限の深化が注意されてゐる。そして低度の段階の一定の特徴、特質等々の、高度の段階に於ける反復（螺旋狀の運動）、過程の複雑性、古い者への外觀的復歸（否定の否定）の

ごとき運動の進行に於ける諸現象もまた注意されてゐる。

こゝでは就中レーニンによつて強調された移行の概念が注意されねばならぬ。レーニンは書いてゐる。

「たゞ對立の統一のみならず、各々の規定、各々の質、各々の特徴、各々の側面、各々の性質の各々の他のものへ（その對立へか？）の移行もまた」と。

そして更らにその後で彼は、内容の形式との、及びその逆の、闘争形式の放棄、内容の變化、量から質への、及び逆の移行のごとき諸現象——これら一切のものは、移行の上述せるモメントのたんなる例にすぎないといふことを注目してゐる。

一つの範疇から他の範疇への移行と云ふかゝるモメントは、運動及び聯關の過程を反映し、また、辯證法の非常に主要な且つ本質的な要素として現はれてゐる。それは諸現象の交替、一現象から他の現象への移行——その際この移行に當つて何一つ消滅しはしない——を反映する。

レーニンが、正に移行の本質を捉へることを、何から何へ運動が行はれるかを理解することを、如何に巨匠的に理解してゐるか認められるのは此の場合である。このための模範は手當り次第に引用することが出来る。吾々はこゝには帝國主義××の××への世界史的意義を有する移行を指示して置く。これは、レーニンによつて天才的に指示され、その全意義に於いて、その特性及び一般性に於いて理解されたばかりでなく、レーニンの最も緊密な参加の下に、遂行されたところの移行だ。

その移行には、世界戦争により促進せしめられたブルジョア革命の社會主義革命への移行（成長）が根底に存する。そして、吾々がその目撃者であり参加者であり、且つ吾々にレーニンがその理解を教へてゐるところの、この巨大な過程には、より單純な、謂はゞ第二次的な從屬的な程度の無數の移行が結合してゐるのである。

こゝに論及した対象はスバラシイ、しかしして一個の論文においてはこれを一般的な諸特徴に於いてなりとも説明することは不可能である。吾々はこゝでは、レーニンの全著作、彼の全言説、論文、演説が、戦争勃發以後、また一九一七年の革命以後特に豊富に、全體として帝國主義とプロレタリア革命の時期に於ける階級闘争の全面的分析を與へてゐること、社會主義××即ち資本家的社會と搾取制度とから××無き×××社會への移行を遂行するところのプロレタリアートの階級闘争の指導と結びついてゐる一切のより重要な諸問題の全面的解明を與へてゐること、を指摘するにとどめておく。レーニンは革命の發展に於ける諸段階の分析に、また「過渡期中の諸過渡期」の分析に、一再ならず立ち入つた。例へば、内亂の勝利的終結の後、内亂の經濟政策から所謂「新經濟政策」への移行に際して、吾々が「農村の甚だしい衰微とプロレタリアートの諸力の疲勞」の諸關係の下に、「殆んど超人的な努力を以て」「最も至難事」に着手し始めた時、換言すれば、「現實的な社會主義經濟の基礎を、工業と農業とに於ける正しい商品交換（より明確には、生産物交換）を」、建設せんとし始めた時、然うであつた。「新時代、新しき衣裳を纏へる古き誤謬」、一九二一年八月執筆、全集、第二十四巻を見よ。この時期に於けるレーニンの著作を研究するに當つては、人は、過渡期の本質を捉へる彼の技術、客觀的情勢に受動的に隷屬するためではなく、現存する諸力を××の進展と深化とのために、プロレタリアートの仕事の勝利のために利用せんがため客觀的情勢を顧慮する彼の技術を學ばねばならぬ。

文學に關聯する諸現象を考察するために（そのうちには同様な一般的移行が反映してゐる）、吾々は、レーニンがアレキサンダー・ヘルツェンをブルジョア民主主義から共產主義への移行を遂行した革命家として理解してゐたといふことをこゝに指示しよう。（「アレキサンダー・ヘルツェンの追憶」、全集、第十五巻を見よ。こゝではまた（こゝには他の移行が敘べられてゐるのであるが）、レーニンによるトルストイの作品の天才的な評價と解明が注意されなければならぬ、しかも

彼はトルストイを、吾々に於ける農民が家長制的状態から資本主義への移行の時期に於いておかれてゐた矛盾に満てる諸關係を反映してゐる作家と見なしてゐる。（「ロシア革命の鏡としてのトルストイ」、全集、第十二巻）。

さらにレーニンは、十、十一、十二の項目點に於いて、新たな諸側面、諸關係の發見の無限の過程について、諸事物、諸現象、諸過程等々の人間による認識の深化の無限の過程について敘べてゐる。諸現象から本質へ、及びより浅い本質から一層深い本質へ、共在から因果性へ、そして聯關の一形式から他のより深い、より一般的な形式へ。

認識の深化の過程に於いては、認識の客觀性の承認と共にその相對性も亦考慮せられなければならないといふことがこゝで注意されなければならない。吾々はかくして認識の辯證法の問題に到達するのである。従つてレーニンは、客觀的世界を反映する人間的思惟は人間の社會的生產性の基礎の上に發展する、と見なすところの辯證法的唯物論の認識論の鞏固な地盤の上に立つてゐるのである。人間的悟性は諸事物や諸現象の聯關、客觀的世界と人間の行爲との合法則性を反映する。悟性は感官によつて傳達されるところの物質的なものを、改造し、結合し、一般化する。感官は、人間と自然との間の交互關係の過程のうちに發生する外界の諸印象を受けとるものである。人間の感官は人間的思惟と周囲の自然との間に存する聯關を形成する。感官は客觀的世界を一般に正しく再現する。このことの一つの證明は人間自身の生存である。然し、認識過程そのものは、眞理からの歪曲、誤謬、違背の可能性を包含してゐる。だがこのことから決して吾々の認識は何の役にも立たぬ、事物の本質を認識することは吾々には許されない、と云ふ懷疑論の結論は出て來ない。辯證法的唯物論が一般概念を批判し之に具體的概念を對立せしめる時、辯證法的唯物論は一般概念が具體的概念への一段階であるといふことを全く充分に理解してゐるのである。

認識の辯證法に關する價值多き一系列の註釋を、レーニンはヘーゲルの「哲學史」、アリストテレスの「形而上學」等の

翻譯に際してなしてゐる。例へば、アリストテレスに對する註釋に於いて、レーニンは、認識の過程は、

「……空想が生活から飛び離れる可能性を自らの裡に含んでゐるところの、否そればかりでなく、抽象的概念の、理念の、空想への（結局においては神への）轉化（この轉化は認識されざる、人間にとつて未知の轉化だ）の可能性を自らの裡に含んでゐるところの、複雑な、分裂した、デグザグに運動する活動」である」と敍べてゐる。

併しレーニンは、この可能性を認めながら、同時に認識過程に於ける空想の役割を認めなければならぬ、と言つてゐる。

「……最も單純な一般化、最も基本的な一般的理念（椅子）一般のごとき）のうちに一片の空想が介在する（逆に、空想の役割を除去するのは、最も嚴密な科學に於いても馬鹿げてゐる（勞働への拍車としての有益な夢と無益な夢に關するヴィサレフの所説を参照）。」

辯證法は懷疑論に反對すると等しく獨斷論にも反對する。辯證法は認識の、範疇の、客觀的意義を承認する一方、またそれらのもの、現實への條件的な且つ相對的な接点を認める。その際に辯證法は、ますます深く浸透する認識を許容する。この認識は對象を決して全く汲み盡しはしない、だが其のことは認識が客觀的に眞であり全體として正しくあることを何ら妨げるものではない。

ヘーゲルの「論理學」の翻譯に際しての彼の註釋の中で、レーニンは次のやうなヘーゲルの思想を抜粋してゐる。

「法則はだから現象の彼岸にはなしに、寧ろその中に直接に現存してゐる。法則の王國は現存しつゝある世界或は現象しつゝある世界の靜止的な（傍點はヘーゲルによる）模寫である。」

そしてレーニンも結論に就いて同じやうにこの點について書いてゐる。

「これは特に唯物論的な且つ（靜止的）と云ふ言葉によつて頗る的中してゐる定義である。法則は靜止者を捉へる——そしてこの故に指定されたものであり、各々の法則は、狹隘、不完全、近似的である。」

しかしレーニンは更に、ヘーゲルにあつては、

「法則と本質とは、人間による諸現象及び世界等々の認識の深化を表現するところの、同類概念（同一部類の、或ひはもつと正當には同一素質の概念）」であることを認めてゐる。

こゝに吾々は、辯證法的唯物論が思惟の諸範疇に對して如何なる關係にあるかといふことの模範を有する。辯證法的唯物論は諸範疇の價値を一定の限界に於いて許容する、併し乍ら、それらを偶像化することには反對である。例へば、原因性（因果性）の範疇を取つて見よう。レーニンは結論してゐる。

「原因と結果は、それ故に、世界を包括する相互的依存の、（普遍的な）聯關の、諸事象の交互的連鎖の一モメントにすぎず、物質の發展の鎖における一環にすぎない。」

そして更に、附言してゐる。

「因果性によつては、世界聯關の全面性及び包括的性格は、一面的、斷片的に表現されるにすぎない」
他の個處に就いて彼は同じ問題について語つてゐる。

「（抽象的）概念の形成及びその運用は、既に客觀的な世界聯關の合法則性の表象、確信、意識を自己の中に含んでゐる。この聯關のうち因果性のみを強調することは、無意味である。概念の客觀性や、個別及び特殊に於ける一般者の客

観性を否定することは、不可能である。ヘーゲルは、彼が客観的世界の運動の反映を概念の運動に於いて研究する時は、従つて、カント及び其の他の人々よりも、ずつと根底が深い、……最も單純な一般化、概念の最初のそして最も單純な形成（判断、推理、等々）は、ますます深まりゆく客観的世界聯關の人間による認識を意味する。こゝに人はヘーゲル論理學の現實的意味、現實的意義及び役割を求めなければならぬ。」

しかしして更にレーニンは、俗流唯物論的觀點と辯證法的唯物論的觀點との間の相違を論じて、その際に彼はかゝる相違を、ただ辯證法的唯物論のみが諸範疇の聯關、その限界及び移行を觀察せしめるものであり、判断の限界性を匡正し、各々の認識の相對性を、並びに認識における各々の前進の絕對的内容を見ることの可能性を與へるものであるといふ點に看てゐる。

上述のレーニンの諸説明は他の多くの説明と等しく、因果性の範疇を狹義に解し、一般者の客観性、質の客観性等々を狹隘に復製し、乃至すつかり拒否するところの機械論者達に直接に當つてゐる。

十三及び十四に於いて注意された「低級段階の一定の特徴、性質、等々の高級段階に於ける反復、及び古きものへの外見的復歸（否定の否定）」の諸モメントは、辯證法的自己發展にとつて特徴的であり、また其れらは、發展過程の複雑性のために、發展過程は内的な原因によつて進展すると云ふ事情のために、發展過程に於ては既に上述のごとくたんに結果のみならずこの結果に導くところの道程もまた重要であり本質的であると云ふ事情のために、發展過程に固有のものである。

プロレタリアートが共產主義の達成への能力を具へてゐるとすれば、それは、プロレタリアートがそれ相當の闘争過程をふんできたからである。マルクスは「ドイツエ・イデオロギー」のなかで言つてゐる。

「××は、支配階級が他の如何なる仕方によつても××され得ないといふ理由から××なばかりでなく、また××する側の階級がたゞ××に於いてのみ、一切の古き汚物を拂ひ退け、もつて社會の新たな建設に必要な能力を賦與される事が出来るが故に必要なのである」（マルクス・エンゲルス、アルヒーフ、第一卷、二五八頁）。

また各々の過程は斯くのごとくに見える。

辯證法の個々の諸モメントに照應する、レーニンによつて擧げられた十六の項目の結末に、彼は、ノートの先行頁に於いて紹介したところのヘーゲルからの一引用を指示してゐる。

「絕對的方法」（それは客観的眞理の認識の方法である）は「之に反して、外的反省として振舞はず、却つてその對象自體から被規定者を受取る、蓋し絕對的方法自身は對象の内在的原理であり魂であるから。——これは、プラト、一方では事物をその一般性に於いて、一方では併し事物から迷つて状態、例、比較に掴まらずに、むしろ事物をそのものとして捉へ事物に内在するところのものを意識に持ち來すことによつて、即自且對自的に事物自體を觀察せよと、認識について要求したところのことである。」

そして彼は「絕對的認識」の方法は、分析的であるが、「併し同時にまた綜合的」であるといふことを再三注意してゐる。

さきに既に述べられたところのもの——具體的眞理の學說——がこゝで結論として繰り返されてゐる。人は、所與の現象の特殊的特質を、外部から何かを持ち込むことなしにまたこの研究を「外的反省」として觀察することなしに、研究せねばならぬ。と同時に人は、すべてのモメントの聯關とすべての現象の全體性を忘却することなしに、諸現象を分析しなければならぬ。全人間の實踐も亦、具體性の下に屬するが、このことに就いては既に敘べた。

辯證法のこの最も主要な要素はマルクス主義によつて完全に攝取せられ全面的に發展せしめられた。辯證法的唯物論は不動的な圖式に反對する、それは圖式から偶像が作られることに反對する、それは理論の實踐からの分離に反對する。人間の社會の歴史の研究に於いては、獨立的哲學の座席は、よくて精々『人間の歴史的發展の觀察から抽象されるところの……最も一般的な諸結果の總括ぐらゐるものとして許されるだらう。かゝる抽象はそれだけとしては、現實の歴史から分離しては、全然何等の價値をも有しない』(マルクス、エンゲルス、アルヒーフ、第一卷、二四二頁)。

こゝに、各々の所與の具體的状態、各々の所與の具體的物、各々の所與の具體的現象の研究の必然性が示されてをり、既成の圖式の機械的移入と他の諸關係への機械的適用との危険が警戒されてゐる。

合法則性の歸結たる一般化は『現實的な生活過程の研究と各々の時期の個人の活動の研究とからはじめて』なされ得る、何故ならば各々の時期はそれの特殊の合法則性を有してゐるから。

ヘーゲル辯證法の結果として現はれる『世界像』に關する概念を與へるために、レーニンは次のやうな特徴的な比喩を行つてゐる。

『流れとこの流れの中の水滴。各々の水滴の状态、それの他に對する關係、他のものとの聯關、その運動の方向、速度。運動の線は——直線、曲線、圓、等々——上向、下向。諸運動の總和。運動の個々の諸側面、個々の水滴(事物)、個々の「潮流」、等々の把握としての概念。これが大體(à peu près)ヘーゲル論理學による世界像である。——勿論愛なる神と絶對者とを抜きにしてだが。』

以上我々は辯證法のヘーゲルの諸規定のレーニンの唯物論的解釋の諸特徴を簡單に概観した。辯證法的方法はそれ自身一の偉大な理論的達成を表現してゐる、この方法の助けを藉りてのみ吾々は——客觀的世界の發展の正當な反映にまします近づくのである。吾々は、ヘーゲルが觀念論者としての不當な一般的立脚點にも拘らず、正に辯證法的方法のおかげで、二、三の問題に於いて唯物論に頗る接近してゐることを、既に述べて置いた。レーニンのノートの中では、一系列のこのやうな場合が注意されてゐる。

三

唯物辯證法の本質のレーニンの理解に關する上述の概観からして、それが、またマルクスによる理解、最新の歴史的諸事象から新たな經驗を汲み取つたところの、革命的マルクス主義の理解でもあることがわかる。レーニンはマルクスと等しく、ヘーゲルの神秘主義を抛棄して革命的辯證法を取る。彼はヘーゲルを、唯物論に對するその敵對性の故に、その神秘主義の故に、一つの範疇から他の範疇への移行に於けるそのこじつけの故に、その構成の空虚さの故に、概念を以てする遊戯の故に、辯證法に對する直接的罪過の故に、批判する。

ヘーゲルの諸著作の翻譯に際して、レーニンは最も鋭くヘーゲルの觀念論を論駁し、ヘーゲルが屢々それで彼の表現を満してゐるところの『神秘的な雜炊』を嘲笑してゐる。アリストテレスに關して敍べられてゐる個處で、レーニンは、ヘーゲルがプラトニーの理念に對するアリストテレスの批判を曲飾してゐること、アリストテレスには唯物論の諸要素が存在してゐるのに彼を純粹觀念論者として擧げ、アリストテレスが觀念論と唯物論との間を動搖する一切の點を隠蔽してゐること、を注意してゐる。

エピクルに關する章に於いては(『哲學史』、第二卷)、唯物論に對するヘーゲルの敵對が明白に露はれてゐる。レーニンは之に註釋してゐる。

「ヘーゲルはエビクトル（紀元前三四二年——二七一年）に關して語る時、彼は忽ち……唯物論に對して挑戦しそして宣言する。然るに知覺せられたる存在が眞なるものとして妥當するならば、それと同時に一般に概念の必然性が揚棄されることは、既に（!!）それ自體から（!!）明かである」と。」

レーニン は反駁する。

「唯物論に對する誹謗だ!! 『概念の必然性』は認識及び概念の源泉に關する學說によつては些かたりとも『揚棄』されなす!!」

或は他の個處に於ける——ヘーゲルからの抜粹は、

「世界の終局目的、創造者の智慧、——はエビクトルにあつては存在しない。一切は「原子」なる記號の偶然的な（??）外的な（??）集合を通じて（??）規定される事象である。」

レーニンは註釋を加へる。「神よ彼を哀れみ給へ!! 觀念論的な浮浪者よ!!」

ヘーゲルの『歴史哲學』の翻譯に際して、レーニンは、ヘーゲルが福音書から引用してゐるのを注意し、且つ彼はそれに「不味い——基督教の偉大さに關する坊主的・觀念論的饒舌。嫌惡らしく臭氣紛々たり!」等々と附け加へてゐる。

このやうな註釋は無數に擧げることが出来る。

ヘーゲルに於いて吾々は、彼の一般的な不當な觀念論的觀點のおかげで、辯證法的方法からの直接的背離、辯證法に對する罪過、に遭遇する。彼は彼固有の方法を扱ひ兼ねてゐるのだ。レーニンは、ヘーゲルが斯くの如き場合には自身に違背してゆくのを注意してゐる。

「哲學史」第一卷への註釋中のある個處でレーニンは書いてゐる。

「物質から意識への移行のみではなく、感覺から思想への移行もまた辯證法的である。辯證法の創始者ヘーゲルは、物質から運動への、物質から意識への辯證法的移行を——特に第二を、理解し得なかつた。マルクスはこの神秘主義者の誤謬（若しくは弱點?）を匡正した。」

こゝでレーニンは、觀念論的觀點に固執してゐるヘーゲルが持つてゐる弱點乃至、一層明確には、辯證法に對する罪過、を述べてゐるのだ。

「辯證法的移行は非辯證法的移行と何によつて違ふのか? 飛躍によつて——對立によつて、漸次性の中斷によつてだ。有と非有との統一によつてだ。」

ヘーゲルにあつては客觀的世界の辯證法と概念の辯證法との間には何らの移行も、何らの中斷も、何らの飛躍も、存しない——彼にあつては、概念の辯證法が世界過程全體の基礎として、本質として現はれる。辯證法的唯物論は觀念論者のこの誤謬を匡正する。思想は決して特殊な獨立的な本質ではない、またそれ自體すべての存在者の基礎を表はすものではない。思想は直接その儘客觀的世界ではない。思想の辯證法は、物質世界の客觀的辯證法が人間の腦裡に反映したものである。人間の思想は、——思想には誤謬や眞理からの背馳の可能性が含まれてをり、反映は反映されるもの其の儘ではないにしても——ますます物質的世界の辯證法的運動のヨリ深化せるヨリ信頼し得る反映に近づく。併し辯證法的唯物論は、客觀的世界に主觀的認識を對立せしめるからと云つて、この矛盾を過大にかたち作ることを警める。レーニンは「觀念的なものと物質的なものとの間の差別もまた無條件的ではなく途方もないもの」ではないことを注意してゐる。

前章に於いては、ヘーゲルの『論理學』を翻譯する際にレーニンにより注意された諸點が、辯證法の本質の解明の基

礎とされた。その後「辯證法の問題に寄せて」なる覚え書に於いてレーニンは、唯物辯證法の本質のヨリ完全なヨリ發展した特徴付けをなしてゐる。斷篇「辯證法の問題に寄せて」に於いて、レーニンは、たしかに當時に於けるこの問題に關する彼の全勞作の總決算をしてゐる。この論文の研究にこそ特に注意を向けなければならぬ。(註三)

レーニンの理解にとつて、辯證法の研究及び解明の彼のプログラムは頗る特徴的である。そこでも亦、彼がカウツキイ、ヴァン・デ・ベルト、オットー・バウエル等々の第二インターナショナルの背教者共によつて行はれた硬化から、墮落から、詭辯論への轉化から辯證法を防衛してゐる點に、レーニンの偉大な功績が存する。レーニンは辯證法を、マルクスに於いて辯證法があつたところのその形態に置き直したばかりでなく、更にそれを發展せしめ豊富にし具體化した。

レーニンは、最も單純な現象のうちに、各々の任意の表象のうちに、辯證法の全要素の端初を見出すべきことを示してゐる。研究される各々の個別的領域の特殊的辯證法を斯くして發見することに、まさしく辯證法的方法が存するのである。まさに辯證法はかゝる仕方で行なはれるべきでありまた解明されるべきである。

レーニンは辯證法と認識論との間に同等性の記號を置く、そしてブレハーフがそれに適切な注意を拂はなかつたこと、しかしこゝに問題の核心の存することを、を證明してゐる。

一系列の彼の論文及び註釋に於いて、レーニンは、彼の注意を系統的にブレハーフ的辯證法の缺陷に向け且つ之を批判してゐる。ブレハーフによる辯證法の詭辯論への轉化を既に一九〇四年にレーニンは述べてゐる。世界戦争の時期における諸論文においてはこの點は系統的に現はれてゐた。ブレハーフをして辯證法的唯物論から離れさせ、彼を俗流唯物論のお仲間させた彼の誤謬を研究するに當つて、レーニンは、ブレハーフのカント主義者及びヒュームの

追隨者に對する批判が、彼らの意圖を單に非難するのみで、例へばヘーゲルがそのカント批判に於いて爲した様に、彼らを改良しなかつたが故に、不十分なものであつたといふことを注意してゐる。

レーニンのよつて、彼の「唯物論と經驗批判論」の中でマツハ主義者に對して爲された批判は、かゝる缺陷を完全に脱却してゐる。斯くの如き、匡正し、普遍化し、移行並びに聯關を指示するところの批判は、一般にレーニン獨特のものであつた。斯くのごとき批判の特に輝かしい例を吾々は帝國主義戦争及びそれ以後の時期に於けるレーニンの諸著作に見出す。「國家と革命」、「共產主義の「急進主義」小兒病」等々のごとき諸著作を挙げれば充分である。レーニンは、理論の領域に於けるあれこれの諸現象の物質的根源を常に指示することによつて、論敵の方法論的誤謬を常に暴露し、彼らが如何に匡正されねばならぬかを示してゐる。

レーニンは辯證法の研究にかくも偉大な意義を課してゐたので、この研究を體系的になす爲めの研究プログラムを示した。「論理の科學」からの抜粹の中で、レーニンは、ヘーゲル及びマルクスの諸著作の繼續は、「人間的思惟の・科學の・及び技術の・歴史の辯證法的改造」に存すると云ふ思想を一再ならず敍べてゐる。これは、謂はゞ、唯物論的な哲學史、人間的思惟の發達史は物質的生産過程の歴史から引離してはならぬと云ふことを語る一般的テーゼなのである。併し乍らさらにその次には、もつと微細に亘つた指示があり、その中で研究の全プログラムが與へられてゐる。ラッサールの「ヘラクリート」を翻譯するに際してレーニンは註釋の中で擧げてゐる。

「哲學の歴史、個別的諸科學の歴史、小兒に於ける悟性の發展史、動物に於ける悟性の發展史、言語の歴史、注意せよ。ブラス、心理學、ブラス感覺器官の生理學——従つて、簡單にいへば、認識一般の歴史、知識の全領域——これ即ち認識論及び辯證法に綜括されるべき知識の領域である。」

こゝに吾々は辯證法の研究のための全研究プログラムを持つ。

一九二二年の雑誌「マルクス主義の旗の下に」(註四)への彼の有名な寄書の中で、レーニンは、辯證法の研究領域に於いて今後吾々はいかに研究せねばならぬかに就いて、遺言と云つていふようなものを残した。

レーニンは、特に、唯物論の爲の闘争、「哲學的反動」及び所謂「知識社會」の「哲學的偏見」に對する闘争、換言すれば觀念論に對する、坊主々義に對する闘争の必要性を示してゐる。レーニンは、現代のあらゆる「坊主々義の學位ある召使共」を執拗に暴露し追及すること、反動的ブルジョアのイデオロギー及び小ブルジョアのイデオロギーの代表者共を執拗に暴露し追及すること、無神論的宣傳を行ふことを要求してゐる。彼は凡ての徹底的な唯物論者との同盟、「唯物論に傾いてをり且つ所謂「知識社會」を支配してゐる觀念論の哲學的流行の認容に反對して唯物論を防衛し宣言するのを怖れないやうな、近代自然科学の代表者との同盟」の必要性を指示し、又同時にレーニンはこゝで、宗教的神秘主義の大衆的普及に對する闘争なくしては、唯物論のための如何なる闘争も考へられず、且つ洗練された「科學的」觀念論は宗教・坊主々義と最も緊密に同盟してゐるといふ事情の爲に、宗教に對する闘争の必要なる所以を強調してゐる。

レーニンは近代自然科学の経験してゐる尖鋭な激變は「一步一步、反動的な哲學上の諸學派及び小學派、諸流派及び流派に類したものを産み出す」ことを警告してゐる。しかしこれとの聯關において現はれてゐる一切の錯雜した困難な諸問題を完全に處理するためには、そして科學的研究の道から逸れないためには、レーニンの言ふ如く、人は「マルクスによつて代表される唯物論の意識的信奉者、即ち……辯證法的唯物論者とならなければならぬ。しかし雑誌「マルクス主義の旗の下に」の協働者に向つて、レーニンは更に、唯物辯證法を驅使するためには何を爲すべきか、如何に研究すべきかを語つてゐる。

「この目的のために雑誌「マルクス主義の旗の下に」の協働者は、マルクスが彼の「資本論」並びに彼の歴史的著作及び政治的著作に於いて、東洋(日本・印度・支那)の——地球の人口の大部分を構成してゐる、そして彼らの歴史的の不活潑、歴史的睡眠によつて従来ヨーロッパの多くの先進諸國の平穩と腐朽とを制約して來た、あの數億の人間の——ますます新なる階級の生活への覺醒と闘争との毎日が、斯くの如き新なる民族及び階級の覺醒の毎日が、マルクス主義の正しさを常に新たに確證してゐる——と私は思ふ——といふ程効果的に、具體的に適用したところの、あの辯證法の、即ちヘーゲルの辯證法の體系的な、唯物論的觀點から導かれた、研究を組織しなければならない。

たしかにヘーゲル辯證法の斯くのごとき研究、斯くの如き説明、斯くの如き宣傳は、決して容易な業ではない、そしてこの方向に於ける試みは最初は疑ひもなく誤謬を免かれないであらう。だが失敗しないのは何もしない者だけだ。マルクスによつて遵奉された唯物論的に捉へられたヘーゲル辯證法の適用に基いて、吾々は、この辯證法をあらゆる方向に向けて働かし、吾々の出版物に於いてヘーゲルの最も重要な著作からの精華を公にし、マルクスによる辯證法適用の例、並びに近代史特に近代の帝國主義戦争及び革命が斯くも異常な豊富さで提供してゐるやうな政治的經濟的辯證法の例を引用して、ヘーゲルのこの辯證法をば唯物論者の言葉に翻譯し得るしまたしなければならぬ。「マルクス主義の旗の下に」の編輯者並びに協働者は吾々の考ふところによれば、一種の「ヘーゲル辯證法の唯物論者友の會」を代表すべきであらう。近代の自然研究者は唯物論的に捉へられたヘーゲルの辯證法に於いて(彼が求めさえすれば、そして吾々が其の際彼の助けになることを學びさえすれば)自然科学に於ける現在の革命が提起するところのまたブルジョアの流行の崇拜家を反動的の側に加擔せしめるところの、あの哲學的諸問題の解答の全系列を見出すであらう。

唯物論は戰闘的唯物論たらんとせば、それは斯くのごとき問題を自身に課せねばならぬし、その解決のために系統

的に働かねばならぬ。それをしないならば、唯物論は、シユチエドリンの表現を用ふるならば、打ち勝つ唯物論よりもむしろ打ち負かされる唯物論となる。

卓越せる自然科学者にして、從來彼がやつて来たやうに、將來も辯證法的唯物論を輕視するならば、彼は哲學的諸結論や一般化に對して今後も拱手傍觀することだらう。蓋し自然科学は適當な哲學的一般化なしには如何にしても前進し得ないといふ程に急速に發展したし、またそれ程にすべての領域に於いて深刻な革命的醗酵を経験してゐるのだから。

レーニンがこゝでマルクスの辯證法の研究の必要について敍べてゐることに加へて、さらに、レーニンの全著作のうち存する唯物辯證法の研究も同じやうに大切であるといふことを附言しなければならぬ。これは、彼の著作、演説及び報告には、最新の歴史の諸現象及び諸事件の——即ち第一次帝國主義世界戦争及びプロレタリア革命の——唯物論的究明及び説明が與へられてゐるが故に、特に大切なのである。レーニンの哲學の中には、如何に唯物辯證法を學ぶべきかに關する最も價値多き指示が無數に含まれてゐる。

吾々は實にその點について既に再三敍べて来たのであるが、辯證法的唯物論の主要な特徴は理論と實踐の密接な結合、理論のプロレタリアートの大衆闘争との結合、及びプロレタリアートに貢獻する理論の地位、である。

『社會主義者の任務は』——とレーニンは彼の著作『人民の友』とは何んぞや?』の中で書いてゐる——『事實的現實的敵に對する彼の現實的闘争に於いてプロレタリアートの精神的指導者となり、所與の社會的—經濟的發展の現實的な道の上に立てる指導者となること、に歸する。かゝる條件の下においては、理論的並びに實踐的活動は、ドイツ社會民主黨の古強者リーブクネヒトが、研究、宣傳、組織と云ふ言葉で表現したところの唯一的な活動に一致する。』

この勞作に於いてレーニンは、『敵對及び搾取のあらゆる形態を發見せんとする研究の直接の目的は、プロレタリアート

トを救ふ爲めにそれらを除去することに存する』(全集、第一卷)といふことを示した。革命的マルクス主義者は一般的判斷に自己を限定しない、寧ろ彼は闘争の具體的な現實的な諸問題を所與の具體的狀態において、全體としての全運動及びその終局的關心を一瞬たりとも見失ふことなしに、解決する。辯證法的唯物論は、觀念論に對する、非辯證法的思惟に對する、また現實的にはプロレタリアートをブルジョア的影響に屈服せしめ、プロレタリアートを××解除せしめ、しかも革命の見解であるかのやうに見せかけてゐる一切の潮流と傾向(主要な危險としては、機械論的世界觀とメシエヴィキヤ化しつゝある觀念論)に對する、闘争を行ふ。

ブルジョア及びその學者的召使共は、その觀念論と神秘主義との故にヘーゲル記念祭を利用せんとしてゐる。従つてプロレタリアートが既に早く拋棄し去つたヘーゲル主義のその方面をば前面に押し出さうと狂奔してゐる。マルクス主義—レーニン主義の代表者はヘーゲルに於いて不滅なものをば前面に押し出さねばならぬ。即ち、プロレタリアートの偉大な指導者であり且つ理論家であつた——マルクス、エンゲルス及びレーニン——がプロレタリア革命の讓渡し難い理論的武器たる辯證法的唯物論を作り上げ完成するのに役立つたところの革命的辯證法を。

ヘーゲルの諸著作からのレーニンのノートは、一つの動力を與へるであらう、そして、辯證法の研究、しかもその合理的形態に於ける辯證法、マルクスがそれはブルジョアの側に『憤怒と恐怖』を喚起する、何故ならばそれは彼らの没落の×××性を示しプロレタリアートの究極的×××をもたらず助けとなるから、と云つたあの辯證法の研究を旺んらしむるために強烈に寄與するであらう。(註三)この論文はドイツ語で既に出版された全集第十三卷の三七五頁に載せられてゐる。

(註四) ドイツ版で第一年(一九二五年)第一輯所載。

——ドイツ版「マルクス主義の旗の下に」一九三一年十二月號所載——

辯證法と社會民主主義

エフ・フオガラシ

一一三

一 改良主義とそのヘーゲル辯證法及び唯物辯證法に對する態度

ドイツ社會民主主義の發展の經過中にマルクス主義的辯證法は如何なる運命に遭つたか？ 此の問題は社會民主主義の歴史にとつて著しい興味があるばかりではない、またその解答は社會民主主義を歴史的に理解する上に數多い曖昧な點の解明に役立つばかりではない。此の問題はまたより大きな實踐的—政治的意義をもつてゐる。何故なら、吾々が社會民主主義に依るマルクス主義のその總體に於ける變造、その眞髓の、辯證法的唯物論の、辯證法的方法の放棄を認識し指摘しない限り、政治經濟學の、國家理論の、階級闘争の戰略と戰術のすべての根本問題に於けるマルクス主義理論の歪曲はただ不十分にしか指摘され得ないからである。「辯證法と社會民主主義」といふ主題は、此の探究を遂行するに當つて、マルクス主義的辯證法に對する社會民主主義の闘争といふ主題に變化してしまふ。そして此の主題そのものが理論的—歴史的側面と實踐的—政治的側面とを持つてゐる。マルクス、エンゲルス及びレーニンが唯物辯證法を一方に於ては理論的—方法的に、他方においてはその政治的實踐への適用に於いて完成したのと、正しく同様に辯證法に

對する社會民主主義の闘争もまた二つの側面をもつてゐる。改良主義的理論家に依る辯證法の理論的攻撃、外見上はマルクス主義的辯證法を承認してゐる、かの社會民主主義の理論家に依る辯證法の卑俗化と變造は、同時に辯證法を排斥し、詭辯にまで歪曲することによつて、その革命的階級闘争の實踐的諸問題への適用が、戦争、國家及び革命の諸問題に對する態度の決定が問題である所に於ても行はれる。

此の論文に於いては、革命的辯證法に對する「理論的」闘争と改良主義の政治戦線との間の此の聯關を指摘する試みがなされる。如何なる意味で此の事が同時にヘーゲル辯證法の革命的評價を意味するかといふことは、論述そのものから明白となるであらう。

マルクス主義的辯證法に對する社會民主主義の理論的闘争は種々の諸段階に區分される。それは最も種々な諸形態に於いて行はれたしまた行はれてゐる。かゝる事情は、辯證法に對する社會民主主義の關係に就いて、多くのマルクス主義の信奉者の側にもまた起つたところの曖昧と混亂とを促進してゐる。ドイツ社會民主主義は理論的には概してマルクス主義的辯證法の基礎の上に立つて來たが、然し此の理論の適用に當つてはしばしばこれを見捨て、結局屈辱的にも裏切つたのであるといふのが、即ち、廣く革命的マルクス主義者の諸圏内に迄も擴まつてゐる見解であつた。此の問題の解明は、今日の社會ファシズム的墮落及びその理論的破産に至る迄の社會民主主義の全發展を理解するためには、甚だ重要である。社會民主主義が戦前の時期に於ては唯物辯證法の基礎の上に立つてゐたといふ外見に對して、社會民主主義的理論の本質的な、即ち戦前時に於ても亦——そしてその後も——徹頭徹尾非辯證法的な性質を指摘することが重要である。正に此の非辯證法的性質の裡に、マルクス主義的辯證法の無理解、排斥及び變造の裡に、新カント學派の方法論及び認識論によるその代置の裡に、社會民主主義的理論の其後の全墮落の萌芽がある。辯證法に對する闘争は、全

一一三

戦線に於けるマルクス主義からの背離のための、マルクス主義に對する裏切りのための、一部分を、その哲學的用意を成してゐる、といふことが出来る。

併し我々がマルクス主義的辯證法に對する、即ち唯物辯證法に對する社會民主主義の關係を検討しようとするならば、そのヘーゲル辯證法に對する關係に立ち入つて吟味することを閉却してはならない。此の問題について、レーニンは彼の深遠な哲學的警句の一つに於いて、決定的なことを言つてゐる。

「マルクスの『資本論』を、特にその第一章を完全に理解することは、ヘーゲルの全論理學を學び盡し、把握しな
いならば、不可能である。それ故にこそ半世紀の間一人のマルクス主義者もマルクスを理解しなかつたのである
—(註一)

(註一)「レーニンスキイ・ズボルニク」(レーニン・アルヒーフ)、第三卷、一九八頁、ロシア語版。

社會民主主義的理論家は彼等のマルクス主義的辯證法に對する闘争をヘーゲル辯證法の批判といふ形式で遂行したしまた此の批判はマルクス主義そのものの本質的な歪曲に對する被ひの衣となつてゐるのであるから、彼等がヘーゲル辯證法を如何に理解しまた敘述してゐるか、といふことの確認は益々重要である。

社會民主主義的理論家達は、その音頭はエドワード・ベルンシュタインが取つたのだが、ヘーゲル辯證法を攻撃すると同時に、十九世紀の八十年及び九十年代に於いて覇權に到達しつゝあつたブルジョア哲學、新カント學派の主張に影響されてゐた。戰略及び戰術のマルクス主義的諸原理のみならず、またマルクス主義の世界觀、辯證法的唯物論及びその方法の修正を最も明確に最も斷乎として要求した改良主義が、マルクス主義の哲學的・方法的修正を、「左翼」社會民主主義によつて、オーストリー・マルクス主義によつてマルクス主義の『認識論』にまで高められたところの、かの新

カント主義の旗の下に企てたといふことは意味のあることである。「カントとマルクス」——これが合言葉である、此の合言葉の下に改良主義的理論家並びに政治家達の長い隊列は唯物辯證法に對して進軍した。ベルンシュタインの外には、マルクス主義から新カント主義への轉向に際してその役割が特に顯著であつたコンラド・シュミット(彼は『社會主義月報』の全員に影響を及ぼしてゐた)を、更には社會民主主義的「倫理的」組合運動の指導者J・シュタウディング、社會民主主義的政治家、編輯人及び書記等に缺けてゐる哲學史に關する教養の諸斷片を供給したカール・フォレンダーを指摘すれば足りる。此の發展は、或ひはより適當に云へば墮落は、マックス・アドラーの新カント主義に於いてその最高點に達した。

さて吾々は此の發展をより詳細に追及しよう。吾々はマルクス主義的辯證法に對する改良主義の闘争をベルンシュタイン、カウツキー及びマックス・アドラーの諸著述を借りて描かう、此等の著者達は最も特徴的な諸著作をあらはしてゐるし、また彼等の著述はドイツ並びに國際社會民主主義の内部に最大の影響を及ぼしてゐるのだから。

次の論述は勿論完全無缺を要求するものではない。此處では唯問題の最も重要な諸モメントを取り出すことが眼目であつた。辯證法に對する社會民主主義の關係についての遺漏なき敘述は今後の諸著作のために保留されなければならぬ。

二 辯證法に對するベルンシュタインの出陣

マルクス主義經濟學及び政治學の公然たる修正を企てた、改良主義の最初の著作であるベルンシュタインの著書「社會主義の諸前提と社會民主主義の諸任務」(一八九九年)は、同時に社會民主主義の内部に於いてのマルクス主義的辯證法

に對する最初の公然たる論駁を含んでゐる。ベルンシュタインは多くの彼の先行者と同様に、實踐に於ける反辯證法家であるばかりでなく、意識した反辯證法家である。彼はまた、マルクス主義のブルジョアの反對者が何よりも肝要とするところの唯物論の拒否だけでは満足せず、革命的イデオログ達の明かな本能をもつて、マルクス主義から辯證法的方法を除去することに着手する。吾々は本能を以てといふ、何とならばマルクス主義的辯證法についての現實的なより深い智識とそのヘーゲル辯證法に對する關係といふことはベルンシュタインにあつては何等語られてゐないからである。

『諸前提』の第二章は『マルクス主義とヘーゲル辯證法』といふ問題を取扱つてゐる。半面に於いて唯物辯證法がフリードリッヒ・エンゲルスの著作『ルドウイッヒ・フォイエルバツハとドイツ古典哲學の終結』に聯關して例證的に論述された後に、ベルンシュタインは直に攻撃に移つてゆく。非常に大きな歴史的意義を有するこの攻撃は、何れにしても、辯證法の多面的な偉大な問題性に根本的に關與してゐるところの、鋭い、大膽な概念的分析ではないのである。無原理に陥るまでに折衷的に、無限に卑俗にまた淺薄に、ベルンシュタインは只、辯證法の通俗的叙述に用ひられるかの辯證法の諸モメントを掴み出してくるだけである。ヘーゲル辯證法の諸原理は、とベルンシュタインは書いてゐる。

『科學的諸問題の定式化にとつて大いに役立つことであつたらう、また重要な諸發見に動機を與へたことでもあつたらう。然し此等の諸原理に基いて諸發展が演繹的に豫斷されるや否や、また既に恣意的な構成といふ危險が始まる。』(註二)

(註二) 『社會主義の諸前提と社會民主主義の諸任務』、第二版、一九二〇年、五三頁。

此處に吾々は、ベルンシュタインのヘーゲル辯證法批判の哀むべき根本思想の概略を有する。辯證法は一つの『構成』

である、それは現實の諸事件の代りに諸圖式を置く、それは『演繹的に』研究の諸結果を豫斷する。また、ヘーゲル辯證法の唯一の根本的な即物的な考察を求めぬのも無駄である。即ち、ベルンシュタインは、各々の獨自の研究に基いてゐるヘーゲルの智識に何ら觸れることなく、僭越にも偉大なヘーゲル辯證法その根本に敗訴の判決を言渡したのであるといふことは明かだ。

然し彼にとつて問題なのはヘーゲルではなく、マルクス主義的辯證法であつたのだ。最初の改良主義者の一人としてベルンシュタインは、マルクス主義をブルジョアの『改良主義的教義に變造するには、辯證法を除去することなしには成功しないだらう』といふことを識つてゐた。これが有名なベルンシュタインの定式の意義である。――

『それ(ヘーゲル辯證法)はマルクス學說に於ける裏切りのなもの、事物のすべての徹底的な觀察の途上に横はる、陥穽である、それを越えることはエンゲルスには出来なかつたしまた越えようとしなかつた。』(註三)

(註三) 前掲書、五九頁。

明確なドイツ語に翻譯すると、此のことは『マルクス學說に於ける裏切りのなもの』は、マルクス主義の方法そのもの、マルクス主義的辯證法であるといふことになる。何となれば、ベルンシュタインは、彼がマルクス主義的辯證法をヘーゲル辯證法と本質的には何ら異つたものではないと考へてゐるといふことを、全く明白に表現してゐるからである。彼は、マルクスにあつてはヘーゲル辯證法はたゞ外面的に、『顛倒され足で立たせられた』のである、と考へてゐる。ベルンシュタインに依れば次のやうである。

『ともかく辯證法』を足で立たせること』は決してそう簡単な事柄ではない。現實に於いて常にそうである如く、吾々が經驗によつて確證され得る諸事實の地盤を見棄て、それを越えて思考するや否や、吾々は演繹された諸概念の世界に

陥る、また、さらに吾々が、ヘーゲルがやつたやうに辯證法の諸法則に従ふならば、吾々はそれを認める先に、なほ再び「概念の自己發展」といふ良に陥つてしまふのだ。」(註四)

(註四) 前掲書、五三頁。

これらの唯物辯證法への反對に向けられた諸文章は、ベルンシュタインがマルクス及びエンゲルスは「ヘーゲル辯證法」の内部に立止つてしまつてゐるのだと理解してゐることを明かに示してゐる、そして此の辯證法の非科學性に關する諸論述は悉くまたマルクス主義的方法にも該當する。たとへばベルンシュタインが、その次に、若干の後書や註で、一方ではヘーゲルに好意を寄せ、他方ではマルクス及びエンゲルスに於けるヘーゲル辯證法の「殘滓」について語ることに依つて、彼の諸テーゼを幾分和らげようとしたとしても、このことはその問題の本質に於て何等異るところがない。

ベルンシュタインの辯證法「批判」のすがたを完全に描くために、吾々はなほ、彼が量から質への轉化の命題を「少くとも甚だ淺薄な、外面的な表現の仕方」として、また否定の否定を「類推命題」として十把一からげに否定し去ることを述べよう。

吾々は、ベルンシュタインの辯證法攻撃が理論的觀點に於て考へ得べき最も低い水準に立つてゐる、といふことを知る。十九世紀のブルジョア哲學に於てすべての有名な辯證法の反動的敵對者共(ショーペンハウエル、トレンデレンブルグ、エドゥアルト・フォン・ハルトマン等々)が繰り返し述べた辯證法に對するその無意味な諸論議が、ベルンシュタインの場合にもまた現はれてゐるのだ。だがそれにも拘らず、ベルンシュタインの攻撃は、純粹哲學的關係におけるそれ以上に、はるかに大きな意義をもつてゐる。何となれば、社會民主主義に於ける理論的思惟のかゝる淺薄化、マルクス主義的方法そのものの本質、辯證法の本質を理解し得ないことまた理解せんとならないことは、たゞマルクス主義の實踐

的、政治的、改良主義的偽造の裏面であり、そのイデオロギイ的表現に過ぎないからである。

「陥穽」に關する彼のテーゼの正しさの證明として、ベルンシュタインは、マルクス及びエンゲルスが辯證法の良に捕へられて、歴史的發展を誤つて評價したとか、若くは諸事實に暴力を加へたとかいふようなことを示すべき、若干の歴史諸例をもち出す。

これらの「證明」に深入りしても得るところはない、兎にかくそれは高々次のことにすぎない、即ちそれに依れば、エンゲルスは「フランスに於ける階級闘争」への序文に於いて政治的に彼及びマルクスの諸誤謬を外見上では自ら清算したし、また「理論の必要な修正」を自ら企圖し、且つ辯證法と袂別するには、たゞ徹底性だけが彼に缺けてゐたといふのである。だが、ベルンシュタインが問題にしてゐるこの序文は一個の恥づべき偽造物であるといふこと、即ちそこではエンゲルスの序文の思想の進行の辯證法的統一を正に恢復してゐるところの決定的な革命的定式がドイツ社會民主黨の黨幹部及びベルンシュタインによつて隠匿されてゐたといふことが、その後、明かとなつた。

またベルンシュタインが辯證法の代りに單に辯證法のカリカチュアを叙述し批判したとすれば、彼はなほ、吾々が既に上に示したように、確かな政治的本能をもつて辯證法とマルクス主義の革命的な本質との間の聯關を理解してゐたのである。かくて彼はその章の「マルクス主義とブランキー主義」といふ節で辯證法に關して書いてゐる――

「ドイツに於いて、マルクスとエンゲルスは、急進的なヘーゲル辯證法に基いて、全くブランキー主義と同種の教義に到達した。」(註五)

(註五) 前掲書、六一頁。

「共產黨宣言」の綱領はそれ際全くブランキー主義的、或ひは「バブーフ主義的」なものとして示されてゐる。二十年

後にカウツキーが反ボルシエヴィズムに與へた標語——ボルシエヴィズムは決してマルキシズムではない、却つてブランキズムである——が決して新しいものではないことが解る。ベルンシュタインは革命的マルクス主義に對して、カウツキーよりずつと前に、ブランキズム——彼はその名の下に××××力の適用を理解してゐた——といふ非難の聲を既にあげてゐる。修正主義の開祖ベルンシュタインがマルクス及びエンゲルスに對して闘争を開始したその同じ論法で、今日カウツキーがレーニン主義に對して闘争してゐるといふことは、レーニン主義がマルクス主義の正當な論理的結論たることの深い歴史的な確證である、そしてこの闘争が辯證法に對する闘争として開始されたといふことも、辯證法的方法の革命的意義のそれに劣らぬ深い確證である。

平和的な、漸進的な社會主義への成長の學説は、ベルンシュタインにあつては、發展の學説として現はれる。改良主義的な根本定言をうち建てるためには、辯證法的な發展の理論は社會民主主義のイデオロギーから削除されなければならなかつた。その代りにブルジョアの「協調的な發展の理論が登場しなければならなかつた、そこではヘーゲルの（マルクスの、と理解せよ）辯證法の『急進主義』は揚棄されて、ブルジョアジーの保守的な諸要求に適合される。

ベルンシュタインは殊にこれらの政治的聯關をよく理解してゐた。

一、政治的な根據から、彼は、現實の物的な、形而上學的な、硬直した理解を克服し、硬直した物的世界を全く絶えざる變化に於いて理解された諸過程に解きほゞいてしまふ辯證法の革命的な根本思想に背を向けてしまふ。ベルンシュタインは形而上學的な觀察法を表面は辯證法的なそれと並べて、だが實際には本質的なものとして認めようとする——「それ故、世界は「完結した諸事物の複合體としてではなく、却つて諸過程の複合體として」把へらるべきだ、といふことは全く正しい表現であるとはいへない。吾々が世界を正しく理解しようとするならばむしろ吾々はそれをその時々、に完結してゐる諸事物及び諸過程の複合體として把へるべきだ。」（註六）

（註六）ベルンシュタインの「社會主義の歴史と理論について」三百四十頁に載せられた「辯證法と發展」。傍點はベルンシュ

タイン。

二、辯證法の最大の業績の一つは——發展は對立物の統一並びに闘争として理解すべきだ、といふことである。此の思想の革命的意義に就いてはマルクス及びエンゲルスがしばしば語つてゐる。ベルンシュタインは、改良主義的な、去勢された、革命の精神を失つた發展の概念の全く古典的な定式化を與へてゐる。

「私は、對立物の闘争がすべての發展の大なる衝動力であるといふ見解ではない。近似した諸力の共力もまた發展の大なる衝動力である。」（註七）

（註七）前掲書、三四七頁。

かくしてまさに、ブルジョアジーとの改良主義的な共同活動の、提携政策の、階級協調と労働共同體に關する學説の、是認といふ目的のために、特別の新しい折衷的な形而上學が發生する。すべて此等は既にベルンシュタインの公式中に萌芽として含まれてゐるのだから。

三、かくして改良主義は、辯證法の革命的な發展の理論の清算の途上に於てハーバート・スペンサーの調和的なブルジョア的な進化論に到達する。然り、ベルンシュタインは、マルクス及びエンゲルスの學説をスペンサーの理論の適用として解釋するといふ、信じがたい、がそれにもかゝらず甚だ徹底した試みを企てる。此の社會民主主義のイデオロギー的發展にとつて甚だ重要なスペンサーへの歸依の告白は、例へば、次の文章のうちに含まれてゐる。

「そして吾々がマルクス及びエンゲルスそのものに移つてゆくならば、吾々は、彼等が科學的認識に於いて彼等の

社會主義的先行者の著作に附加したところのものは、有名な「否定の否定」に歸着するといふよりも、はるかにむしろスペンサー學派が進化論として規定したところの精密な公式に歸着するといふことを、知るのである。」

(註八)

(註八) 前掲書、三四頁。

スペンサーのこれらの「精密な」公式は微分と積分の、或ひは特殊化と新たな總括の無價値な諸概念である。それらは然し、ブルジョアジーと改良主義の立場からいつて、對立物の闘争を同形式に進行する發展によつておきかへ、斯くして發展の概念から決定的な辯證法的な、ヘーゲルに依つて天才的に認識された飛躍といふ要素を、「漸次的なものの中絶」を遠ざけるといふ利益をもつてゐる。(註九)

(註九) 發展における飛躍の意義については既にブレハーフが徹底的に指摘した、即ち「一元的史觀の發展」及び其他の著作に於いて。

辯證法的發展理論のスペンサー的なものへのかゝる變造は、改良主義の政策の理論的基礎づけにとつて廣範圍の諸結果をもたらした。それは、社會主義への平和的な成長といふ理論の基礎として、一九三一年のドイツ社會民主黨のライプツィヒの黨大會において報告された「資本主義の醫者」といふ不評判なタルノフの理論に至るまでの、國家の「貫徹」といふ理論の基礎として、役立つたのである。

スペンサーの發展の學說の本質的特徴とは何であるか？ それは、微分積分の公式からすべての新しきものを取り出し、かくて實際的には古きものからすべての、新しきものを機械的に引き出すのである。スペンサーの哲學は、同一性の哲學であり、發展理論の假面をかぶつた存在者の同等性の哲學である。彼の哲學の主要な公式は、「AはAなり」とい

ふ形式論理學の古き公式である。スペンサーの學說は、ブルジョアジーの諸要求に適合した形態の發展の學說である。

(註一〇)

(註一〇) 改良主義的な發展の學說の最も深き理解のための鍵を、吾々は、「辯證法の問題のために」なるレーニンの小論文の次の個處のうちに見出す。

「その「自己運動」における、その自發的な發展における、その生動せる存在における、あらゆる世界事象の認識の條件は、對立物の統一としての認識である。發展は對立物の「闘争」である。發展(進化)の二つの根本的な(或ひは、可能なり？ 或ひは、歴史において觀察せらるべき)見方は、減少と増大としての發展、反覆としての發展、および、對立物の統一(相互に排除する對立物への分裂、およびその相互關係)としての發展である。

第一の見方は、死んだ、貧弱な、乾からびたものであり、第二の見方は、生動してゐるものである。あらゆる存在の「自己運動」を理解する鍵を與へるものは、唯この第二の見方である。獨りそれのみが、「飛躍」、「漸次的な繼續の中絶」、「對立物への變化」、古きもの、破壊と新しきもの、發生とに對する、理解の鍵を供する。

對立物の統一(合一、同一、作用の均等)は、條件的、一時的、過渡的、相對的である。互に相排除する對立物の闘争は、發展と、運動とがそうであるやうに、絶對的である。」全集、第十三卷、三七五—七六頁。

そこで吾々は、ベルンシュタインが辯證法に對する彼の闘争において新カント主義と並んでスペンサーの機械的—自然主義的哲學からもまた彼の精神的武器を携へて來てゐるのを、知るのである。かゝる折衷的、混亂は少しもベルンシュタインを攪亂してはゐない。反對に、彼は、そこで無原理な折衷、種々なブルジョアの流行理論の無選擇な利用がまことに花々しく無禮講の祝典を擧げてゐるところの、一理論を、そのために、つくり出し、そしてかゝる關係からまた、今日の全社會民主主義の本來の精神的指導者にまでなつたのである。マルクス主義的辯證法に反對する折衷主義の根本公式は

次の如くである。

「教義が王位についてゐるところでは、反逆者として自由な科學のために道をあけるところのものは、折衷である。」(註十一)

(註十一) 『社會主義の諸前提と社會民主主義の諸任務』、二九〇頁。

正統派マルクス主義に反對する「自由な科學」！ だがベルンシュタインは、何んと立派に社會民主主義のイデオロギイ的ファシズム化を準備したことぞ！

三 ベルンシュタインに對する カウツキーの論争と辯證法

マルクス主義的辯證法に對するベルンシュタインの攻撃への返答として、カウツキーは「ノイエ・ツァイト」に「ベルンシュタインと辯證法」なる表題の下に一論文を發表した。

この論文は、ベルンシュタインに對してマルクスの辯證法を辯明し、マルクス主義の歪曲の全行程を、それが唯物辯證法の排除のうちに如何に表はれてゐるかを、示さうとしたものである。ベルンシュタインの方法論的傾向に對する眞に根本的な且つ假借なき闘争によつてのみ、その社會民主主義の内部へのより廣汎な侵入を防止されることが出來たのである。

多分、當時のカウツキーは、辯證法に對するベルンシュタインの攻撃の意義を知つてゐたのだ。少くとも、カウツキーの「若し人がマルクス主義から辯證法を取るならば、マルクス主義から何が残るか？」といふ質問は、このことを指

示してゐる。

だがそれにも拘らず、カウツキーの論文は、何はともあれ、マルクス主義學說の全體のなかにおける辯證法的方法の實際の役割を指示してゐるものではない。恐らく、カウツキーが辯證法より深き理解に通じてゐなかつたといふこと、然り、唯物辯證法の本質について何らの見識も持つてゐなかつたといふこと、は明かである。それ故、ベルンシュタインに對するカウツキーの論争は、たゞ、ベルンシュタインの一つのテーゼ、即ち辯證法は發展を圖式にしばりつける、したがつてマルクス及びエンゲルスは諸事實に暴力を加へ、または歴史的諸事件を誤つて豫斷するといふ一つのテーゼにのみ問題を限定してゐる。カウツキーはベルンシュタインを批判する、だがその批判において彼は、ベルンシュタインによつて擧げられた個々の歴史的諸例にのみ問題を限定してゐる。ベルンシュタインの反辯證法的立場の原理的な批判については、マルクス主義にとつてのヘーゲル辯證法の意義の根本的な事實的な指示については、カウツキーは何ら語つてゐない。だがこのことなしには、カウツキーの論文はベルンシュタインの原則的立場に一指も觸れなかつたと同様だ。

このことより深き理由は、カウツキー自身がヘーゲル辯證法を何ら理解して居らず、またマルクス主義的辯證法を、既にその當時、ラマルクの(また部分的には、ダーウインの)生物學的—自然科學的發展の學說の意味に整理してしまつてゐたといふことである。カウツキーが彼の大部な著「唯物史觀」のなかでかゝる名稱の下に言ひ表はしたところの、そして吾々がなほ次にそれについて述べるであらうところの、かの辯證法の悲しむべきカリカチュアへの必然的な道は、こゝから起つてゐるのである。

四 カウツキーの獨特な辯證法—補充

ベルンシュタインの反辯證法に對するカウツキーの『批判』について述べた際に、吾々はカウツキーはあらゆる外見上の對立にも拘らず根本的な問題においてはベルンシュタインと同じ地盤の上に立つてゐるといふことを注意した。この立場は、カウツキーが其後そして最後にはベルンシュタインとの彼の論争の二十七年後に總括的なかたちで與へてゐる辯證法その獨特の表現によつて、完全に確證されてゐる。

彼の有名な著作『唯物史觀』のなかでは、一つの特別な節において辯證法が取扱はれてゐる（第一卷、二二八頁—一五四頁）。辯證法の諸問題のこの取扱において特徴的なものは何か？

ベルンシュタインにおいてそうであつたと正に同様に、カウツキーにとつても辯證法は一つの『圖式』である、しかも定立、反定立、綜合の圖式である。ベルンシュタインにおけると正に同様に、カウツキーは辯證法の全體の思想の富から、辯證法の基本的諸要素から、他のものを取り除きたゞ否定の否定だけを取り出して、辯證法のこの法則を卑俗に淺薄に、また誤つて把握してゐる。カウツキーはエンゲルスに對して重要ならざる且つ衡學的な論駁を行つてゐる、そしてそこで彼は、大麥の粒の消滅、その植物への轉化、卵の鶏への轉化等々は否定の否定の圖式にまさしく適應するものではないといふことを、くどくどと述べ立てゝゐる。かゝる衡學的な論駁のうちに、カウツキーは、エンゲルスがその『反デューリング論』において諸過程の實物示教のために與へたところのまた彼が否定の否定として指示したところの全く正しい通俗的な諸實例を、辯證法の本質と考へてゐるといふこと、が示されてゐる。對立物の貫徹の法則、對立

物の統一の法則に突つ込んで行き、そこから辯證法的諸過程の理解に到達するための、最少の努力をさへ拂つたといふ何らの形跡もない、

このような仕方では、カウツキーはその所謂ヘーゲルの圖式の批判においてベルンシュタインと同じ結論に到達する。然り、彼の諸定式は所々言葉の上でベルンシュタインのそれと一致してゐる。カウツキーにあつては例へば次のように云はれてゐる。

『ヘーゲルの意味における否定の否定は、普遍的法則としてではなく、或る諸過程の特徴づけのための圖式として諸事情の下で全く許され得る。私は自らそれを再三適用してみた、だがそうすることによつて私は非常に用心深くなつた、といふのは一定の恣意が容易にそれに住み込み易いからである。』(註十三)

(註十三) 『唯物史觀』第一篇、一三四頁。

しかして、ヘーゲルにおける圖式の恣意についてのこの閑談は、ベルンシュタインにおける場合と正に同様に、カウツキーにおいてもまた、たゞ唯物辯證法をけなすといふ意味だけしか持つてゐない。ベルンシュタインが問題を、マルクス及びエンゲルスはヘーゲル辯證法の『畏』の捕虜になつてゐるといふ風に把握したとすれば、カウツキーは、マルクス及びエンゲルスが企てた辯證法の唯物論的顛倒は全く不可能であるといふ風に考へたのだ。即ち。

『あらゆる諸現象の運動及び發展の必然的形式としての辯證法のヘーゲルの圖式に對して、有効な唯物論的「顛倒」の後に、甚だ偉大な思想が反抗して起ち上る。』(註十四)

(註十四) 前掲書、一三四頁。

このやうな思想を、カウツキーは、最も種々なまた部分的に相互に粗雑に矛盾した形で繰り返してゐる。カウツキー

は唯物辯證法に對して或ひは公然と鬭争し、或ひはそれを「防禦」し、かくて彼は、マルクス及びエンゲルスは幸ひにも圖式を圖式的に適用しなかつた、また辯證法は彼等にとつては何ら普遍的法則ではなくてむしろ單に一種の研究の假定、所謂「發見術的原理」を意味した、と説明してゐる。ベルンシュタインの非難に對するマルクス及びエンゲルスのかゝる有名無實な辯護は同様に結局唯物辯證法の完全な歪曲に歸するといふことを、吾々は知るのである。

だが、カウツキーは唯物辯證法のかゝる卑俗な歪曲に満足してはゐない。ベルンシュタイン及びその他の反辯證法家共に對する彼の「獨創性」は、彼が「獨特」の辯證法を吾々に御馳走してくれるといふ點に存する。即ち辯證法の本質をヘーゲルとも反對に、またマルクス及びエンゲルスとも反對に認識する。カウツキーは先づそのために生まれてきたに違ひない。辯證法のかゝる本質とは、人間的乃至動物的有機體と外界との間に存する過程に外ならない。かゝる過程とは、より正確に云へば有機體の外界への順應の過程である。かくて結局、カウツキーは、眞理の頂點をきわめて、かゝる過程は有機體と外界との間の交互的順應であるといふ最高の認識に到達する。かゝる過程の出發點はつねに有機體であり自我である。カウツキーはかゝる自我を定立として指示する。彼は周圍の世界を有機體の否定即ち反定立として説明する。で、その結果は「對立物の征服、否定の否定、順應を通じての有機體の新たな肯定、綜合」である。(註十五)

(註十五) 前掲書、一三〇頁。

このような仕方では、辯證法は、カウツキーにあつて、生物學的順應説、さらに云へば、非常に卑俗なまた純生物學的な間違つた理論によつて置き代へられてゐる。全然、また一たびも、現實的辯證法的一片の小さい火花もこゝには最早含まれてはゐない。何の目的でかゝる全く生物學的な假裝舞踏が必要なのか、を先づ吾々は問題となし得るであらう。何の目的で、定立、反定立、綜合の無理解な公式を意味なく、くどくどと取扱つたのか？

だがその無意味のうちにも方法はある！ カウツキーの生物學的「辯證法」は、即ち、假裝せる政治に外ならない！ その全陳腐さは、だが結局、辯證法が順應の過程として表現されてゐるといふこと、したがつて、鬭争の過程としてではなく、「相互に排斥する對立物」(レーニン)の過程としてではなく、「交互的順應」による對立物の征服として表現されてゐるといふことに、歸する。かゝる外見上の生物學的諸定式の背後に階級協調といふ、資本と勞働との間の利益共同體といふ正銘の改良主義的理論を、階級鬭争の放棄を認識するのは困難なことではない。かゝる意味において、カウツキーの著作の辯證法に關する論述と政治的諸部分との間には完全な統一が存する。

カウツキーが辯證法を一種の通俗的な生物學的順應説として取扱つてゐるその素朴さは、それ故、何らそのように無邪氣なものではない。カウツキーの「辯證法」は、資本主義社會の全く平凡な辯護として、示されてゐるのだ。

革命的唯物辯證法に對するその鬭争が、なほ一個の唯物論者と僞稱してゐるところの我が著者に、觀念論の最も一義的な承認を強制してゐる、といふ事情は、辯證法との關聯において重要な意義をもつてゐる。或る個處では次のようにいはれてゐる。

「もし吾々がヘーゲルとは別な意味において辯證法的過程を特に、一つの精神的なものとして……」(註十六)

(註十六) 前掲書、一四一頁。

何故に社會民主主義が辯證法的諸過程を精神的諸過程と見なす必要があるか、といふ問題を、吾々は、マルクス・アドラーの辯證法の解釋と關聯させて取扱はふ。

總括的に云へば、辯證法のカウツキーの取扱とは厭ふべき唯物辯證法を世界から除き去らうとする試みの一異本である。本質的にはマルクス・アドラーのそれよりもより不器用な、より粗雑な、だが然し方法的及び政治的關係において

は、アドラー並びにベルンシュタイン及びブルジョアの反辯證法家の試みと、あらゆるその本質的な点において、一致するところの一異本である。

五 マックス・アドラーと辯證法

「彼等はマルクス主義者と自稱する、だが然し、彼等はマルクス主義を不可能な程に哲學的に理解してゐる。彼等はマルクス主義における決定的なもの、即ち、その革命的辯證法を絶対に理解しなかつた。」(レーニン、「吾が革命について」)

マックス・アドラーの諸著述においては、社會民主主義の辯證法に對する關係が、ベルンシュタインの辯證法に對する公然たる鬭争におけるとは異つた形態で表はれてきてゐる。マルクス主義的辯證法は一纏めにして斥けられてゐない、むしろ形式的には承認せられ且つ……解釋されてゐる。だが、辯證法の解釋は、マックス・アドラーの新カント主義的認識論的態度の立場からなされてゐる。アドラーの諸著述の意義は、社會民主主義における新カント主義的立場がそのうちにその最も徹底的な、また「最も教養ある」とも云へる、表現を見出してゐる、といふ點に存する。新カント主義を一般的に取扱ふといふことは、こゝでは吾々の課題とはなり得ない。吾々の課題はマックス・アドラーの解釋によつて完成されたところのマルクス主義的辯證法の偽造及び歪曲の特殊な形態を研究し、且つかゝる解釋は社會民主主義の如何なる一般的政治的諸要求に適合するものであるかを確めることである。

吾々は、マックス・アドラーの「マルクス主義的諸問題、唯物史觀の理論及び辯證法のため、の寄與。」なる書物を、叙

述及び批判の基礎としよう。

吾々は彼の爾餘の諸著述の考慮を、それらのものが單なる反覆を含んでゐるに過ぎないか、或ひはアドラーの最も最近の著作(史的唯物論の教科書)の如きも辯證法の諸問題を避けてゐる、といふような關係からして、放棄してもいいであらう。

マルクス主義的辯證法の解釋は、アドラーにおいてもまた、ヘーゲル辯證法の上に述べた説明に基づいてゐる。そしてこの説明は次の思想の基礎をなしてゐる。ヘーゲルは思惟の一定の方法をも、實在的進行の諸對立、敵對をも辯證法として理解してゐた。だがこれは、アドラーによれば、「二つの全く異つたもの」なのである。アドラーは、かゝる誤つた二重の意味のうちに、辯證法概念に粘着してゐるところのあらゆる誤解の根源を認める。それに應じて彼はまた一つの天才的な解決を發見する。思惟の方法を辯證法と呼び、實在的對立性を敵對と呼べば、それで充分だ、そこで一切が明瞭になるといふのだ。

かゝる荒唐無稽な專賣特許的解決は悲しいかな「些小の」誤謬を有してゐる。アドラーは、即ち思惟の辯證法と存在の辯證法とが「二つの全く異つたもの」であるといふことを、何ものによつても證明せず、むしろたゞこれを承認してゐる。唯物辯證法は、それが自然にとつて、社會にとつて、そして思惟にとつても妥當するところの同一の法則であるといふことを、まさに確證する、蓋し人間の思惟そのものは一つの「自然史的」所産であるからである。

何故にアドラーは辯證法の統一を切斷してこれを單に思惟方法としてのみ觀察しなければならぬか? といふ問題が自ら提起される。何故に唯物辯證法の根本思想を單なる術語上の修正といふ眩惑の下で評價するのか? アドラーの思想行程の研究は、如何なる方法論的且つ政治的根據がその場合決定的であつたかを、示すであらう。その場合に補助的

なイデオロギー的影響に關しては、アドラーが歴史における諸動機の敵對に關するカントの學說に影響されてゐる、といふことを認めることは困難ではない。彼の見解はヘーゲルからカントへの一步退却を意味してゐる。だがかくの如き影響はさらにより深い根據を有してゐる、それは第二次的なものであつて、多くのブルジョアの歴史家が認めるような第一次的な諸關係ではない。

辯證法が思惟の方法に還元された後で、辯證法はアドラーによつて一つの大きな發見として賞讃される。だが然し、ベルンシュタインは辯證法の敵として、アドラーは辯證法の「友」として現はれてゐるとすれば、辯證法はこゝでナポレオンの言葉を以つて答へなければならぬ。即ち、「神は私を私の友の前に庇護してくれる。私は必ずや私の敵を自分で全滅させるであらう。」

辯證法はアドラーによつて方法として限りなく陳腐に且つ淺薄に解釋される。判斷的な思惟は何ものをも把握しない、それは固定的不動的である、それ故辯證法は必要である。

「判斷的思惟は諸命題における一つの思惟であり、吾々の言語の切斷性によつて影響されてゐる。……辯證法における本質的なものは、言語的思惟から思惟そのものへの呼びかけである。」(註十七)

(註十七) 「マルクス主義的諸問題」第四版、三二頁。

一方において形式論理と辯證法論理との間の大きな深まりゆく差異が一個の心理學的問題に還元されるとすれば、他方においてはまた辯證法の根本概念、矛盾が思惟の單なる關係に轉化される。「ヘーゲルにおける矛盾は……全く本質的には思惟における單なる相關的對立である」(註十八)。その場合にアドラーはマルクス及びエンゲルスに徒らに訴へかけてゐる。マルクス及びエンゲルスは例へば資本主義的生產方法を決して「思惟における單なる相關的對立」としては

把へなかつた、このことはヘーゲルにおいても同様である。(註十八)

(註十八) 前掲書、三四頁。

マックス・アドラーのヘーゲル解釋は、その本質上、ヘーゲルはマックス・アドラー先生や新カント學派のコーヘン及びナトルプが書いてゐることだけを思考したが故に彼は偉大な思想家であつた、といふことに歸する。ベルンシュタインが徹底的な「ヘーゲル食家」であつたとすれば、マックス・アドラーは偉大なヘーゲル辯證法を合目的に、時代に適合するように、即ち新カント的に理髮しようとしたのだ。

だが、かゝる理髮術は單にヘーゲルに對してだけでなく、またマルクス及びエンゲルスに對しても向けられてゐる。マルクス及びエンゲルスは、誰れでも知つてゐるように、頭で立つてゐたヘーゲル辯證法が足で立たせられた。また辯證法の價值多き核心はヘーゲルにおいてあつたようなその神秘的蓋被から解放された、といふような適切な比喩を以つて、彼等のヘーゲル辯證法に對する關係を説明した。マックス・アドラーはかゝる比喩を利用して厚顔無恥な詐欺的演習を試みる。アドラーは、辯證法をその神秘的蓋被から解放させるといふ、マルクスの歴史的事業を感動的な言葉で迎へ、そしてその際に、辯證法は思惟にのみ限られるといふ、彼のテーゼの下にマルクスを再び押し込める。神秘的蓋被からの解放とは、思惟と同時に自己運動の過程をも認識すること、をいふのだ。

まさに辯證法の神秘化を完成してゐるところの、辯證法の範圍の全く觀念論的なかゝる限定が、アドラーにとつては主要事なのである。彼は、方法としての辯證法について語られてゐるところの、マルクス及びエンゲルスの全個處を引用してゐるが、實在的な即物的な辯證法、發展の辯證法的行程が示されてゐるところの、全個處は黙殺してゐる。かゝる引用をやつた後に、彼は、辯證法はマルクス及びエンゲルスにあつて一つの「單なる方法論的意義」を有するに過ぎ

ない、また辯證法が社會的對立性の實在的過程と同一であるといふことは一つの宿命的な缺陷である、といふ結論に到達する。

此處が難かしい處なんだ！ かゝる思想をマルクス主義的理論に適用することが、マックス・アドラーにとつて、主要の點である。だがそれにも拘らず、アドラーは、彼にとつて甚だ苦痛な一つの事實、即ちマルクス及びエンゲルスは辯證法についてアドラーとは全く別な見解を有してゐたといふ事實を、確認しないわけにはゆかないのだ。このことをアドラーは、——蓋し人は遂にすべてを否定することは出来ないから——マルクス及びエンゲルスが辯證法を「方法として」徹底的に固持しなかつたといふ様な仕方で言ひ表はしてゐる。

マルクス及びエンゲルスの「不徹底」は何處に存するのか？ 彼等は存在と思惟とに關して「獨斷論的」見解を有し、従つて彼等にあつては方法と敵對とは融合してゐる、といふ點に存する。それ故、彼等にあつては、單に方法でのみあるべき辯證法が、また同時に自然の普遍的法則ともなるのだ。

唯物辯證法のかゝる根本テーゼはアドラーにとつてはまさに堪へ難きものである。唯物辯證法の革命的尖頭を破壊するために、アドラーは、マルクス及びエンゲルスの錯誤と紛糾の山師の歴史を發見する。マルクス及びエンゲルスは、先づ一つの單なる方法的辯證法をヘーゲルの辯證法に對立させてゐるが、然しその後で、認識論的（即ち、カント主義的）教養の排除のために、殘念なことに存在と思惟とを相互に同一化し、かくて結局辯證法に形而上學の意味を負はせてゐる、といふのである。

實際には事態はどうなつてゐるか？ もし人が辯證法的唯物論の地盤の上に止まつてゐるならば、マルクスの學說のかゝる冒險的な狂人じみた曲解に取りつかまることが無用である。辯證法は、それが存在の辯證法を反映してゐるが故

にのみ、思惟の方法として正しい方法なのである。もし存在の法則と思惟の法則とが融合しないものであるとしたら、思惟によつて存在を認識し模寫することは不可能であらう。ヘーゲルは存在と思惟との共通の法則を天才的なひらめきを以つて發見する、——レーニンの言によれば「推量する」、——だが、それを思惟の法則として、精神の法則として理解する。マルクス及びエンゲルスは「頭で立つてゐる」辯證法を「足で立たせる」、そしてそこで彼等は存在の辯證法を第一次的な根源的なものとして把握し、思惟の辯證法を存在の辯證法の反映として把握する。

吾々がカント的批判主義の偏見に把はれてゐる唯物論的立場を「獨斷論」また「形而上學」として拒否することがないならば、直ちにこれらのことはすべて明瞭、簡單であり、確信的である。だがもしそうであるならば、唯物辯證法の理解に到達する道はまた封鎖されてしまふ。

その地盤の上にアドラーが立つてゐるところの觀念論的、新カント主義的認識論を徹底的に論駁することは、こゝではその場所でない。唯物辯證法のアドラー的「防衛」がベルンシュタイン、ゾンバルト或ひはマザリツクの唯物辯證法に對する攻撃に何ら劣らぬ唯物辯證法の粗雑な偽造を表現してゐる、といふことを示すことが、こゝでは第一に吾々の問題である。なほそれにも拘らず、マルクス及びエンゲルスの「獨斷論」に對するアドラーの「認識論的高さ」についてまた原理的説明が語られなければならない。

もし獨斷論といふ言葉が正しく云はれ得るとすれば、それは決してマルクス及びエンゲルスの見かけ上の獨斷論ではなく、實に、マックス・アドラー型のすべての新カント學派的社會民主主義的似而非マルクス主義者共を含めての、カント及び新カント主義者達の獨斷論である。存在の思惟に對する關係は、思惟から出發してのみ考察され得るといふこと、それに應じた認識論的立場こそ唯一の正しい「批判的」立場であるといふことは、認識論の獨斷論であり、信仰であ

る。マルクス及びエンゲルスはかゝるスコラ哲學的、限定された認識論的立場を無視した（アドラーの主張する如く）のではなく、むしろそれを拒否し、唯一つの現實的、批判的立場によつて置きかへたのである。その際マルクス及びエンゲルスは、存在と思惟との關係の問題を、人間の實踐から出發して提起し且つ取扱つたのである。（フオイエルバッハに關するテーゼ第二節を見よ。即ち「思惟——實踐から遊離されたる——が現實的なりや非現實的なりやの争ひは、一つの純然たるスコラ哲學的問題である。」）

レーニン¹⁾は意味深長な明確さをもつて、マルクス主義は認識論を缺いてゐる、といふアドラー及びマツハ主義者共の饒舌に對して、次のやうな答へを與へてゐる。

「辯證法は正に（ヘーゲル及び）マルクス主義の認識論である。事物のかゝる方面をこそ（茲ではそれが事物の「方面」ではなく、その本質に係る）ブレハーノフは等閑に附してゐる、その他のマルクス主義者については云ふまでもないことだ。」（註十九）

（註十九）レーニン「辯證法の問題について」

アドラーにおいては否定の否定、發展、敵對といふような特殊の諸問題も、また辯證法の根本法則と同じやうに、取扱はれてゐる。そこで彼は、否定の否定は一つの實在的な、對象的な意味を有する、といふことを論難してゐる。アドラーによれば、否定の否定とは量から質への轉化とまさに同様に一つの心理的過程である。かゝる過程を現代心理學は新たに發見した。その際に、マルクス及びエンゲルスは……ウイルヘルム・ヴントの先行者として認められる、といふ「敬意」が彼等に表示されるのだ！より敬意をばらふべきアドラーの所業の一つは、マルクス及びエンゲルスの深く根本的な、革命的な思想をヴントの心理學的な「關係の法則」の陳腐に轉化したことだ！そこで否定の否定の内容

はすべての思惟内容が相互に關係してゐる、といふ貧弱なテーゼとなるであらう。辯證法の普遍的法則——すべての諸過程、諸思想、すべての存在者、すべての關係、の普遍的關聯——は、かくて、再び、内容空虚な、所謂心理學的法則に還元される。

發展に關していへば、ベルンシュタインの反辯證法的脱落に對して言葉の上では可成り鋭く反對してゐるマックス・アドラーが、唯物辯證法のスペンサーに對する關係をベルンシュタインと同様に根本的に誤つて評價してゐるといふことは、極めて特徴的である。アドラーはまた、微分積分のスペンサー的定式——ここでは微分積分の現實の本質は根本的に誤解されてゐる——のうちに、否定の否定の確證とその「科學的」定式化とを見る。かゝるスペンサーとの一致は何ら偶然的性質ではなく、一つの深い微候的な意味をもつてゐるのだ。何故ならば、辯證法的發展概念のスペンサー的實證論的發展概念によるこの表面上無害な交替の背後には、發展の決定的モメントたる對立物の鬭争の排除が潜在してゐるからである。換言すればマックス・アドラーはベルンシュタインとまさに同様に哲學的に改良主義の基礎づけをやつてゐるのだ。

現代の生物學はダーウインからマルクに移つてゆくといふアドラーの主張も、また、すべてのかゝる解釋及び暗示が、マルクス主義を現代科學との間違つた關聯のうちに置かうとするすべての企圖が、如何に必然的に同じ目的を追ふものであるかといふことを、示してゐる。かゝるテーゼは前と同様に間違つて居り、且つ同様に少なからず特徴的である。現代の生物學はむしろダーウインの進化論の根本思想を確認してゐる。ダーウインの進化論をラマルクの順應説によつて置きかへようとする試みは、難破の憂目を見たのだ。（註二十）

（註二十）共産主義アカデミーにおける生物學的討論の結果を参照せよ。そこでは、觀念論的偏向の代表者は、ラマルクに接

あらう。だがその後で直ぐさま彼は正體を現す。發展における對立及び對立の貫徹は、現實のうちにはなく、むしろ觀察方法のうちに、評價のうちのみ實存する！ アドラーはかう書いてゐる！

「そこで、革命に對立する進化といふ腰のフラついた思想をもつて發展の概念を理解しようとする批判家が、惜しむべきことには發展の概念を誤解してゐるといふことを、人々は知るので。進化と革命とは何ら一般に對立物ではなく、むしろ同一の發展行程の歴史的評價の單なる差異である。」(註二十一)

(註二十一) 前掲書、五六頁。傍點は著者。

アドラーはさらに論じていふ。革命と進化との間の差異は、「何ら進化そのものゝ概念のうちにおける實質的な差異を」意味するものでは「全然なく」、たゞ實踐上の態度にのみ關するものだ。

ベルンシュタイン、マックス・アドラー、カウツキー及び改良主義者社會の、對立性及び鬭争を除去せんとする必然的な努力を、ヘーゲル論理學の或る個處に附加されたレーニンの適切な註釋が、確證してゐる。レーニンはヘーゲルから次の個處を引用してゐる。

「それが自己矛盾しないことをのみ氣遣ふところの、諸事物にたいする通常の脆弱さは、だが、他におけると同じく此處でも、そうすることによつて矛盾は何ら解消せしめられずむしろ何處かへ主觀的乃至外的反省一般へ轉嫁されるに過ぎないといふこと、またそれはかゝる疎外と轉置とによつて單なる措定された存在として語られるところの二つのモメントを、揚棄されたもの相互に關連されたものとして、實に一つの統一のうちに包含してゐるといふことを忘れてゐる。」

レーニンはこれに書き加へてゐる。

「これは愛すべき諷刺だ、自然及び社會にたいする「脆弱さ」(俗物共における)は——それを、對立及び鬭争から淨化しようと努める。」(註二十二)

(註二十二) 「レーニンスキイ・ズボルニク」(レーニン・アルヒーフ)、第二卷、一一六頁、ロシア語版。

かゝる俗物共の第一等席を修正主義者達が占めてゐる。ヘーゲルが對立性を心理的過程としての思惟のうちに轉置しようとする企圖を最初から論駁し、修正主義的俗物の「協調的」努力を笑ふべきものたらしめたことは、また極めて興味がある。

現實の根本的過程としての對立および對立物の鬭争を否定し、排除し、とり去らうとする傾向、かゝる傾向は社會民主主義的反辯證法家をして十九世紀及び二十世紀のブルジョア哲學の廣汎な反辯證法的潮流に結合せしめてゐる。(註二十三)。かゝる統一戦線は、單に、そのヘーゲルの形態における辯證法、さらには唯物辯證法に對して鬭争するところのものゝみではなく、また思惟における否定的なるものゝ意義を否定し、否定的なるものを一つの幻想、一つの虚構、一つの單なる主觀的非現實的思惟概念として特徴づけるところの、すべての論理學的認識論的方向をも包括するものである。シグワルトの論理學、さらにベルグソンが特にそうである。リツケルトの反辯證法的論理、および對立性を「超對立性」によつて即ち眞の眞理によつて論理學から征服しようとする、ドイツ西南學派の新カント主義者(ラスク)の企圖もまたこれに屬する。

(註二十三) このことについて詳細には、「十九世紀における辯證法の歴史について」(ウエストニク、コンミュニステイチェスコイ、アカデミー、一九二七年、ロシア語版)を見よ。

吾々は吾々の分析においてアドラーの敘述による辯證法の變造及び偽造を重要視した。このことは確かにアドラーの

氣に入らない。マックス・アドラーは彼の最新の著書において、レーニン及びレーニン主義的『新唯物論者達』が彼等の敵（観念論者達）の『實質的な』諸議論に何ら立ち入ることなく、むしろ單純にその見解がマルクス及びエンゲルスの學說に矛盾してゐるといふことを確認することに満足してゐる、といつて不平をならべ立てゝゐる。彼等はまた同時に、彼等の立場、辯證法的唯物論の基礎づけのために何ら努力せず、むしろ彼等はマルクス及びエンゲルスからの引用に満足してゐるといふのだ。

實に珍奇な不平であることよ！ベルンシュタイン、カウツキー、アドラー、及び他の社會民主主義者が自ら、マルクス主義者と自稱し、またそうすることによつてプロレタリアートの廣汎な諸層を欺瞞してゐるかぎり、彼等がマルクス主義を凌辱するかぎり、一般にマルクス主義のあらゆる變造及び各々の偽造を最後まで徹底的に暴露することはマルクス主義的批判の主要任務であるし、また今後もづつとそうであらう。辯證法的唯物論の基礎づけに關していへば、何らの新しい基礎づけも吾々には確に必要でない、蓋し吾々はマルクス主義なるものを完全に正しいものと考へてゐるのだから。『新しい』、ブルジョア哲學的、認識論的、心理學的流行から借りて來られた基礎づけではなくして、むしろ唯物論證法の一層の建設、その廣汎な普及、その大衆的宣傳が今日問題なのである。

六 『批判的辯證法（ジークフリード・マルク）』

辯證法の名において唯物論辯證法を征服せんとする。社會民主主義の側から企てられた、最新の試みは、ブレスラウ大學教授たる『左翼』社會民主主義者ジークフリード・マルクのそれである。彼の二卷に亘る著書『現代の哲學における

辯證法』（一九三〇—三一年）において、ジークフリード・マルクは、辯證法の問題を取扱つてゐる。マルクの勞作は、彼においてはマルクス主義的辯證法による各々の影響が、その用語においてさへも、完全に消失してゐることによつて、ベルンシュタイン、カウツキー、マックス・アドラーのそれと區別されてゐる。マルクはマルクス主義的辯證法の態度についてはもう問題にしてゐない。社會民主主義的イデオロギーのブルジョア化は、彼にあつては、その完結點に達してゐる。彼は現代の観念論的ブルジョアの講壇哲學の範疇のなかでのみ思考する。勞働者運動に對するかの關係——それは、他の改良主義者にあつては、辯證法に對する彼等の闘争にマルクス主義の『解釋』といふ形態を與へるといふ結果をもたらすところのものである——はマルクの場合には存しない。だがそれにも拘はらず、マルクは、ベルンシュタイン、フオルレンダー、カウツキー、マックス・アドラーと同じ目的を追求する。異るところはたゞ、彼が唯物論辯證法に對する闘争を社會民主主義的似而非マルクス主義の枠内ではなく、ブルジョア哲學そのもの、枠内で遂行するといふことだけである。

マルクの『批判的辯證法』とは、現代の新カント主義の支配的諸方向からすべて引き出されてくるところの、様々な諸觀點の一混合物である。ベルンシュタインの傳統が忠實に守られてゐるのを人々は見るとあらう。ヘーゲル辯證法の征服、より正確にいへば、ヘーゲル辯證法における革命的諸要素の征服、及びそこから引き出されるところの革命的結論の征服は、かゝる方向に共有なものである。かくて、マルクは、新カント學派のエルンスト・カッシーラーに、カッシーラーが對立、對立の貫徹といふヘーゲルの基本概念を除去し、その代りに、飛躍、闘争、運動の要素のとり去られた相關といふ概念をその位置にすゑてゐる限りにおいて、同意してゐる。マルクは、現代の全反動的認識論の最も有能な人物、ハインリッヒ・リツケルトがヘーゲル辯證法に對して、特に否定に關するその學說に對して爲したところの批

判に賛成してゐる。マルクは『批判的辯證法』が遵奉しなければならぬところの方法を思惟の心理學として特徴づけ、且つ新カント主義の救ひなき矛盾は心理學によつて救ひ出されると信じてゐる。その結果は明白な主觀主義と客觀的實在の承認との間をどつちつかず動搖することであり、價値なき穴だらけの折衷主義である。

如何なる權利によつてマルクは辯證法といふ表現を一般に使用し得ると信じてゐるのか？ 彼は、この問題についてその權能をさがし出そうとしてゐるらしい。彼は、ヘーゲル辯證法のうち何が『批判的辯證法』に保持されてゐるか、といふ問題を提出して、それに次の如き解答を與へてゐる。

『自意識の辯證法、および認識過程の辯證法、すべての全體認識における辯證法的契機、および豊富な思惟の結果を得るために矛盾を通過するといふ辯證法的機能がそれに保持されてゐる。』

明確なドイツ語に翻譯するとこのことは、辯證法は意識のモメントとしてのみ承認される、また第二には、矛盾——それはまた同様に思惟のうちのみ認められる——は通過驛の段階にまで貶下される、といふことになるのだ。

『批判的辯證法』といふ表現そのものは、もし人がそれをマルクス主義的な意味に理解するならば、深いその名に價ひする意味をもつてゐる。マルクスが『資本論』への序文において彼の辯證法を批判的、且つ革命的として特徴づけたことは決して無駄ではなかつた。社會民主主義者マルクにおいては、『批判的辯證法』といふ表現は、その下に辯證法の革命的内容の排棄が隠されてゐるところの、誤つた名稱となつてゐる。

なほ吾々は、マルクは辯證法を自意識にのみ限らうとする彼の試みにおいてゲオルグ・ルカッチの『歴史と階級意識』に影響されてゐた、といふことを指摘しておく。著者の意思に全く反した、だが偶然的でないこの書の影響は、一般的に、あらゆる可能な社會民主主義的且つブルジョアのマルクス歪曲者にその反マルクス主義的把握のための議論を供給したといふ點にあつたのだ。

マルクはマックス・アドラーと何ら原理的に異つたものを提供してゐるわけではない、だがそれにも拘らず彼の著書は吾々にとつて興味なきものではない。それは、その最新の形態における、マルクス、エンゲルス及びレーニンが常に烈しい嘲笑と鋭い侮蔑とを與へた、その完全に官學的なブルジョアの講壇科學の形式における、社會民主主義のブルジョア化を示してゐる。階級闘争の現實から離れて、技術及び自然科学の發展との關聯なしに、かゝる講壇哲學のなかで辯證法を取扱へば、それは一つの概念の遊戯に、内容空虚な術語に關する一つの手品になる。だがこの種の『辯證法』はこゝでは辯證法的方法はその革命的な毒牙を終局的に取り去られてゐる、といふことの完全な保證を提供してゐる。そしてかゝる慰安はどうあつても社會ファシズムを作り上げるに違ひない。そこから、哲學、心理學および社會學のありとあらゆる流行への合併が、マルクの『批判的辯證法』型の試みが出てくる。

以上のことを總括して云へば、社會民主主義的理論的文献のうちには、マルクス主義的辯證法の眞の意義の完全な無理解とマルクス主義的辯證法の最も廣汎に亘る偽造とが相並んであらはれてゐる。辯證法に對する態度の限りでは、社會民主主義的著者達はマルクス及びエンゲルスの例にならつてヘーゲル辯證法を研究するといふようなことはなく、またヘーゲル辯證法については十九世紀のブルジョア哲學史が傳へた卑俗な觀念しか持ち合せてゐなかつた、といふことは明かである。辯證法に對する彼等の態度はそれに應じて次の如く特徴づけられる。

一、若干の一般的な陳腐（『否定の否定』、『辯證法的圖式』への辯證法の制限）。

二、普遍的な辯證法的諸法則の心理學的法則（マックス・アドラー）への變更、歪曲、乃至

三、その生物學的法則（カウツキー）への變更、歪曲。
 四、對立性の根本的モメントの排除（ベルンシュタイン、アドラー）。

五、形式論理と辯證法論理との間の區別の拒否、およびかくすることによつて形式論理の側に立ち止まること。

社會民主主義の辯證法に對する理論的關係は一方においては辯證法に對するその實踐的關係を反映してゐるとともに他方においてはその理論的關係はその實踐的關係に高度に影響を及ぼしてゐる。それ故、辯證法に對する無理解、マルクス及びエンゲルスの唯物辯證法を獲得する爲の意志および能力、況んや發展させるための意志および能力の缺如、はたゞにドイツ社會民主主義の内部に蔓延してゐるところの日和見主義の表現であるばかりでなく、またそれはかかる日和見主義の有力な一要因となつてゐる。ドイツ社會民主主義におけるベルンシュタインの辯證法反對の立場は大體において既に大戦前からまた黨指導部の裏面の立場となつてゐた。「常識」——その背後には各々の方法的説明に關する無頓着、淺薄な折衷主義、および懶惰な形式論理學的教育的教育が隠されてゐる——が辯證法を逐ひやつた。だがまたこのことには、方法の問題における朦朧が、「中央派」にとつて特徴的な退却——ベルンシュタイン先生の後の辯證法に對する公然たる攻撃を前にしての退却——が結びついてゐた。

世界史の辯證法はかかる段階の終末を準備した。帝國主義的世界戦争、その諸問題は、一方においては、理論における最高の諸要求、レーニンの諸著作においてそうであつたやうに、唯物辯證法の完全な驅使、その合理的な適用、およびそれのより以上の發展によつてのみ充分に果され得るところの、諸要求を課した。また他方においては、單に第二インターナショナルの世界プロレタリアートに對する陋劣極まる裏切りのみならず、またかかる裏切と唯物辯證法の評價、唯物辯證法の詭辯への偽造との間の緊密な關聯が、世界戦争の光の中に特に明瞭に現はされた。

それ故、唯物辯證法の運命は歴史そのもの、辯證法的行程に緊密に結びついてゐる。唯物辯證法と詭辯との間の闘争はさらにつゞく。それは、ボルシエヴィズムとメンシエヴィズムとの間の、共產主義と社會ファシズムとの間の、第三インターナショナルと第二インターナショナルとの間の、闘争の方法上の表現形態に他ならぬ。

*

注意。上の論文においては戦前の時期の左翼社會民主主義者、特にローザ・ルクセンブルグおよびフランツ・メーリングの態度は取扱はれなかつた。この問題を調べてみると、左翼社會民主主義者は、一系列の根本的な政治的諸問題において犯したその誤謬——その誤謬に對してボルシエヴィキーはレーニンの指導下に假借なき闘争を行つた——と正に同じ誤謬を辯證法の理論の諸問題において犯したといふことが、示される。左翼社會民主主義者の辯證法の諸問題に對する態度は、——この問題に關するスターリンの方向指定（「ボルシエヴィズムの歴史の若干の問題について」）に基づいて特別な勞作のうちで立ち入つて取扱はれなければならない。

——ドイツ版「マルクス主義の旗の下に」一九三二年十二月號所載——

ヘーゲルと唯物辯證法の理論

エム・ミーティン

全資本主義體制が遭遇してゐる最も深刻な危機の基礎の上に、最近吾々は、ブルジョア科學及び哲學の危機、即ちすでに一九〇八年にレーニンによつて充分に分析されたところの危機の極度の尖鋭化を見受ける。現代の二つの基本的な階級の間の、二つの社會經濟的體制——資本主義的體制と社會主義的體制——の間の階級闘争の××化は、科學における階級闘争の極めて尖鋭な容相のうちにもそのイデオロギー的表現が見出される。レーニンは、「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」の中で、次の如く書いた。「マルクスの學説は、すべての文明諸國において、マルクス主義を何か「有害な宗派」の類ひと考へてゐるすべてのブルジョア的（そして官學的、ならびに自由主義的）科學の最大の敵意と増悪を招いてゐる。これはむしろ當然のことである。何故なら公平な社會科學は、階級闘争の上にうち建てられた社會においては存在し得ないからである。いづれにせよ、すべての官學的、自由主義的科學は賃銀奴隷制を擁護するが、マルクス主義はこの奴隷制に對して容赦なき闘争を宣言した。」

現在一般的に、また特殊的には偉大なるドイツ哲學者、觀念論者・辯證法論者、ヘーゲルの百年祭と關聯して起つてゐるところのブルジョア「哲學戰線」における活氣は、こゝに引用されたレーニンの命題に對する明白な圖解であり、

哲學の黨派性に關するマルクス・レーニンの學説の美事な確證である。ヘーゲルの方へ轉向しつつあるブルジョア哲學に對する辯證法的唯物論のための闘争は、——現代の階級闘争の分野の一つである。最近ベルリンで開催された第二回ヘーゲル大會は、鏡の如くに、科學における階級闘争の過程を反射した。

この哲學大會は、それが西歐に起つてゐるところの科學及び哲學のファッショ化の過程における非常に巨大な一環であつたと云ふ點で極めて徴候的である。

マルクス主義（辯證法的唯物論）とすべての種類の觀念論との間の闘争、「ヘーゲルをめぐる」ボルシェヴィズムとファシズムや社會ファシズムとの闘争——これは、科學における、哲學における階級闘争の非常に明白な現れの一つであり、この闘争は現時期の巨大な階級闘争の反映である。

哲學は——イデオロギー戰線における最も残酷な階級闘争の競技場である。哲學においては、二つの根本的な哲學的方向の間の——唯物論と觀念論との間の——闘争が鋭く尖鋭化した。有名なカトリックの著述家——マルクス主義とは凡そ最も縁の遠く——マックス・シェーラーは、彼の著書「Die Wissensformen und die Gesellschaft」〔知識形態と社會〕において、これらの二つの世界觀（唯物論と觀念論）の階級的性質を非常によく特徴づけてゐる。

彼はこの著書においてプロレタリア的思惟にとつては、即ち彼の表現に従へば、「下層階級」の思惟にとつては、次の如き特徴、即ち實在論、唯物論、經驗論、樂觀主義及び辯證法的思考方法が特色的であると見做してゐる。これらの「範疇」に對して「上層階級」の思惟體系は、彼に従へば、目的論、觀念論、唯心論、^{フリオリスムス}先天説、厭世主義及び形式主義の如き諸要素から形成されてゐる。

シェーラーの一般ブルジョア的見解に對して批判を加へるだけで十分であつてそれと別に、現代資本主義社會の基本

的階級の特有の思惟構造を大體に於て正しく特徴づけてゐるところのこれらの命題を特に批判する必要は殆んどない。

ヘーゲル哲學が、その絶對的、客觀的觀念論の形における反動的な、保守的な方面とその辯證法の形における革命的な方面とを有してゐたことは一般に明かである。「ヘーゲルの辯證法を——とレーニンは書いた——マルクスとエンゲルスは發展に關する最も全面的な、最も豊富な内容を有する、最も深刻な學說として、ドイツ古典哲學の最大收穫である」と考へた。彼等は、發展、進化の原則に關する他の一切の定式を、一面的で、内容貧弱のものとなし、自然及び社會における發展の眞實の進行（しばしば飛躍、カタストロフ、革命を伴ふところの）を不具にし、ピッコにするものと見做した。しかしヘーゲル辯證法は觀念論的辯證法である。その上、辯證法と觀念論とは彼においては決して互ひに外的に結合されて居らないで、有機的に融合はされ、融着せしめられてゐる。それ故にこそエンゲルスは、マルクスの「經濟學批判」に寄せた彼の評論において次の如く書いたのである。「マルクスは論理學の領域におけるヘーゲルの眞の發見を含むところの核心を引き出し、且つ辯證法的方法を觀念論的外皮から解き放ち思想發展の正しい形態であるところの單純な形態において作り上ぐべき課題を自ら引き受け得るところの唯一の人であつたし、また、現在もそうである。」（ドイツ版マルクス主義者文庫第三卷、エンゲルス「フオイエルバツハ論」附録、一一八頁）

ドイツ古典哲學の最も偉大な代表者としてのヘーゲルに對する吾々の關心は、唯物論的に作り直された、「逆立ち」させられたヘーゲルの辯證法的方法に對する關心である。ヘーゲル紀念祭は吾々にとつては、唯物辯證法のための闘争、レーニンの表現に従へば、マルクス主義の「根本的理論的基礎」であり、「革命的魂」である唯物辯證法のための闘争、の一層の展開のモメント、機會であらねばならない。ブルジョアジーのヘーゲルへの轉向は、新たな諸條件の下においてマルクスレーニン主義の觀點からヘーゲルの觀念論の批判を展開すべきことを吾々に義務づける。ヘーゲル紀念祭

は吾々にとつては、マルクスレーニンの哲學、唯物辯證法の發展におけるレーニンの段階のヨリ廣汎な普及と、二つの戦線における——辯證法を理解せず、且つそれを否定するところの主要な危険としての機械論に對する、並びにマルクスの辯證法をヘーゲルの精神に變ぜしめるところのメンシエヴィキ化しつゝある觀念論に對する——闘争との一層の展開のためのモメントたらねばならない。

現在、ブルジョア哲學文獻におけるヘーゲルに對する特別な關心は何によつて呼び起されてゐるか？ 西歐の國々における、特にドイツとイタリーにおけるヘーゲル主義運動、或はヨリ正確に言へば、新ヘーゲル主義運動の強力な復活の原因は何であるか？ 忘却されたヘーゲルが現代の國立大學において再び名譽ある地位を占め始めており、彼の著作が非常に讀まれ、研究され、註釋されそして出版されてゐることの根據をなすものは何か？

この問題に對する答へが必要なのは次の理由にもよる。即ち今日の情勢は、ブルジョアジーの理論家によつてヘーゲル哲學に對する大なる批判的及び破壊的活動が遂行された十九世紀の後半と比較して根本的に變化したからである。ヘーゲルに對する態度の變化が、既にバツハマン、シヨールベンハウエル、トレンデレンブルグ、ハイム、ハルトマンの批判的活動の後、ヘーゲルに對する特徴的な輕蔑、即ち彼を「死せる犬」として待遇した後、十九世紀の後半期において、カントへの轉向及び公認哲學文獻における新カント主義者の無限の支配の後に於て見られることは、特に注目を値する。ヘーゲルに對する嘲笑や嘲弄——例へばヘーゲルを「拙劣な無思惟者及び悟性の破産者」以外の何ものでもないと言つた「町人哲學者」シヨールベンハウエルの罵倒、——但しシヨールベンハウエル一人ではない——を抹殺すべきではない。

『大學の哲學について』なる論文の中で彼は次の如くに書いた。「若し國家統治の權が卑しい階級、社會の沈澱物の手に陥つたら國家は如何に不幸に且つどうなるかわからぬと同じやうに、哲學及びそれに關聯せる學問及び人類の精神生活に

とつても、若し平凡な人間——一方では追従と、他方では無思想を書き散らす厚顔さとを特徴とするにすぎないところの——が、簡単に云へばヘーゲルみたやうな人間が、最大の全く比類のない程の執拗さを以て自己を最大の天才——その人において哲學が遂にその熱望する目的に到達したところの——と宣揚するならば災害これより大なるはない。』

ところが、それにも拘らず、ブルジョアジーの關心は再びヘーゲルへ向つた！

ブルジョア哲學は、この哲學の隆々たる發展の時期とその衰退及び崩壞の時期を區別するところの歴史的境界線を、すでにずつと以前に通過した。

すなはちブルジョア哲學の隆々たる發展の時期は、ヘーゲルをもつて終つてゐる。マルクス主義哲學、すなはち革命的プロレタリアートの哲學によつて蒙られたヘーゲル哲學の敗北後の最初の時代には、ブルジョアジーは哀れな折衷主義的哲學體系によつて養はれた。前世紀中葉の嵐の如き革命の後到來した所謂資本主義の有機的發展の時代には、ブルジョア哲學陣営内ではカント哲學が最も流行した。ブルジョアジーは、カントをもつて、ヨリ正確に言へば新カント主義をもつて自己の第二の哲學的青年期を終へ、かつてカント哲學をもつてドイツ古典觀念論哲學の時代が開始された如く、ブルジョア哲學の隆々たる發展の新たな時代が開始されてゐると考へた。しかし開始しつゝあつた帝國主義の時代、資本主義の腐敗時代、プロレタリア革命の時代は、ブルジョア哲學の陣列に新たな當惑を持ち込んだ。二十世紀の極く初頭に爆發したところの自然科学の危機は、ブルジョア哲學の當惑と破壊となほ一層鋭くした。自然科学の優秀な代表者達は自然發生的に辯證法的唯物論に引き込まれた。自然科学者の他の部分は、ブルジョア哲學者と共に、新たな時代によつて提起された新たな問題に對する解答を、カビに蔽はれたヒュームやバークレー等の哲學體系の中に徒らに搜し求めた。

一九一四——一九一八年の全世界帝國主義戰爭は、『世界資本主義の全體制を震撼せしめ、その一般的危機の時代の發端をなした。』この危機はブルジョア哲學及び科學をも深刻に捉へた。資本主義の一般的危機の地盤の上に展開し、『これまで存在したところのあらゆる世界經濟恐慌のうちで最も重大な且つ最も深刻なもの（スターリン）である現在の經濟恐慌は、帝國主義の時代の開始、そして特に資本主義の一般的危機の時代の開始以來ブルジョア哲學のうちに見受けられたところの、その發展過程を最も明確に暴露し、尖鋭化した。

現時代におけるブルジョア哲學の發展方向は、現代化された形態におけるヘーゲル哲學への轉向として簡単に規定され得る。

ヘーゲル百年祭と關聯してブルジョア哲學陣営に起された騷動は、ブルジョア哲學のヘーゲルへの轉向の外的現はれの一つであるに過ぎない。

ヘーゲル哲學の現代化のうち、ブルジョアジーは、哲學の武器をもう一度發見せんと試みてゐる。

ブルジョア哲學文獻におけるヘーゲルへの現時の關心及び轉向の二つの基本的な原因を指摘することが出来る。

ヘーゲルへの關心の復活の基本的な原因は、資本主義の世界恐慌及び資本主義の全矛盾の尖鋭化と關聯して、主要なヨーロッパ諸國において、特にドイツにおいてファシズムが成長、強化、發展しつゝある點にある。ヘーゲル哲學の反動的保守的、觀念論的、神祕的體系は、ファシズムにとつては非帝に魅惑的であり、ファシズムのための理論的基礎として利用され得、ファシズムの側から特別な關心を呼び起し得るし、現實に呼び起してゐる。

ヘーゲルの絶對的觀念論は、ファシヨ化しつゝあるブルジョアの最も粗野な、現代的な、神祕的な、觀念論的・宗教的見解の基礎をなしてゐる。ドイツ古典觀念論の積極的な特徴、ヘーゲル哲學の能動性は、現代のファシヨ運動の積極的

な、攻撃的な、能動的な性質にとつては非常に魅惑的である。ヘーゲル哲學の絶対精神による、當時のプロシア君主制の神聖化、ヘーゲルの著作の特色たる國民主義及び排外主義——すべてこれはブルジョアジの智慧と心臓に、帝國主義的・掠奪的、國民主義的・ファシヨ的氣分に非情に同情的である。

大部分がファシズムと織合はされてゐるところの現代の新ヘーゲル主義運動は、深い社會的根據、深い內的社會的基礎を有するものである。

昨年オランダのヘーグに開催された第一回國際ヘーゲル大會の資料は、多かれ少かれ現代の新ヘーゲル主義の遺漏なき特徴づけを與へてゐる。

例へば大會における報告者の一人——ビンダーは、『法としての自由』の問題(ヘーゲル『法律哲學』に關する)について次の如く言つた。自由主義は今日マルクス主義的國家論を征服することは出来ない、それは『社會主義の狂暴な要求』の前には無力であり、ヘーゲル國家學說に理論的に依存する鞏固な國體のみがマルクス主義を始末し得る、と。

彼は次の如く書いた。『社會主義がヘーゲルにおいて何等の役割をも演じないと言ふことは全く當然である。これは、ヘーゲルにとつて望ましくないやうな意味で屢々主張されたやうにヘーゲルが満腹したブルジョアジの哲學者であつたためではなくて、ヘーゲルが市民社會の運動原理としての利己主義がその中に止揚されてゐるところの國家に關する正しい概念を最初に發見したためである。』

かくの如くビンダーは、ヘーゲルに依存し、彼の法律哲學を利用しつゝ、『社會主義の要求』やマルクス主義と闘争してゐる。彼自身は國家に關する、自由と必然に關するヘーゲル學說の本質を次の如くに解釋してゐる。

『神の精神と神の意志とは吾々の意識のうちのみ、且つ吾々の意識を通じてのみ現實的であるが故に、また、人間精神の發達史は、同時にまた世界における神の精神の實現史であるが故に、神の意志への吾々の依屬の意識へと吾々が高まれば高まる程、吾々の個人的意志の利益が神の意志のために殺されれば殺される程、吾々の自由は益々現實的なものとなる。……吾々が、神の手中にある傀儡たることを自覺すればする程、吾々は益々自由となる。』

『神の手中にある傀儡』即ち現代ファシズムの手中にある眞の傀儡——ブルジョア大學教授ビンダーは、現在かくの如くに共產主義と闘つてゐるのである。

ファシストの新ヘーゲル主義は國民及び國家の問題においては特に手練をもつてゐる。ファシスト『理論家』の哲學的及び社會學の見解の中心には、國民問題が立つてゐる。『全體と部分』、『一般、特殊及び個別』、『統一』、『全體性』等々のヘーゲルの範疇は、自己のテロリスト的支配を正當化するためにファシストによつて耻知らず利用されてゐる。

國民——これは全體性である。國民——これは個別——個人を止揚し、且つその上に立つところの一般性である。全歴史は——嫌惡すべきマルクス主義に反し——階級闘争の歴史ではなくて、民族、闘争の歴史であり、『民族精神』、『國民精神』等々の闘争史である。國民主義——共產主義に反對の、マルクス主義に反對の——これこそはファシスト『理論家』やファシスト政治の基礎的な要^{ライト・モノナフ}因である。國民主義——永遠の範疇——これこそはファシスト哲學者のお氣に入りの結論である。ヘーゲルの『歴史哲學』、彼の『法律哲學』は——彼等がそれから出發してゐるところの基本的な著作である。十九世紀の最初の四半期のプロシヤの國家哲學者たるヘーゲルは現代ファシズムの旗じるしである。國家問題は國民問題との密接な關聯にある。一聯のファシスト『理論家』はこの問題の理論的研究に従事してゐる(ヘーラー、シユバン、ビンダー、モロー等)。「國民精神」——國民——は國家においてその最初の體現をとつてゐることが分る。國家はすべてのものの上に、文化の上に、宗教の上に立つてゐる。國家は道德の最高の體現である。ヘーゲルは現代のフ

アシスト的組合國家の父となつてゐる（ジエンテイレ）。ヘーゲルが現代帝國主義の精神的始祖にさへ轉化してゐると言ふ事情は全く理解できることである（ヨーハン・ブレンチエ、ブルノヴィッチ）。

第二に、ヘーゲルへの關心は疑ひもなく現代のブルジョア科學の危機と結びついてゐる。一般的となつたこの危機は舊い思惟形態及び思惟方法の完全な崩壊によつて特徴づけられてゐる。科學の各種の領域における學者の聲、即ち論理的及び方法論的革命的必要が成熟したと言ふ哲學者や自然科學者や社會學者の聲が非常に屢々鳴響いてゐる。「新しい論理學」、「新しい哲學」、又は或る人々が言つてゐるやうに「新しい範疇表」が必要であると云ふ指示を非常に屢々聞くことが出来る。ヴィヘルスマが「現代文化の悲劇」と「科學の中の唯一の科學への思慕」を特徴づけたところのヘーゲルに於ける第一回ヘーゲル大會において、彼は正に現代の科學が新しい方法論を熱烈に要求してゐることを自己流に述べたのである。

科學の一般的危機からの唯一の活路は、たゞ辯證法的唯物論の道の上に、現代の唯一の進歩的、 $\times\times$ 的階級——プロレタリアートの方法論と世界觀の道の上のみ可能である。これは全資本主義體制の一般的危機からの唯一の可能な $\times\times$ が、たゞプロレタリアートの $\times\times$ と社會主義社會の建設の道の上のみ可能であると言ふことの理論的表現である。しかし階級的偏見に貫かれたブルジョア哲學及び科學の代表者達や、唯物論と唯物辯證法とに對する恐怖に滿され、マルクス主義哲學に關する非常に豊富な文獻を知悉するに時を割かず、共產主義に對する憎悪とプロレタリア $\times\times$ に對する死ぬやうな不安とに滿された「博學な男共」は、科學の危機からの活路を觀念論や神祕主義や宗教的世界觀の非常に極端な表現のうちに求めてゐる。すべてこのことが觀念論的方法論や觀念論的辯證法——その偉大なる創設者且つ天才的な大家は絶對的、客觀的觀念論者ヘーゲルであつた——への關心を規定するのである。

吾々の出版物の紙上で屢々見受けられる見解、即ちブルジョア哲學がヘーゲルの辯證法的方法を恰も完全に放棄しつゝたゞヘーゲルの觀念論的體系へのみ轉向してゐるといふやうな極めて粗雑な見解を清算すべき時である。現代の新ヘーゲル主義は、それがヘーゲルの辯證法なしにはやつて行けないと言ふことによつても亦特徴づけられてゐる。帝國主義の諸條件の下において、階級的矛盾と階級 $\times\times$ の極度の $\times\times$ 化の状態の下においては、矛盾の論理なしにやつて行くことはブルジョア的、ファシスト的「學者」には困難である。

ヘーゲル辯證法、辯證法一般に捧げられた非常に多くの「勞作」を我々は有してゐる。しかし辯證法への現代ブルジョア哲學者の注意は、辯證法が彼等によつて全く神秘的に解釋されてゐると言ふ點で特徴的である。ヘーゲルの辯證法は一切の革命的内容がそれから去勢されてゐると言ふ點で歪曲されてゐる。辯證法の「神學的」解釋、辯證法の詭辯論への轉化、資本主義の支配、ファシズムによる權力獲得を正常化するための、マルクス主義的辯證法との鬭争のための、武器への辯證法の轉化、——これが辯證法へのこの「注意」の階級的、政治的等價物である。

それ故に我々にとつては、ファシズム及び社會ファシズムの哲學における辯證法及び辯證法的方法の諸問題に對する現代的解釋が大なる興味を持つものである。

こゝでは、最近にヘーゲル哲學問題に捧げられた文獻におけるヘーゲル辯證法のブルジョア的・神祕主義的解釋の次の四つの基本的な形態に止ることにする。

- (1) 思辨的辯證法。その主要な代表者はクロトナー——國際ヘーゲル聯盟の首領——である。
- (2) ヘーゲルと彼の辯證法の主觀的・觀念論的解釋。この傾向の主要な代表者はムツソリーニ内閣の前文部大臣、有名なイタリーの哲學者、ファシストたるジエンテイレである。

(3) 主としてヨナス・コーンや「左翼」社會民主主義者、ブレスラウの大學教授ジークフリード・マルクによつて代表された批判的辯證法。そして最後に、

(4) アルトウール・リーベルトによつて代表された悲劇的辯證法。

クローナーは——最も正統派的なヘーゲル主義者である。クローナーは——明白に表現された觀念論者、神秘主義者である。クローナーの道は——新カント主義者の新ヘーゲル主義者への轉化の道である。二卷から成る「カントからヘーゲルへ」の中で、彼は素直に次の如く聲明してゐる。ヘーゲルを理解することは、——これは彼の範圍外へは何處へも絶對に行けないことを意味する。クローナーは「ドイツ國民の觀念論的使命に就いて」非常に多くを語つてゐる。彼の哲學的勞作は明白に表現された國民主義的、排外主義的色彩を帯びてゐる。

「ドイツ觀念論の偉大な高遠な道」は、彼の勞作「カントからヘーゲルへ」の中でクローナーによつて次の如くに述べられてゐる。

「カントにおいては思惟は、自己のうちに、「自我」のうちに世界の基礎を見出すやうに自己そのものに集中されてゐる。フイヒテにおいては思惟は「自我」の奥底に神を發見する。シエリングにおいては思惟は世界のうちに直接に神を求めんとする方向へ傾く(スピノザやブルーノへの接近)。ヘーゲルにおいてはそれは、絶對的な或は神的な自我から世界を建設することによつて終つてゐる。この途上においては何處にも運動の停止はない。この道を始める者は運動に引き込まれ、そして終點まで運び去られる」(第一卷、一六頁)。

クローナーはヘーゲルへの轉向を、哲學において、極く最近まで支配してゐたカント的批判主義の代りに思辨的形而上學の支配を確立せんがために必要なものと看做してゐる。クローナーは幾度となく強調してゐる、ヘーゲル

の研究は彼に對する一般的關係から獨立にも必要である。何故ならこれは「形而上學問題への科學的接近の道を精神のために開くところの」最高の學派であるからと。

若しヘーゲルの絶對的觀念論の體系が、幾度となくマルクスやエンゲルスやレーニンによつて指摘された如く、豊富な具體的・歴史的資料に基礎づけられた體系であつたとすれば、それはこのヘーゲルのエッセイの亞流のもとでは全く去勢された思辨的思辨である。彼のもとでは直觀主義的、非合理主義的なヘーゲル解釋が強く響いてゐる。例へば彼は辯證法とは何か、を次の如くに規定してゐる。「ヘーゲルは非合理主義者である、何故なら彼は辯證法論者であるから。何故なら辯證法は方法へと轉化され、合理的なものにされた非合理主義であるから。何故なら辯證法的思惟は合理的・非合理的思惟であるから。」

自己の「非合理主義的」ヘーゲル解釋を展開しつゝ、彼は次の如くに書いてゐる。「ヘーゲルの思惟はそれが非合理的、超合理的、或は反合理的であるその程度において合理的である」(第二卷、二七一頁)。辯證法の諸問題におけるこの非合理主義的思想は、クローナーにおいて次の如き彼の考によつて非常によく暴露されてゐる。彼は書いてゐる、「辯證法は合理的、悟性的な思惟ではない、又それはたゞ思惟であるのみではなくて、それと同時に絶對精神の自己運動である。」

それでは對立物の統一の法則、矛盾の法則をクローナーが如何に解釋してゐるかを觀察しよう。彼は「經驗的矛盾」と「思辨的矛盾」との間に差別をつけてゐる。例へば彼は認識の二つの形態に結びつけられてゐる矛盾の二つの形態を次の如くに特徴づけてゐる。「經驗的認識は——と彼は書いてゐる——自己に矛盾する權利を持たない。それは矛盾を避けねばならない。」そこでは、クローナーに従へば、形式論理學が支配してゐるのである。思辨的認識、思辨的矛盾はこれとは全く別である。「思辨的矛盾は、經驗的矛盾が經驗的反省の結果であると同様に、思辨的反省の結果である。しかし

經驗的矛盾（並に經驗的否定）は虚偽な經驗的判斷によつてのみ起るものであり、従つて二様の意味において避けられない（第一、肯定的な及び否定的な經驗的判斷は同時に眞理たり得ないとの理由で、第二、否定一般はこゝではそれを避けねばならないとの經驗上の錯誤の結果たるに過ぎない、換言すれば經驗的錯誤の目的格的相關物たる虚偽な判斷の結果たるに過ぎないとの理由で）、しかるに、——思辨的矛盾は全く不可避的である。何故なら思辨的反省（及び思辨的否定）はその根源を積極的思辨的認識からの逸脱に負うてゐるのではなく、錯誤や虚偽な判斷の上に打ち建てられてゐるのではなく、思辨的認識の必然的モメントであるから……。

思辨的認識は經驗的認識ではない、何故ならそれは自我の認識（自己認識）であるから。』

ジークフリート・マルク (Siegfried Marck) は、クローナーに従ひ、ヘーゲル主義の基本的な思想を次の如くに特徴づけてゐる。彼は次の如くに書いてゐる。「無限な、神的な、精神の、世界を通じ、有限的な精神を通じ、自分自身へ到る道は、ヘーゲル哲學の基本的動因である。』

かくの如くヘーゲル哲學と辯證法のクローナー的解釋は次のモメントに歸着する。(1)カントの批判主義の代りに思辨的形而上學への復歸の要求。(2)全般的觀念論、僧侶主義、神祕主義、及び非合理主義。(3)辯證法を全く思辨的辯證法へ還元すること。(4)辯證法そのものを非合理主義の表現として解釋すること。一般にクローナーの思辨的辯證法とは以上の如きものである。

イタリーの、ファシスト的ヘーゲル解釋の一般的基礎は辯證法を「精神的活動の懷に」完全に轉移することである。主觀的「觀念論的辯證法、積極的、思惟的主體の辯證法、——これがファシストたるジエンテイルの側からの「ヘーゲル辯證法改革」の基礎である。イタリーのヘーゲル主義にとつて極めて特徴的な特性は、その非常に嚴格な活動主義、主體の極端な行動性や極端な積極性やの基礎づけである。

労働者運動撲滅におけるファシスト的行動性や積極性は、ジエンテイルの能動主義のうちに充分明確なイデオロギイ的表現をとつてゐる。運の盡きた階級の代表者のこの「積極性」の基本的な意味は、客觀的、歴史的必然性への鋭い反抗以外の何物にも存しない、主體的活動によつて歴史の斷乎たる歩みやプロレタリアートの必然的勝利を抑制せんとする試み以外の何物にも存しない。それ故ジエンテイルの哲學は極端な主觀主義の明白な表現である。彼は創造や活動の唯一の支柱を精神そのもの、活動のうちに見てゐる。歴史は、ジエンテイルの意見に従へば、全くこの自由な創造的な精神の産物である。歴史的必然性はたゞこの精神の必然性としてのみ示される。現實的歴史的必然性、現實的歴史的合法則性の認識は、ブルジョアジーの代表者のためには絶望の種を播くに過ぎないものであるから、この必然性を放棄せよ、と言ふのである。現實性は、ジエンテイルに従へば、絶對的な純粹な主觀性である。彼は思惟する思惟と思惟される思惟とを區別してゐる。ジエンテイルにおいてはたゞ物、對象的物質的世界が思惟の中に溶解されるのみではなくて、又思想も思惟の中に溶解される。この點に——彼の思惟される思惟の意味があるのである。辯證法とは、ジエンテイルに従へば、ただ精神にのみ内屬するものである。物、自然、世界は——精神の辯證法の受動的産物である。ジエンテイルはヘーゲルの辯證法に不満足である。彼はそれを「改革する。ヘーゲルの辯證法は彼の視點からすれば餘りにも「客觀的」であり、餘りにも「對象的」である。辯證法とは、ジエンテイルに従へば、「自我の自由」である。

現代の新ヘーゲル主義的ファシスト的なヘーゲル辯證法解釋は以上の如きものである。特にドイツにおいて最も普及してゐるヘーゲル哲學に對する關心の形態は、ヘーゲルとカントを結合せんとする試みである。所謂「批判的辯證法」の代表者ジークフリート・マルクは、正にかゝる結合を試みつゝある特徴的な哲學者の一人

である。

今日まで第二インタナショナルの所謂公認哲學は、強度のマツハ主義的傾向と並んで新カント主義である。社會ファシストたるフォルレンダー、マックス・アドラー等々のこの種の著作は周知のものである。だがファシオ化しつつあるブルジョアジーはヘーゲルへ轉向しつつある。ブルジョア哲學者の新カント主義、マツハ主義、現象論はファシズムと有機的に合成してゐる新ヘーゲル主義により取りかへられつつある。そして現代の社會民主主義哲學者は、社會民主主義のファシオ化の一般的過程に相應してカントとヘーゲルとを結合すべく急いでゐる。

ジークフリード・マルクはこの點においては極めて特徴的な人物である。彼は極めて折衷主義的である。この『左翼』社會ファシストは舊ドイツの學校の典型的なブルジョアの教授である。マルクス主義的語法の何等の要素をも彼は持たない。その代りに、二卷から成る彼の『現代哲學における辯證法』の中では特にレーニンの哲學的見解の批判に捧げられた數頁がある。それについて以下吾々は述べるであらう。

ジークフリード・マルクは『批判的辯證法』の代表者である。『批判的辯證法』とは、彼の意見に従へば、現代ドイツの一聯の哲學的傾向のうちに現はれてゐるところの『哲學の典型』である（ヨナス・コーンの『辯證法の理論』、ヘーニヒスヴァルトの『思惟の心理學』、ベー・パウフの『理念に關する學說』、ベー・ホフマンの『妥當性に關する學說』、カツシーラーの『認識現象學』、リットの『辯證法的現象學』）。『批判的辯證法』とは、マルクの意見に従へば、將來を有つてゐるものである。この批判的辯證法の本質とは何にあるのか？ヘーゲルの辯證法とカントの批判主義との結合といふ思想の中にあるのだ。この思想をコーンは『辯證法の理論』の中で最も完全に且つ詳細に研鑽した。マルクは自己がコーンと一致してゐることを幾度となく聲明してゐる。彼は批判的辯證法を思辨的或は形而上學的辯證法に對置しており、ヘーゲル

自身を、そして現代の哲學者の中では新ヘーゲル主義者クローナーを後者の典型的な代表者と看做してゐる。

マルクと一致してゐるヨナス・コーンは「彼の（即ちヘーゲルの）辯證法の基本的な觀念を合理主義的誤謬及びその諸結果、即ち一律性、窮極性及び創造的否定から解放せねばならない」と考へてゐる。「一律性」の下にコーンはヘーゲル哲學の一元論的性質、自己の全體系を一つの單一な哲學原理から引き出さんとする彼の試みを理解してゐる。「窮極性」の下にコーンは、ヘーゲル哲學が僭稱せる絶對的完結性を理解する。最後に、否定の「創造的性質」を否定しつつ、コーンは、否定のヘーゲル的法則に對して進出してゐる。かくの如くヘーゲルに關するコーンの批判は、ヘーゲル的觀念論の反動的性質（體系の絶對的完結性）を指示しつつ、それと共にヘーゲル辯證法の若干の最も重要なモメントに對しても亦向けられてゐることを吾々は見るのである。ヨナス・コーンの側からのヘーゲル批判は不徹底な、低級な型の觀念論の觀點からの、實證論的、折衷主義的觀念論の觀點からの、批判である。

ジークフリード・マルクはヘーゲル辯證法に對するコーンの批判を「深めてゐる」。彼は、ヘーゲル辯證法の根本的缺陷は「根本的形而上學的前提の中に……自己運動の中に」あると看做してゐる。平凡な、俗流的、折衷主義的觀念論の觀點からヘーゲル觀念論を批判しつつ、マルクは同時に自己運動の辯證法に對し、對立物の鬭争の辯證法的法則に對しても進出してゐる。彼は辯證法から一切の革命的モメントを、特に「創造的否定」の役割と對立物の鬭争の結果としての「自己運動」とを去勢しようと努力してゐる。

マルクは、「批判的辯證法は吾々の思惟の領域に局限されねばならぬ」と考へてゐる。次いでマルクス主義的辯證法へ移行しつつ、マルクは全力を擧げてその「非科學性」を立證しようと努力してゐる。辯證法と唯物論との間に存在する深刻な内的連繫は、マルクには特に嫌はしいのである。彼は著書の數十頁を辯證法的唯物論攻撃に割き、マルクス主義

に關する諸問題におけるブルジョア大學教授の典型的無知を暴露してゐる。例へば彼は次の如くに書いてゐる。「マルクスにおいて吾々は、ヘーゲルの方法論の保存、その獨創的な且つ深刻な變革を、及びその方法論が衰退或は死滅すべき地盤へのその移植を見出す。マルクス自身の意識においてさへヘーゲルの用語に對する單純な「阿媚」が全史的唯物論にとつての辯證法の中心的重要性と並列的に立つてゐる。マルクスの發展の過程において（ヘーゲルの法律哲學批判」と經濟學體系の間に於いて）彼は彼によつて凡てを包括する辯證法として計畫されたる獨自の方法論を建設するに至らなかつた。それ故にマルクス主義的辯證法は、部分的にはこれらの思想を意識的に通俗化し、部分的には不本意ながらそれを淺薄化してゐるエンゲルスの概括的な解釋に求められねばならない。しかしてこの解釋の基礎の上に公認共產主義（レーニン、ブハーリン、デボリーン）として標準化されたところの俗流的辯證法が發展したのである。」

「左翼」社會ファシスト、ジークフリード・マルクが書いたマルクス主義哲學の根本問題における全くの無知を暴露したところのマルクス主義攻撃のこの愚劣を吾が讀者のために註釋し、詳細に批判する必要は殆んどないであらう。何よりも先づこゝではエンゲルスとマルクスの對置が特徴的である。マルクはこの點では「獨創的」ではない、彼はブルジョア教授及びあらゆる種類の修正主義者の側からの陳腐な、カビの生えた、だがお好みのマルクス主義「批判方法」を繰返してゐるのである。またこの社會ファシスト的「教授」、レーニンの「俗流的辯證法」に吠えつく資本主義の忠實な犬の猥談的結論は何の價値があるのか？ 最後に、マルクがレーニン、デボリーン及びブハーリンを一つの括弧の中に入れたことは非常に徴候的である。しかし彼はこれだけにはとどまらない。彼はレーニンの「唯物論と經驗批判論」を「批判してゐる」。

例へばレーニンに對して向けられた個所の一つには次の如く書かれてゐる。「レーニンの若干の暗示は（彼はレーニンの「唯物論と經驗批判論」を念頭においてゐる——エム・エム。）は實在的の辯證法の方、並に認識の批判へ（即ち認識論の領域へ）進んでゐる。即ちマツハ主義者の主觀的「經驗論的従つて非批判的觀念論に對抗しつゝ、レーニンは若干の公平な思想を言ひ現はしてゐる。しかし素朴な基礎の頑強な維持及びそれから生ずる辯證法と唯物論との配偶（結合、暴力的統一、Verkopelung）は、包括的なマルクス主義哲學のため、展開されたマルクス主義哲學のため、展開されたマルクス主義的辯證法のための地盤ではなす」。

カントとヘーゲルとを折衷主義的に結合してゐるところのカント流の觀念論者にとつては、マルクス主義の敵たるマルクにとつては、唯物論と辯證法の統一、結合、織合はせは全く許容されない。そして彼に力があるならば、彼は辯證法的唯物論に對して鬭争する。

所謂「批判的辯證法」なる「辯證法」のこの第三の形態とは以上の如きものである。今や辯證法のブルジョアの解釋の次の形態へ、所謂「悲劇的辯證法」へ移らう。

ブルジョア「哲學戰線」における極めて面白い人物は、所謂悲劇的辯證法の著者及び創始者、アルトゥール・リールトである。イデオロギーの領域においてこのブルジョア哲學者は、最大の明確さと大膽さと徹底さをもつてブルジョアジーのあらゆる絶望的な状態とその矛盾の活路なき状態を表現した。

「世界と辯證法」の中で彼はヘーゲルを非難し、ヘーゲルは矛盾を「揚棄し」、解決するが故に彼の辯證法は調和的、人道主義的性質を帯びてゐると言つてゐる。彼の觀點からすれば、「吾々にとつて最早對立の「揚棄」のための道たり得ないところの」辯證法の型が創造されねばならないのである。辯證法は、彼の意見に従へば、「無假借性」をもつて「現實の絶滅せられぬ敵對」、「生命の不調和」、「存在の混亂における現存の矛盾」を明かにすべく吾々を助けねばなら

なり。

彼は次の如く書いてゐる。「しかし辯證法のこの型（ヘーゲルの辯證法——譯者）を呼び起したところの哲學的、歴史的、精神的及び道德的諸條件は決定的に變化したが故に、吾々が現代と共に、最も偉大な危機及び二律背反に満ちた新たな精神状態に入つたが故に、吾々が擁護するところの辯證法は新たな姿容を取らねばならない。……辯證法の新たな型は悲劇的性質を持たねばならぬ。それ故に吾々は辯證法の悲劇的型について語ることが出来る。」

これらの思想を發展させつゝリーベルトは更に辯證法のかゝる型の所謂「社會的根據」を發いてゐる。彼は次の如く書いてゐる。「そしてそれと共にたゞそれ（即ち悲劇的辯證法）のみが、困難な外的及び内的經驗の克服し難い抑壓の下に最近の十年間に形成されたところの精神状態に答へるのである……。」

技術と經濟、社會的闘争と商工業の巨大な組織の時代は、古典的な知的氣分と存在に關する觀念とから吾々を遙か遠くに引き離すやうな、且つ古典主義の時代に尊敬された諸理想に直接に實行的意義を賦與し得ないやうな世界觀や人生觀を呼び起した。」

リーベルトの意見に従へば、ヘーゲルは「カントによつて到達されたところの辯證法の理解以下に立つてゐる」——彼は矛盾を隠蔽し且つ緩和したから、彼は「辯證法の本質のうちに横つてゐるところのかの深刻な悲劇」を理解しなかつた。

ところへでは相當な熱心さをもつて彼は次の如き自己の基本的な態度を強調し續けてゐる。「辯證法は吾々にとつては生命の不調和の上に、その絶滅し難い二律背反の上に益々多く光を注ぐために最も効果多き手段であり」、「辯證法の理解は吾々にとつては矛盾の調節及び緩和のための補助手段ではなくて、吾々をして次々と新たに存在と當爲との基本

的なカント的「二律背反」を承認せしめるところの全く悲劇的な態度（こことだ！ エム・エム・の現れである」と。……

リーベルトの著述のこれらの個所に對しては特別の註釋の必要は殆んどないであらう。疑ひもなく、彼の哲學的勞作は資本主義體制の危機、資本主義的イデオロギーの危機の美事なイデオロギー的表現である。

「最新の哲學も亦二千年以前と同じく黨派的である。——とレーニンは書いた。——闘争する黨派は、偽學者的な新名稱や間拔けた不偏不黨によつて蔽ひ隠されてゐる所のその本質においては、唯物論と觀念論とである。觀念論は充分に武装され、その掌中に彪大な組織を持ち、かつ哲學思想上の最小の動搖をも利用して、絶えず大衆に影響しつゞけてゐるところの信仰主義の、狡猾な精練された一形態に外ならぬ」レーニン、唯物論と經驗批判論、全集、十三卷、二九二頁。

一九〇八年に書かれたレーニンのこれらの章句は現在特に生々としてゐる。資本主義社會が××に近づけば近づく程、資本主義諸國におけるプロレタリア××が益々明瞭に門戸を叩けば叩く程、愈々ブルジョア哲學は反動的となり、大衆愚弄の益々巧妙な形態がブルジョア哲學の「博學な家令や従僕」によつて發明され、「不潔な、臭氣ファンブンたる」(レーニン)信仰主義や宗教的世界觀の曳摺廻しやの益々精練された形態が考へ出されるのである。

二つの體制の闘争が鋭く尖鋭化した現時代においては、科學及び哲學の領域における階級闘争の尖鋭化は益々明瞭な形態をとりつゝある。西歐ではイデオロギーの崩壊、危機の過程、科學や哲學のファッショ化の過程が進行してゐる。ソヴェート同盟では吾々は科學や技術の強力な繁榮、辯證法的唯物論の土臺の上での全科學の深刻な再建過程を有してゐる。

ベルリンにおいて、十月十八日から二十二日に亘り、ヘーゲル聯盟によつて召集された第二回ヘーゲル大會が開催された。前に吾々によつて特徴づけられた現代ブルジョア哲學の状態、特に現代新ヘーゲル主義の状態は大會のうちに明確に表現された。このヘーゲル大會は、ブルジョア科學の危機、崩壊、衰弱、老衰、空虚を反映した鏡であつた。これと共に大會は唯物論、マルクス主義、ボルシエヴィズム、共產主義に對する極端な戰鬥性の標識の下に進行した。ヘーゲル聯盟の指導者達はこの大會を國民主義的・ファシスト的儀式に、宗教的・ファシスト的デモンストレーションに轉化した。大會の事業の性質に關するブルジョアの及び社會ファシスト的雜誌や文献の一聯の評論を利用しよう。不偏不黨の態度の故で彼等を非難することは殆んど出来ない。これ以上よい人は吾々に見出せない。

ルードウイヒ・マルクラーゼと言ふ人が十月二十二日の「ベルリナー・ターゲブラット」に「ヘーゲルに關する諸教授」と言ふ論文を掲載し、その中で彼は大會の一般的评价を與へてゐる。彼は次の如くに書いてゐる。

「ベルリン大學にはドイツ、オランダ、イタリーからヘーゲルの門弟が集つた。一ダース以上の大報告において、彼等は、ヘーゲル學說の基本的部分、即ち現象學、論理學、國家哲學、美學、宗教哲學を敘述した。卓越せる學者たちは科學的根據と自己の哲學者に對する深い愛好とをもつて、その普遍的思惟の種々なる領域におけるヘーゲルの研究について報告した。……だがどうだ！吾々はヘーゲル學說の基礎的敘述より以上のものを僅かしか與へられてゐない。ヘーゲルは吾々の生ける意識と結びつけられなかつた。彼の思惟は吾々の時代の精神的情況と對比されなかつた。……結局吾々はヘーゲルを哲學研究室の標本箱の中に見た。……彼の學說を自由に解釋しつゝ吾々の時代の問題について彼が如何なる回答を與へてゐるかを示すために歴史と専門用語との箱の中から彼を引き出さなかつた。大會の言葉はドイツ語でもなければイタリー語でもなくて、ヘーゲル主義者の言葉であつた。」

マルクラーゼは大會に對する評價を次の如くに結んでゐる。「ヘーゲル大會は、牧師ラッソンの再び彼の宗教團體に入れたとの提言をもつて終つた。日曜の説教には結構な結論である、——だがこれが、再建期にあり精神的秩序に突進しつゝある吾々の世界にヘーゲルが與へ得るすべてであらうか。」

マルクラーゼは自己の論文の中で、現代の「教授的」科學の無援、思想的老朽を一般に、うまく特徴づけてゐる。しかし彼は、効果が完全に排除してゐる點、ファシズムの擁護及び共產主義との鬭争の意味で大會が現代へ向けられてゐない點で徒らに大會を非難してゐる。教授達は自己の主人の「社會的註文」をよく遂行してゐる。彼等は大會でマルクス主義と言ふ言葉が述べられるのを恐れた。大會の指導部はソヴェート代表の大會への出席を許さなかつた。

たゞ前述の牧師ラッソンのみが、自己の結語の中に二つの言葉で、自己の旗にヘーゲルの名を書きそしてそれと同時に「宗教は——人民の爲めには阿片である」と言ふスローガンを大膽に固守してゐるところの「宗派」に關して述べたのである。

マルクラーゼが大會のファシスト的傾向を如何に自由主義的に隠蔽してゐるかに關しては、「ヘーゲルと國家」と言ふテーマに關するジェンテイルの報告が立證してゐる。ドイツの新聞がジェンテイルと彼の報告について特に生き々と書いてゐることを指摘せねばならぬ。例へば「ハノーヴァーの使者」は次の如く書いた。「ローマから來たジェンテイル教授の演説は、吾々の時代に對するその歴史的影響の點では汲み盡し難い内容を持つたテーマである」と。ヘーゲルの旗をもつて隠蔽しつゝファシスト國家を稱讃すべくローマから特に來たところの黒シヤツ黨のこの「理論家」は如何なる「觀念」を展開したか。ジェンテイルに従へば、國家は（ムツソリーニのファシスト國家と讀め）は人倫における世界理性の實現である。國家の目的とするところは幸福ではなくして、主權を用ゐる自由としての國家の存在であ

る。個人には、國家のために××となる權利以外には國家に對する何等の權利も残されてゐない。國家に關するこの根本概念からヘーゲルは、ジエンテイレの意見に従へば、將軍や政治家以上に多くのものを作り出した。租税に關する立法でさへ、ジエンテイレの意見に従へば、ヘーゲルの精神の影響を根本的に蒙つてゐるのである。何故なら租税に關する現代の學説は、租税を犠牲として、しかも無制限の規模において市民から要求する權利を國家の爲めに認めてゐるからである。法に關するヘーゲルの學説は「尊敬すべき」ジエンテイレの意見に従へば、自然法に關する合理主義的學説を克服した。私法に關しても亦ヘーゲルは、個人によつて締結された契約のためにそれが發生し、効力を生じるといふやうな見解を克服した。

「強力な」ファシスト國家と、勤勞者に對するその××と、プロレタリアートからの一切の汗液の××とをこれ以上に明確に且つ徹底的に擁護する必要があらうか！ ジエンテイレ「教授」がその報告においてこれを解明した以上に明確に勞働者運動との闘争を説教する必要があらうか！

ファシズムの公然たる説教は、宗教、僧侶主義、神祕主義の説教と結合した。「ハノーヴァーの使者」は次の如く書いてゐる。「ヘーゲルの人生哲學が宗教哲學においてその最高點を見出したと全く同様に、今回の大會も亦大會の議長たり指導者たるラッソンの「ヘーゲルの宗教哲學」に關する報告においてその最高點に達した。」他の新聞は次の如くに書いてゐる。「ヘーゲルの宗教性は、屢々彼に負はさうと努力された如く、決して彼の個人的な便宜の爲めに彼によつて爲されたる或るものではなくて、深刻な、彼によつて幾度か表白された、彼の精神の特殊性に相應するものであるといふことをラッソンが聽衆の眞の同感の下に示し得たとき、それが精神を高揚せしめる大會の最後の瞬間であつた。」

風景を充分に描寫するためには、大會にプロシヤの文部大臣たる社會ファシスト、グリムメが出席し、プロシヤ政府

の名において大會に祝辭を述べたと言ふことを述べねばならない。自己の出席によつてこの社會ファシストは、この反動的、ブルジョア的・國民主義的大會に光輝を與へてゐる。この社會ファシストはブルジョア國家の代表者として、資本主義の忠實な従僕として、かつ積極的擁護者として大會に祝辭を述べてゐる。大會における演説の後、彼の演説において敢へてマルクスの名を述べた、しかも一般に大會において述べられたのはたゞこれだけであつたと言ふので彼は主人から叱責され、マルクスに對する嘲笑を買つてゐる。吾々は彼の演説の速記録を持たない、しかしそれは必要ではない。彼は大會について「フォールヴェルツ」に大論文——「生けるヘーゲル」を書いた。この論文は現代の社會ファシズムのイデオロギーにとつて特徴的であるから、それに若干觸れなければならぬ。グリムメは自己の論文において「社會民主主義運動の父——マルクス、エンゲルス、ラサール」に關し數回語つてゐる。ラサール主義は最悪の表現において現代のドイツ社會民主主義のうち現在充分廣汎に普及してゐる。吾々はグリムメの全論文に特徴的な空虚なオシヤベリやそれを貫いてゐるところの排外主義的・國民主義的契機や、ブルジョア新聞の精神におけるヘーゲルの稱揚には觸れないであらう。直接吾々に興味ある問題——マルクスとヘーゲルとの間の相互關係に關する彼の理解に止まることにする。即ちこの問題に關し彼は次の如く書いてゐる。「それだからとて吾々は、マルクスとヘーゲルとの間には何等の相違を見出し得ないと言はんとは決して欲しないのである。本質的に彼等を相互に區別してゐる或るものがある。……それはヘーゲルの辯證法がマルクスによつて間違つて現實に適用されてゐるといふ點にあるのではない。何故ならヘーゲルも亦辯證法を實在的過程(!!)の法則として理解してゐるから。相違は、ヘーゲルが歴史的発展に「絶對精神」においてその頂點に到達することを許してゐると言ふ點にあるのではない、マルクスやエンゲルスの必然から自由への飛躍に關する言葉は仔細に觀察すれば、これと意味の上で(!!!)同一でなくとも極めて接近したものであることが分る。同様にし

て相異は、ヘーゲルがブルジョア階級とプロレタリア階級との間の矛盾をまだ認識しなかつたといふやうな點に横つてゐるでもない。ヘーゲルはそれを極めて明確に(!!)見た。しかし彼はテーゼ——「ブルジョアジー」とアンチテーゼ——「プロレタリアート」との間の、現代社會にとつて基本的なこの對立を現代社會そのものの内部で除去する可能性があると思つたのである。……そしてこの點に、ヘーゲルとマルクスとの間の關係の評價における不一致が始まるのである。……これに反しマルクスやエンゲルスにとつては矛盾の克服は、勤勞者階級が新たな社會の基礎として、勞働の社會化に専ら相應する唯一のものたる計畫的消費經濟を自己に獲得するであらう場合にのみ行はれる。」

吾々がグリムメの論文からかゝる長い抜粹を引用したからとて、讀者は吾々を少しも罰しないであらう。社會ファシズムのイデオロギーは、特に彼等の扱ひ方におけるマルクスとヘーゲルとの間の關係に關する問題は、こゝでは自己の明確な表現をとつてゐる。グリムメは「デボーリン」流にヘーゲルとマルクスの辯證法を完全に同一視してゐる。この文部大臣の各々の錯雜した行文の中を觀念論が貫通してゐる。最後に「新社會の基礎」を「計畫的消費經濟」と見てゐるこの小ブルジョアの觀念は極めて奇妙である。

結論において吾々は更に、ヘーゲル大會の一般的性質に關するバウル・フェルトケラーと言ふ人の批評を引用しよう。即ち彼は次の如くに書いてゐる。「ヘーゲル思想の深化ではなく、より廣汎な範圍におけるその普及とその爲めの活動の繼續とが大會の結果であつた。ひとりニコライ・ハルトマンのみがヘーゲル哲學の認識價値に觸れた、そしてその言葉の最も狭い意味における哲學に關係した諸問題を提起した。その他の場合においては證明ではなくて承認を、解明ではなくて受け賣りを、主として吾々は聞いたのである。これと關聯して、あらゆる煩瑣的活動にも拘らず吾々の時代は、ヘレニズム的意識や近世が理解したやうな意味の哲學にとつては都合の悪いものであるといふことを忘るべきでない。

人々は世界と和解した、そしてそれをありのままに捉へてゐる。しかしファウスト的氣分の時代、かつてドイツ觀念論やその後のニーチエに至るまでの哲學を鼓舞したところの哲學的情熱の時代——この時代は今や明かに過ぎ去つた。」

歴世主義「現代ブルジョアジーの情熱の缺除」、科學や哲學の領域におけるブルジョアジーの老衰した無力をバウル・フェルトケラーはこれらの結論の中でうまく述べてゐる。現代のブルジョア哲學は分裂に満ちた深刻な危機にある。現代のブルジョア哲學は如何なる創造的發展の能力もない。その爲し能ふ唯一のことは、——それは資本主義的奴隸制度の正當化に役立つところの過去の種々なる哲學的流派の復活である。各種の新潮流、新流派、——これに現代哲學が満足してゐるのである。しかし、現代のブルジョアジーのイデオロギーは、自己の古典學者を理解することすら出来ないし、彼等の水準に高まることも出来ないし、ブルジョア・イデオロギーの古典學者の著述のうちにある眞に貴重な、歴史的生命的なものを理解することも出来ない。これは驚くに足らない。何故ならブルジョアジーの發展における現代の歴史的段階は、ブルジョアジーが革命的な、上向的な、歴史的に進歩的な階級であつた時代とは根本的に異つてゐるからである。

現代のブルジョア哲學は神祕論、赤裸々な僧侶主義の懷の中にあり、最も粗野な宗教的偏見の捕虜となつてゐる。現代の新ヘーゲル主義は完成にファシズムに奉仕してゐる。外的博識や煩瑣な錫箔や大學メッキがその完全な思想的老衰と無力とを蔽ひ隠してゐる。第二回ヘーゲル大會はこれらの全過程を全く明確に立證した。

たゞプロレタリアートのみがブルジョア社會の物質的生産力のみならず、彼が創り出した價値の唯一の相續人である。彼はまたブルジョア文化——科學、哲學——によつて創造された一切の優秀なるもの唯一の法定相續人である。しかしプロレタリアートは單純にこの遺産を相續するのではなく、唯一の一貫した革命的世觀の基礎の上に、——辯

證法的唯物論の基礎の上に、全ブルジョアの廢物を無慈悲に掃蕩し、一切の有害かつ反動的な特性や方面や契機を放棄しつゝ、それを改造するのである。

三

ヘーゲル哲學は他の一切の哲學と同じくその時代の産物である。それはブルジョア革命の時代の産物であり、偉大な理論的建設である。それは、十八世紀末から十九世紀の最初の四半期にかけての階級闘争のイデオロギー領域における反映である。ヘーゲル哲學はフランス大革命時代の産物である。

ヘーゲル辯證法——これは彼の學說の革命的方面であり、これは「革命の代數學」である——は論理學の抽象的範疇において、この歴史的時代の革命的過程を理論的に一般化したものである。あらゆる發展の基礎としての對立物の統一と闘争に關する、觀念論的であるとは言へ、やはり革命的なヘーゲルの學說の上に、飛躍に關するヘーゲルの學說の上に、否定の否定に關する彼の革命的學說の上に、革命時代、ブルジョア革命時代のスタンプが捺されてゐる。

時代の革命闘争の直接的影響はヘーゲルの「精神現象學」のうちに、彼のこの最も革命的な著述のうちに感じられる。

ヘーゲルは常に狂喜してフランス革命を批評した。「歴史哲學」のうちに彼はそれについて次の如くに書いた。「太陽が空に輝き、その周圍を遊星が回轉して以來、人間が逆立ちしたと、即ち思想の上に立つて現實を建設することは決してなかつた。アナクサゴラスが初めてヌース即ち理性が世界を支配すると言つた。しかし今ややうやく人間は、思想が精神的現實を支配せねばならないと言ふことを承認するに至つた。

これは輝かしい日の出であつた。一切の思惟する人間は、新時代の到來を喜んで歓迎した。今にしてやうやく神的なものと世界との和解の時が来たかのやうに或る莊嚴な感激がこの時代を支配し、精神の或る熱情が世界を震撼した」(ヘーゲル歴史哲學一八四〇年、五三五頁)。

フランス革命のこの特徴づけの中に、しかし、全ヘーゲルがあるのである。即ち、觀念論者ヘーゲルも同時に辯證法論者ヘーゲルも、彼自ら言つた如く「革命的憤怒の爆發」がそのうちに感ぜられるところの革命思想家ヘーゲルも、反動家ヘーゲル、觀念論者ヘーゲル——即ち彼の認むるところに従へば、「方法よりヨリ困難な思想活動」を要する、そして結局プロシヤ王國の正當化に向けられた體系の創始者たるヘーゲルも。

マルクスはカント哲學を特徴づけつゝこれは「フランス革命のドイツ的理論」であつた、と書いた。この特徴づけは全ドイツ古典哲學、特にヘーゲルに適用され得る。この特殊な特徴づけの本質は何にあるか、ドイツ的革命理論の本質は何にあるかをエンゲルスはフォイエルバッハ論の中で明かにしてゐる。彼は同書に次の如く書いてゐる。

「十八世紀におけるフランスの場合と同じく、十九世紀におけるドイツの場合も、哲學上の革命が政治的崩壊を誘致した。だがこの兩者の場合ほどに違つて見えたであらう！ フランス人は公認されてゐた學問全體と、教會と、時には國家とも、公然と戦ひを行つた。彼等の著書は國外のオランダやイギリスで印刷され、それにまた彼等自身が屢々何時バスターユ牢獄に投げ込まれるか分らなかつた。これに引きかへドイツ人は——大學教授で、國家の任命を受けた青年の教師で、彼等の著書は公認の教科書で、おまけに、全發展の終局的體系たるヘーゲル哲學は、謂はゞプロシヤ王國國有哲學の地位に經上つてゐたのだ！ こういう大學教授のかけに、彼等の衒學的な曖昧な言葉のかけに、そしてこういう不活潑な退屈極まる時期の中に、革命が潜んでゐたといへるだらうか？」(フォイエルバッハ論、岩波版、三〇頁)。

フランスのブルジョアジーは封建制度の城塞を強襲し、貴族に對する革命的テロルを組織し、全世界の封建的反動と闘争した。封建制度やプロシヤのユンケルとの闘争において脾胃い、無力なドイツのブルジョアジーは、實踐の上でプロシヤ王制と妥協し、この妥協を理論的に基礎づけたために、自己のイデオロギーにおいて、精神の領域、思惟の領域に革命を創始した。ヘーゲルの『法律哲學』は——フリードリッヒ・ウイールヘルム三世の王制を彼の哲學體系の絶対的精神によつて神聖化してゐる著述である。

哲學の發展に痕跡を残し、例へばヘーゲル哲學の如くこの發展における一定の歴史的段階を代表してゐるところの巨大な哲學體系は、自己の全時代の階級關係のイデオロギーの領域における産物反映表現である。この意味において我々は、ヘーゲル哲學をブルジョア革命の全時代のイデオロギーであり産物であると言ふのである。しかしあれこれのイデオロギーは自己の生國の階級關係や階級闘争の状態から生長する。十八世紀末から十九世紀初頭にかけてのブルジョア革命の全時代の産物であるヘーゲル哲學は、これと同時にドイツの諸條件、ドイツの階級關係の産物である。ヘーゲルは十九世紀前半におけるドイツ・ブルジョアジーのイデオロギーである。彼の體系の特殊な反動的結論はこれによつて説明される。エンゲルスはフオイエルバッハ論に次の如く書いた。「このやうに、體系なるものがある諸々の内的必要は、徹頭徹尾革命的な思惟方法をもつて極めて穩順な政治的結論が生み出された所以を語るに充分である。こういう特殊な形の結論が生まれたことは、慥かに、ヘーゲルがドイツ人だつたこと、並に同時代者たるゲーテと同じく、ヘーゲルに一片のバリサイ人癖が残つてゐたことに起因するものである。ゲーテもヘーゲルもそれ／＼自分の領域ではオリンピアのツォイスだつたが、兩人ともドイツのバリサイ人たることを全然脱し切らなかつた」(フオイエルバッハ論、岩波版、三六頁)。

ヘーゲル哲學を終始一貫してゐる基本的矛盾——その方法と體系との矛盾——の社會的祕密は、その一般的特性においては以上の如きものである。「しかしこれは——とエンゲルスは書いてゐる——ヘーゲル體系の全教理的内容を絶対的眞理と認め、そして全教理の内容を破壊する彼の辯證法的方法と矛盾することを意味した。」

レーニンがヘーゲル辯證法を發展に關する最も全面的な、最も豊富な内容を有する、最も深刻な學説として、ドイツ古典哲學の最大收穫であると考へた。ヘーゲルの辯證法はマルクス・エンゲルスによつて顛倒せしめられ、唯物論的に改造された。唯物辯證法はマルクス主義の『根本的理論的基礎』である。

私の課題には今ヘーゲルの全體の詳細な特徴づけを與へることは這入つてゐない。私は、觀念論的辯證法の理論の局限性と内的矛盾の分析と曝露によつて、マルクスやエンゲルスがこれらの矛盾を如何にして克服してゐるか、マルクスやエンゲルスが如何にして唯物辯證法の理論を創設してゐるか、またレーニンが如何にこれを發展させてゐるかを示す爲めに、觀念論的辯證法の理論としてのヘーゲル學説を特徴づけてゐる若干の根本的契機に立ち入るだけである。

疑ひもなく、彼の展開せる觀念論的辯證法理論である『論理學』は、フランス唯物論者の輝ける群星以後の全世界哲學文獻における最大の著述である。

ヘーゲルの觀念論的辯證法理論の根本的な特徴的特性は何處にあるか？吾々はこゝではこれらの全問題の中で、この理論の本質並に唯物論的辯證法理論の根本問題を理解するに必要なものゝみを指摘せねばならない。これは次の如きものである。(1)ヘーゲルの絶対的、客觀的觀念論。(2)觀念論的基礎の上での、ヘーゲルにおける、論理學と認識論の統一、同一。(3)觀念論的基礎の上での辯證法的法則の全面的描寫。(4)ヘーゲル體系全體、特にヘーゲル『論理學』の根本的内的矛盾。ヘーゲルが絶対的觀念論者であることは誰でも知つてゐる。彼の觀念論の絶対性は、彼の全哲學體系の中心に、彼の

全論理學の中心に絶対理念の發展がある點にある。次の如く言ふことが出来る。ヘーゲル哲學、彼の體系全體は本質上或る唯一の對象を持つてゐる、そしてこの或る唯一の對象とは、その現象や實現の種々なる形態や容姿における絶対理念の發展である。

ヘーゲルは客觀的觀念論者である。ヘーゲルは主觀を、これが他の哲學體系において、特にカント等々において理解されてゐるとは全く別に理解してゐる。ヘーゲルの主觀は具體的な經驗的な人間ではない。ヘーゲルの主觀は局限された個人的意識をもつた個人ではない。ヘーゲルの主觀は有限的な人間精神ではない。彼の哲學の主觀は客觀化された意識であり、無限的の・思惟する精神である。即自及び對自の思想 (Gedanke an und für sich) である。ヘーゲルの主觀は有限的な人間精神の中にも現はれてゐる絶対理念である。それこそが彼の全「論理學」の根本的對象である。この意味においてヘーゲルは、客觀的、絶対的觀念論者である。

主觀と客觀の同一の基礎の上に、客觀的、絶対的觀念論の基礎の上に、論理學とは何かといふことを彼は如何に理解してゐるか？

「論理學」の中で、何が論理學の對象であるか、また論理學はそれ自身何を現はすかを次の如くに規定してゐる。

「故に純粹科學は意識の對立からの解放を前提する。純粹科學は思想——思想が同様に事象それ自體である限り——を含んでゐる、又は純粹科學は事象それ自體——事象それ自體が同様に純粹思想である限り——を含んでゐる。科學としては、眞理は、自己を發展させる純粹自己意識であり、そしてそれは、即自且つ對自的に存在してゐるものが知識された概念であり、又概念そのものが即自且つ對自的に存在してゐるものといふ、自體の形態をもつてゐる。

此の客觀的な思惟は實に純粹科學の内容である。従つて、純粹科學は形式的でなければ、現實的な眞の認識となるた

めの質料を缺いてゐるものでなく、却つて寧ろ、純粹科學の内容こそは唯一の絶対的に眞なるもの、又は、やはり質料といふ言葉を用ゐたいならば、唯一の眞實の質料である。而も、此の質料は寧ろ純粹な思想であつて、従つて絶対的な形式そのものであるから、此の質料にとつてはその形式は外的なものではない。従つて、論理學は純粹な理性の體系、純粹な思想の王國と考ふべきである。此の王國は外被を纏はないで、即自且つ對自的に在るが儘の眞理である。それ故に、吾々は此の内容は自然と有限的精神との創造以前にその永劫の本質に於て在るが儘の神の表現であるといふことが出来る」(ヘーゲル「論理學」グロクネル版第四卷、四七頁)。

この極めて長い抜粹の中には、論理學のヘーゲルの解釋の本質が與へられてゐる。こゝでは彼の哲學の絶対的客觀的觀念論が非常に明白に表現されてゐる。彼の辯證法が、そしてそれと共に彼の體系の内的有機的矛盾も亦現はれてゐる。ヘーゲル論理學のこの特徴づけから何よりも先づ次の結論を引き出すことが出来る。ヘーゲルは觀念論的基礎の上に、論理學における内容と形式との問題、歴史的と論理的、抽象的と具體的等々の問題を解決せんと試みてゐる。論理學のこの規定から、論理學はそれ自身眞理であり、即自且つ對自的に發展する思惟の内容であるといふことが出てくる。四圍の外界は、ヘーゲルに従へば、本質的にはたゞ應用論理學に過ぎない。歴史も亦應用論理學である。自然と社會は——同じものである。到る處で彼は、マルクスが言つた如く、「特殊な對象の特殊な論理學」を把握する代りに論理學の諸規定を發見しようとして試みてゐる。マルクスの若干の特徴づけを、ヘーゲルの觀念論に對する彼一流の極めて深刻な批判が與へられてゐるところの彼の「ヘーゲル法律哲學批判」から引用しよう。ヘーゲルの體系と方法と特徴づけつゝ、マルクスは次の如くに書いてゐる。「唯一の關心は各の要素のうちに——或は國家の要素或は自然の要素のうちに——「理念」一般や論理的理念を發見する點にのみ向けられてゐる。眞實の主體、例へばこゝでは「政治組織」は理念の

單純なる名稱となつてゐる。そして吾々は眞實の認識の外觀を有するに過ぎない。これらの主體は把握されないままである。何故なら彼等の特殊性のうちに把握されない規定として殘されてゐるからである』(マルクス・エンゲルス全集ドイツ語版、第一卷一二頁)。マルクスは、ヘーゲルの觀念論の結果生じたところの彼の構成の空虚や、又辯證法的方法にも拘らず、彼の觀念論的體系と完結的、閉鎖的體系への傾向とから生ずるところの彼の構成の氣まぐれを暴露してゐる。

マルクスとエンゲルスは、偉大なドイツ觀念論者辯證法論者の體系の中の『生けるもの』と『死せるもの』との内部的鬭争を天才的に發見し、ヘーゲル哲學の中の『生けるもの』の最も深刻な解釋を與へた唯一の人々であつた。ヘーゲル觀念論並に觀念論一般の弱點を特徴づけてゐるマルクスの『ヘーゲル法律哲學批判』の一個所を更に引用しよう。『具體的内容、眞實の規定は形式的要素として現はれる。全く抽象的な形式規定は具體的内容として現はれる。國家の規定の本質は、それが國家の規定であるといふ點にはなくて、それがその最も抽象的な形態において論理學的・形而上學的規定として觀察され得る點にある。關心は法律哲學にはなくて、論理學にある』(マルクス・エンゲルス全集ドイツ語版、第一卷四一八頁)。

前に引用したヘーゲルの論理學の規定から吾々は次のことを見た。即ちヘーゲルはその觀念論的地盤の上に『論理學』における形式と内容の問題を解決しようとした。このモメントをレーニンは、ヘーゲル論理學を特徴づけながら幾度となく指摘してゐる。例へばその中でヘーゲルがカントを批判してゐるところのヘーゲルの命題に従へば、『それらが『外的形式』であるといふことは誤りである、『形式は内容における形式にすぎないが、内容そのものではない』。レーニンは指摘してゐる。『ヘーゲルは、その中で形式が内容そのものと不可分に結びついてゐる生ける眞實の内容の内容的形式であるやうな論理學を要求してゐる』(レーニン資料集、第九卷、三九頁)。思惟的觀察には『外的形式』のみではなくて、

更に「内容」が引き寄せられねばならないし、『論理學の考究への内容のこの引き入れと共に、物ではなく、物の概念が對象となる』と言ふヘーゲルの思想を更に引用しつゝ、レーニンはこれらのモメントの重要性を指摘し、同時にこの問題の極めて深刻な唯物論的取扱ひを與へてゐる。即ち『物ではなくて、その運動法則を唯物論的に』——と彼は書いてゐる(レーニン資料集、第九卷、四三頁)。

形式と内容の問題をかくの如くに提起しつゝヘーゲルは、形式論理學の極めて興味ある且つ深刻な批判を與へてゐる。形式論理學の批判に捧げられたヘーゲルの個所、特に彼が形式的判斷、推論及び形式的概念を分析してゐるところの彼の『論理學』の第三部、及び對立物の統一に關する章を含む第二部——は注目すべき個所である。

形式論理學のこの批判は彼にありては如何なる線に沿うて進行してゐるか？ 彼は形式論理學の空虚を形式と内容との分離を批判してゐる。彼は、形式論理學はたゞ思惟諸形式の空虚な列擧に過ぎない、形式論理學は一つの形式の他の形式への移行を知らない、これらの形式の運動を知らないと言つてゐる。彼は形式論理學の無生命性と凍結した假死状態を指示し、これに對立して彼の體系全體と結びついてゐる自己の概念解釋を提出してゐる。ヘーゲルの概念は形式論理學的概念の對蹠物である。しかしこれは觀念論的對蹠物である。ヘーゲルにありては概念は形式と内容、主觀と客觀の同一性であり、存在の思惟への完全な還元である。ヘーゲルの概念は現實の造物主(Deminger)である。彼の概念は對立物の觀念論的統一である。彼の言ひ表はしによれば『輕蔑と嘲笑とに價する』ところの、形式論理學の無生命性、死せるが如き空虚、を克服せんがために、ヘーゲルは概念に生命、對立物の内的鬭争、自己運動を附與した。形式主義を克服せんがためにヘーゲルは、自己の哲學の中で、概念に關する自己の學說の中で思惟形式を内容と結合した。しかしこの結合は、概念が對象的、客觀的世界を克服し、食ひ盡すやうな結果となつた。

形式論理學の靜學的な空虚な、死せる諸形式に一撃を與へるために、ヘーゲルはそれに自己運動を附與した。しかしこれは現實の造物主としての概念の自己運動である。カントに特徴的な形式と内容の二元論を批判し、克服せんがために、形式の『外面性』を拒否するために、ヘーゲルは論理學の觀察に内容を引き入れてゐる。しかしこの内容は全く、客觀的物質的過程の内容ではない。これは思惟内容であり、精神的内容である。

かくの如くヘーゲルが自己の『論理學』の中で與へてゐる形式と内容の統一は、觀念論の地盤の上での統一である。形式論理學の空虚な形式主義と比較すれば、カントの先天的形式と比較すれば一歩前進であるが、ヘーゲルはやはり問題解決の外觀を與へてゐるにすぎない。たゞ辯證法的・唯物論的觀點のみが、たゞ徹頭徹尾マルクス主義的理解に貫かれたる論理學のみが、たゞ對立物の統一のかゝる觀點のみが形式と内容の問題を眞實に解決する。これと關聯して論理學に對するレーニンの規定の深刻な内容が理解され易くなる。『論理學は——と彼は資料集第九卷、四一頁に書いてゐる——思惟の外的形式に關する學說ではなくて、『全物質的、自然的及び精神的事物』の發展、即ち世界の全具體的内容とその認識の發展の法則に關する學である、即ち世界の認識史の總決算、總和、結論である。』

『辯證法の問題に就て』の中で、レーニンは、『辯證法は(ヘーゲルの及び)マルクス主義の認識論である』と指示してゐる。この指示の基礎の上にメンシェヴィキ化しつつある觀念論者は、ヘーゲルにおけるこの問題の解決とマルクス主義におけるそれとを同一視した。しかるにかゝる同一視は二重に誤つて居り、それ自身マルクス主義の觀念論的修正を現はしてゐる。ヘーゲルにおける認識論としての辯證法は觀念論の地盤の上に與へられてゐる。ヘーゲルにあつてはこの最も重要な問題の觀念論的解決があり、マルクス主義においてはその唯物論的解決がある。ヘーゲルにとつては辯證法は觀念論の認識論であり、マルクス主義にとつては辯證法は唯物論の認識論であると言ふ點に問題がある。この根

本的對立に際し、共通點はここではヘーゲルとマルクス主義は辯證法と認識論とを分離しないし、又對立させない點にある。ヘーゲルもマルクス主義もこの問題への接近に際して歴史性の手本を與へてゐる。しかしヘーゲルにあつては觀念論的歴史性であり、マルクス主義においては眞實の歴史性、唯物論の基礎の上の歴史性である。

ヘーゲルにありてはこの問題の解決の意味は何にあるか？ヘーゲルは近世哲學史において、反歴史的な、形而上學的な、謂はゆる批判的な、カントの認識論に最も猛烈な打撃を與へた最初の人である。マックス・アドラーに至るまでの多くの新カント主義者が、この問題でカントの立場に完全に立つ限りは、ヘーゲルの批判は彼等にも亦向けられてゐる。

カントは、哲學の根本問題の取扱において、認識問題の取扱において、文學の領域でコペルニクスによつて完成された變革と比較され得るやうな歴史的事業や變革を爲し遂げたと言ふことを前提とした。この變革の本質は、カント自身の意見に従へば、彼が先天的な、あらゆる認識過程の前に前以つて與へられた認識論を創造したこと、彼が超歴史的な、認識過程外に基礎づけられた認識論を創造した點にある。カントはこの場合知識や認識を基礎づけんがためには認識過程を捨象することが必要である、前以つてその限界を指示することが必要である、と言ふ全く虚偽な前提から出發した。一言をもつて言へば、正にこの點で彼を批判したヘーゲルの確な表現に従へば、彼は水泳を學ばんと欲したのである。

ヘーゲルはこの點ではカントに比較し巨大な一歩前進を爲してゐる。自己の絶對的、客觀的觀念論の基礎の上に彼は、認識の歴史的過程を考慮するところの認識論を與へやうと欲した。自己の觀念論の基礎の上に彼は、人類の全世界史的經驗と歴史的認識の論理的形像を與へんと試みてゐる。ヘーゲルの『論理學』のこの方面をレーニンは自己の梗概の中で幾度となく指摘してゐる。資料集、第九卷、七九頁に彼は次の如く書いてゐる。『ヘーゲルが概念の自己發展を全哲學史